

2023年4月1日

TLP 中国語 2022年度台湾研修報告書

2023年2月17日から2月24日まで計8日間に渡り、「TLP 中国語 2022年度研修」を九州大学と合同で実施した。本稿は、研修に参加した学生たちによる報告文、感想文を時系列順にまとめたものである。

第1班 ハイテク産業

阿部慧人、渡辺誉、釜土真周、山下泰征、飯田奈那

第2班 日本統治時代の鉱業

有馬万奈、渡邊滉太、入澤大地、中島茉保、田中渚、阿部想

第3班 建築×アート×文創

村上真人、田島みのり、ジェニンズパトリック蛍、印藤直晃、松浦拓夢、佐藤瑠璃

第4班 台湾社会のダイバーシティ

松浦成美、出水喜太、杉田爽、木佐貫祐香、吉田芽唯、松浦知希

第5班 博物館

杉本英輝、鍵本実佑、木村真子、宇野優歩、吉田小乃果、丸山俊輔

合計：29人

引率教員：阿古智子

TA 横山大雄（東大博士課程）、陳愛理（九州大学）

台湾研修 2022 日程表

2/17 (金)	<p>羽田から台北へ。台湾松山国際空港到着後、台湾高速鉄道で台南へ移動。九大の台湾フィールドワークの 학생さんと合流。</p> <p>BR 189Y 羽田 1035—台北 1330*BR (エバー航空)</p> <p>台北から新北市へ移動。</p> <p>【15:30-18:00】新北市青年局で CoFacts の Billion Lee と disinformation や China Index について議論。終了後、高速鉄道で台南へ。</p>	台南泊
2/18 (土)	<p>【午前】国立台湾文学館 (Nikky Lin 教授らによるレクチャー)</p> <p>【午後】台南の街や歴史を学ぶツアー(台文館、鄭成功祖廟、澄臺遺址、蝸牛巷、大井頭、萬福庵、赤崁樓、祀典武廟、葫蘆巷、祀典大天后宮、石精臼/米街廣安宮、新美街、寶美樓など)</p> <p>【夜】花園夜市、林百貨店など</p>	台南泊
2/19 (日)	<p>【午前】グループワーク</p> <p>【午後】国立台湾歴史博物館</p> <p>【夕方】台湾高速鉄道で台北へ移動</p>	台北泊
2/20 (月)	<p>【午前】総統府+グループワーク</p> <p>【午後】グループワーク。</p> <p>*サポート役の台湾の 학생さんが数名付き、教員とともに行動</p>	台北泊
2/21 (火)	<p>【午前】228 国家記念館</p> <p>【午後】景美人権文化園區 (白色テロの歴史について学ぶ)</p> <p>【夕方】在台日本メディアの支局長をお招きして講義 (共同通信支局長)</p>	台北泊
2/22 (水)	<p>【午前、午後ともに】グループワーク</p> <p>【夜】夜市など</p>	台北泊
2/23 (木)	<p>【午前】午後の発表の準備、帰国前の PCR 検査 (ワクチン3回未接種者)</p> <p>【午後】日本人学生と台湾人学生の交流会 (台湾師範大学にて)</p>	台北泊
2/24 (金)	<p>台北から羽田へ。</p> <p>BR 190Y 台北 1605—羽田 1955</p>	

J2-220137
文科二類1年
渡辺誉
2023/03/02

2023年2月17日 1日目
Billionさんによるdisinformationについてのワークショップ

台北についてそうそう、ワークショップの行われる会場まで歩いた。Cofactの方々は大変歓迎してくださった。台湾に来るまでの移動で疲れており、また、お腹がすきすぎて頭がくらくらしていたので、頂いたタピオカミルクティーとチキンがとてもおいしく感じた。Billionさんのお話は興味深かった。日本では、あまりDisinformationによる問題は深刻化していないように感じるが、中国が近く、共産主義と民主主義の政治的な対立が国内にある台湾では、Disinformationに対する問題意識が強いのだなと感じた。情報の正確さや偏りのなさについては、自分も日頃から注意しておかなくてはと思った。Billionさんが英語で、私たちはもはや中国人ではない、というようなことを強めに言っていたのが印象的だった。台湾人としての意識を感じ、台湾と中国を同一視してはいけないなと思った。英語で行われたため、講義への理解は5割程度だった。クラスメートが英語で質問をたくさんしていて凄いなと思った。自分もそのように英語で自信をもって質問を出来るようになりたい。

Billion Leeさんのワークショップ

Billion Leeさんによるdisinformationのワークショップに参加した。台湾では年配の方を中心に、誤った情報が広がるdisinformationが問題になっており、特にLineなどの閉じたSNSでメッセージや写真や動画が拡散されていると述べていた。

Billion Leeさんは、Lineで送られてきたメッセージの正誤性をチャット形式で判定できるCofactsというサービスを運営している。実際の仕組みとしては、利用者がLineで送られてきたメッセージをCofactsのチャットボットに転送し、それに編集者が返信するというものだ。編集者の返信を絶対的に正しいと位置付けるのではなく、その返信に対して自分の考えを共有することができるようになっている。また、最近はAIをシステムに導入しているとも述べていた。

誰でもサービスを利用できるだけでなく、編集者になることができる点が大きな特徴だろう。Billion Leeさんが挙げたdisinformationの例はどれも意味をなさないものが多く、そのようなデマが広まっていることに問題の深刻さを感じた。なので、その都度メッセージが正しいか否かを判定するだけでなく、利用者に返信を鵜呑みにしないことやファクトチェックへの参加を促しているのが興味深く、重要であると思った。また、そもそも特に政治関連のメッセージが多いとのことだったので、メッセージが真実かフェイクニュースであるかを二元的に区別するのは難しいのだろう。

最後に、個人的な感想ではあるが、このような成果を定量的に確認することが難しい仕事は大変そうだなと思った。台湾の人々のメディアリテラシーを育むという目標において、Cofactsが良い影響を与えていることはもちろんだが、実際の影響を評価するのは難しいと感じたからだ。

新北市政府青年局施設訪問記録

Cofacts共同創業者のBillion Lee氏に案内され、松山空港から新北市政府青年局の施設へと向かった。講義会場には台湾名物のタピオカミルクティーが用意され、青年局の職員が出迎えてくれた。

到着後、Cofactsを紹介するBillion Lee氏の講義が英語で行われた。

Cofactsはクローズドなメッセージ・アプリにおけるファクトチェックを普及させるために運営されているオープンソース・プロジェクトであり、誤情報の主たる拡散者であるチャットアプリの利用者にとって使いやすい、組み込み式のチャットボットの開発を行っている。講義中、Billion Lee氏はプロジェクトのオープンソース化がもたらす利点を強調し、情報の真偽判断にかかる全てのプロセスを民主的に遂行する非集権的運営や、少ない要員で世界中にプロジェクトを拡大できることをその例として挙げた。



(講義風景。講義資料は日本語で用意されていた)

講義終了後、学生からの質疑応答が英語で行われた。質問の内容はプロジェクト管理の手法や真偽判定の技術をはじめ、プロジェクトの財源から台湾における情報リテラシー教育に至

るまで多岐にわたり、その全てにBillion Lee氏が回答した。また、青年局から台湾名物の炸雞排によるもてなしがあった。



(タピオカミルクティーと炸雞排)

質疑応答後はBillion Lee氏や青年局職員と学生との交流の時間がとられ、相互に記念品を贈呈したほか、日台の学生生活や将来の進路について取り上げ、三々五々に寄り合って和やかに歓談した。



(記念品贈呈の様子)

18:00ごろ解散し、板橋駅から高速鉄道で台南に向かった。

以下に新北市政府青年局のプレスリリースを添付する。

<https://www.youth.ntpc.gov.tw/home.jsp?id=d127e0ce0f4f407b&act=be4f48068b2b0031&dataserno=ede57b52354b3ec5393174a2b3466be0&mserno=219991e3bd9730ca3117ccd02f9f8ab1#>

2023 年 TLP 台湾研修・事後課題

東京大学文科一類 1 年 宇野 優歩

1. 記録

(1) 台南文学ツアーについて (2023 年 2 月 18 日・午後)

2 月 18 日は台南にある国立台湾文学館を見学し、活動に参加した。午前中の参観・講演に続いて、午後は「文学をめぐるツアー」として、台南市内でポイント・ハンティングを行った。

このゲームのルールは、回るべきスポットがいくつか決められていて、また各スポットでこなすべきチャレンジも決められており、制限時間内になるべく多くの条件を満たして高得点を獲得することを目指すというものである。具体的なスポットとして、私たちのグループは、二二八事件紀年館、孔子廟、司法博物館、林百貨店を回った。各ポイントでは、例えば二二八事件紀年館では展示のうちに「自由」という言葉がいくつ見つかるかをカウントしたり、孔子廟で礼拝の様子を写真に撮ったりするといったアクティビティが用意されていた。それらに挑戦して、証拠となる写真を LINE 経由で送信し、最終的な合計点数が算出される仕組みだった。

また、史跡・博物館をめぐるだけでなく、地域の料理を食べたりその中身を当てたりするようなアクティビティも含まれていた。興味深かったのは、カット・トマトを青果店で注文して、それに添えられるソースの材料を当てるという問題である。ガイドの方によると（たまたま私たちの班にはガイドの方が同行してくれた）、そのソースはトマト以外にも生の果物を食べる時に使う台南の伝統的なレシピのようだが、中にはショウガ、大豆ペースト、砂糖（ここまでは自分たちでもわかった）に加えてリコリス（甘草）が含まれているそうだ。気温が高く日差しも厳しくさながら夏のような気候だったため、さっぱりとしたソースとよく冷えたトマトの組み合わせが体にしみた。

前述のように、私たちの班には午前中に文学館内を案内していただいたガイドの方が付き添ってくださった。地図を見ながら手間取る私たちを尻目にエネルギッシュに先導してくださり、私たちの班はトップの得点を獲得することができた。賞品として台南にまつわる図柄（清朝期の台湾府城の地図など）が描かれたクリアファイルをいただいた。

最後にお世話になったガイドの方と記念撮影をし、解散した。ホテルに一度戻った後、花園夜市で夕食を食べた。

2023/03/04

2022 年度台湾研修課題

宇野優歩 (J1-220109)



▲ トマトと生姜ソース



▲ お世話になったガイドの方と

(2) グループワークについて (2023 年 2 月 19 日・20 日・22 日)

・19 日午前 (台南)

19 日の午前中は台南での自由行動であった。私たちの班は以下のように安平に行き、その後台南中心部に戻り観光した。

8:20 くらいにホテル近くのバス停から「原住民文化会館」のバス停まで 20 分ほど、路線バスに乗って移動した。休日のため乗車代が無料だった。バス停から安平の老街の街並みを楽しみつつゼーランディア城 (安平古堡) に向かった。オランダ人が 17 世紀に作った要塞であり、鄭氏政権、清朝統治期、日本統治期の各時代の遺物を見ることができる。世界史で聞いたことがある名前であり、またなかなか自分では台南に行く機会はないから、とてもうれしかった。特にオランダ時代のレンガ壁がわずかに残っている部分を見たときの感慨はひとしおだった。

ゼーランディア城を見学後、歩いてバス停へと戻る途中、派手な音楽が聞こえてきたのを見に行くと近くの廟に祭りの行列がいた。その後、天后宮 (台南最古の媽祖神をまつた廟) を見学していると、その行列がやってきた。ガイドのおばあさんが「自分の孫が馬に乗ってきた」と誇らしそうに紹介してくれたが、どうやら一年に一度の媽祖を奉る祭りの日に当たったらしく、その方の孫は高い地位にある道士として白馬に乗馬して行列を率いてきたのだ。その道士 (とおばあさん) たちが一連の拝礼の儀式をするのを見学して帰

2023/03/04

2022 年度台湾研修課題

宇野優歩 (J1-220109)

った。

安平から台南に戻り、急いで赤崁楼を見学した。中国風の建物に置き換わってはいるものの、オランダが建築したプロヴィンティア城として始まった経緯がある建物であるから、オランダが台南に建築した大きな城2つをともに見学したことになる、まさに台南の歴史の重層性を感じることができた。

なお、午後に見学した歴史博物館の展示に、午前中にまさに見学した媽祖の行列の模型があり、偶然の一致を感じた。



▲オランダ時代の壁



▲インタビューされる道士

・ 20 日午後（台北）

20 日の午後は国立台湾大学と華山 1914 文創園區に行った後、客家料理を食べた。

国立台湾大学に行く前に、公館駅周辺で滷肉飯を食べた。とてもおいしく、店内が台湾大学の学生らしき若者でにぎわっていたのも納得だった。台湾大学のキャンパスは広々しており、トレードマークのヤシや、たくさん生えているガジュマルのおかげで南国感もあった。建物の多くは東大の建物（例えば校史館は、中は駒場の 1 号館、外見は 900 番講堂に）に似ていたが、キャンパス全体の雰囲気はもっとさっぱりしたもののように感じた。キャンパス内にある人類学博物館、動物学博物館を見学した。

その後 MRT で善導寺駅まで行き、華山文創園區を見学した。おしゃれな書店やカフェ、ショップなどがたくさんあり面白い場所ではあったが、発表の際に 3 班のメンバーも言っていたように、観光地化されたテーマパークという印象が強く、特段興味深いことはなかった。

2023/03/04

2022 年度台湾研修課題

宇野優歩 (J1-220109)

台湾の学生の方に事前に予約をしていただき、18:30 から客家料理店で夕食を食べた。独特な風味があると聞いていたので食べづらいのではないかと若干心配していたところもあったが、杞憂に終わった。どの料理もとても美味しく、また台南の料理に比べて甘さが控えめで塩気が強いこと、また八角などの香辛料の風味があまり強くないことなどから、むしろ食べやすい料理に感じた。特色あるものとしては、ラードで作ったたれがかかったご飯やレモン風味のソースが添えられた蒸し鶏、すりつぶした米やその他の雑穀が入ったとろみのあるお茶などがあった。

時間が余ったので台北 101 を下から見上げに行き、22:00 くらいにホテルへ戻った。



◀ヤシの木が美しい台湾大学

・22 日 (台北)

22 日は終日グループワークで、3 つの博物館を回った。

午前中は国立台湾博物館を見学した。総督府の博物館として日本統治下で作られ、その後省立博物館を経て現在に至るものである。「発見台湾」と題された常設展示を見学したが、台湾の動植物の標本・剥製が多くあり興味深かった。

昼食は近くの路地にある店で、再び滷肉飯とちまき（肉粽）を食べた。ちまきは普通イメージする笹に包まれたものではなく、豚の角煮がのった三角形のおこわに若干香辛料のきいた餡がかかったものだった。ほかの人は米麺や豆花なども食べていたがおいしそうだった。

午後は MRT とバスで 1 時間近く移動して、故宮博物院に行った。故宮の宝物として有名な二大トップは「翠玉白菜」と「肉形石」だが、今回は後者を見ることができた。個人的には、上野の国立博物館で故宮に関する展示が行われた際と、以前台北に旅行に来た際の 2 回、「肉形石」を見逃していたので、三度目の正直で対面が叶いとてもうれしかった。その他、中国諸王朝の文化の粋を極めた文物の数々は、到底 2 時間程度で見尽くせる

2023/03/04

2022 年度台湾研修課題

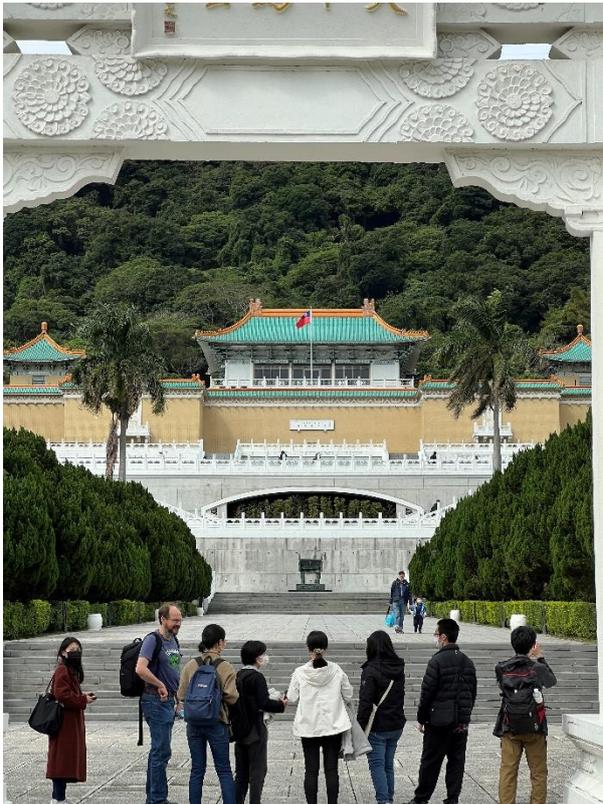
宇野優歩 (J1-220109)

ものではなかったが、充足感はひとしおだった。

最後に故宮から歩いて5分ほどの位置にある、順益原住民博物館を見学した。これは企業がメセナ活動として設立した興味深い経緯を持つ博物館で、原住民に特化した展示も、ほかの博物館とは一線を画すもので面白かった。一方、当然と言えば当然だが、前2つの博物館に比べると、規模は小さかった。

夕食は士林夜市で食べた。台湾最大の夜市であり、胡椒餅や愛玉ドリンクなどを買った。緑日のような雰囲気、にぎわっている中を歩くのは楽しかった。

22日は九州大学のチームと共に活動したが、各博物館でエドワード・ヴィッカーズ先生が教えてくださった簡単なイントロダクションがとても分かりやすく、また大変勉強になるものでした。この場を借りて改めて感謝申し上げます。



▲原住民博物館の展示

◀故宮の前で

2. エッセイ

(1) 台南文学ツアーについて

2月18日、私たちは台南にある国立台湾文学館を見学し、午後に文学館が主催する文学で台南をめぐるツアーに参加した。以下でこの文学ツアーに関して感じたことをまとめる。

まずツアーの内容について概括する。端的にはポイントハンティングであり、文学館周辺の史跡・建造物などの定められたスポットを巡るものである。6人程度のグループ程度に分けられ、与えられた地図に従って、グループごとにポイントを回る。各スポットには達成すべき課題があり、それをこなしつつ制限時間内になるべく多くの地点を回るのがルールである。具体的には、回るスポットとして二二八事件紀年館、孔子廟、司法博物館、林百貨店などがあり、各スポットでは決められたモニュメントと写真撮影したり、展示品に関するクイズに答えるといった課題が与えられている。また、青果店でカット・トマトの盛り合わせを注文し添えられているソースの中身を当てるものや、元丈糕（米粉で作る餅のようなもの）を買って食べるといった、食べ物に関するアクティビティもあった。遅刻をすると減点で、各スポット・課題に定められた得点を合計し、得点が最も高いチームが優勝となるという、ゲーム性のあるツアーだった。

この文学ツアーについて優れていると感じた点は、それが主体的な学びを可能にしているという点である。一般に「ツアー」と聞いて想起されるのは、ガイドに連れられるがままにスポットを巡り解説を聞くというものであるが、そのようなツアーでは、終わってみると回った場所や聞いた説明がぼんやりとしか記憶に残っていないということが往々にしてあると思う。それは自分が「どこへ行くのか」とか「そこで何をするのか・どのような説明を聞くのか」という、ツアー内容の見取り図を把握していないからである。そしてそれは、ガイドに付き従っていくという、ツアーの受動的な設計が原因である。一方、今回の文学ツアーは、先に述べたような内容のため、自分たちで地図を見、自分たちでスポットを回る順番を決め、自分たちで食べ物を注文する必要がある。このように能動的にツアー内容に関わる機会が担保されているから、どこを巡ったであるとか、どんな道を通ったかとかいった内容が、より定着しやすくなっていると感じた。実際自分たちで地図を見ながら街を歩き回ったおかげで、台南の地理に、すくなくともただの観光ツアーに参加するだけの場合よりは、明るくなったと思う。

その一方で、ツアーの内容が結局は単なる観光スポットめぐりに終始していて、台湾文学との関わりが不明瞭である点は、改善の余地があると感じた。台湾文学館が主催するツアーなのだから、台南の街を紹介することが主題に置かれているとしても、文学との関連

を明確にすることで、文学館としての特色を示すべきであると思われる。しかし、実際には林百貨店や孔子廟といった、多くのガイドブックに記載されているような典型的な観光地を回るもので、そこでのチャレンジも、屋上からビルの写真を撮ったり廟で拝礼したりといった、文学作品とはあまり関係のない内容になっていた。資料が英語で作られていることから、外国人向けでもあることが推察されるが、その点からしても、台湾文学に関する知識が乏しいそういった外国人の訪問者に向けて、台湾文学の魅力を知ってもらう、また台湾文学と台南の街のかかわりについて理解してもらうことの入り口としてツアーを設計することは、有意義だと思われる。

単なる観光ツアーとの差別化を図るためには、ツアーの切り口として文学を導入することが必要だろう。具体的には、小説の舞台（やそのモデル）となった建物や、作家が通ったレストラン、文学作品に描かれる台南の昔の情景が今にも残る街並みといったような場所を巡ると良いだろう。また、なぜ各スポットをコースに組み入れるのかに関する文学的背景・意義を強調して伝えるべきだろう。今回のツアーの資料にも文学作品の引用が掲載されてはいたが、それとは直接の関係のないゲーム内容に気を取られ、気に留めた人は少なかったのではないか。上記のような文学と台南の各スポットの関連を前面に押し出すことで、「文学で台南をめぐる」という趣旨を実現できると思う。

文学という視点を加えるだけで、ある街の観光は格段に面白くなると思う。それは、その場にある観光地の「今」の姿や、看板に記載されている歴史から見る「過去」に加えて、文学作品に書かれている世界という、ポテンシャルの「語りの世界」ともつながることができるからだと思う。手元にある鹿島茂『文学的パリガイド』（中公文庫）の「文庫版あとがき」に次のように書かれている — 「たとえば、有名なブティックのすぐ隣にある観光スポットは、作家の誰々によってこんなふうに描かれているという知識が入っていれば、パリ見物もたんなる買い物ツアーに終わることなく、一段階グレードアップするのではないのでしょうか？」また、森見登美彦のエッセイ集『太陽と乙女』（新潮文庫）の「京都を文学的に散歩する」にも、「舞台となる場所に馴染みがあるから小説を楽しめるということもあり、またその一方で、小説を読んでいるからこそ目の前の風景を楽しめるということがある」とある。文学を通じて街を見れば、そこに物語世界が立ち上がってくるのだから、一口で二度おいしい、そんな街の楽しみ方といえるのではないか。

(2) グループワークについて

22 日の台北市内のグループワークで、私たちの班は国立台湾博物館・故宮博物院・順益原住民博物館の 3 つの博物館を回った。そのうえで各博物館についての比較を行い、内容をまとめて 23 日にプレゼンテーションを行った。以下では、その内容を踏まえて、特に国立台湾博物館と故宮博物院について、現在における両者の展示・性質の比較（＝共時的な比較）、および各博物館についての歴史の変容（＝通時的な比較）について論じる。

まず国立台湾博物館と故宮博物院について、現在における展示内容およびそれらが伴う性質の差異について比較する。これら 2 つの博物館は、前者が「台湾」としてのアイデンティティを示すものであるのに対し、後者は「中華」のシンボルであるという点において、対照的であると総括できる。台湾を領域単位として、オランダ支配以降の 400 年を歴史として理解するパラダイムと、中国本土の 5000 年の歴史に連なる中華文明の継承者としての自己理解との対比が、この両博物館の差異に見て取れるのである。

この対比は、以下のように博物館の展示内容・展示方法等に表れている。まず主要な展示品について、国立台湾博物館は、動植物の標本などの台湾の自然に関する資料と、原住民に関する民俗学的資料とが中心になっている一方、故宮博物院は書画や器物など中国諸王朝の文物が展示されている。前者は、多くの固有種を含む豊かな自然が台湾に固有な資源・価値として捉えられ、また原住民は台湾という領域におけるエスニシティの多元性を示し、かつ清朝支配以前の歴史の存在を示すものであるから、「台湾としての自己理解」につながるものであるといえる。一方、後者は当然中華文明の繁栄の象徴である。次に建物もこの対比を示す記号として理解できる。国立台湾博物館は植民地統治時代という、台湾固有の経験の時期に作られた建築であるのに対し、故宮は中国王朝の宮殿を模した建物になっている。また歴史に関する展示にも差異が見て取れる。国立台湾博物館の「時代印記 IMRINTS OF TIME」という展示はオランダ時代のゼーランディア城の図から始まり、鄭成功の肖像画が続く。対して故宮の器物の展示は、殷・周の青銅器の展示から始まるのである。最後に各博物館の名前それ自体が象徴的である。つまり、「国立台湾」博物館という、「台湾」を単位とする自己理解を前提とする名称に対し、「故宮」博物院という、北京の紫禁城との関連を明確に示す名称との対比が示唆的であるということである。

台湾博物館＝＜台湾＞	↔	故宮博物院＝＜中華＞
自然・原住民	展示品	中国王朝の文物
日本統治期の西洋風建築	建物	中国王朝の宮殿風
オランダ支配・鄭成功	「歴史」の開始	殷・周
「国立台湾」博物館	名称	「故宮」博物院

次に国立台湾博物館の歴史の変容、すなわち通時的変化について確認する。概括すれば、もとは日本の植民地統治の要請にしたがって作られた展示が、国民党支配期の低調を経て、80年代末以降の民主化・「本土化」運動の進行に合わせて、「台湾」を象徴するものとして異なる形で再び求められるようになってきたという流れが指摘できる。現在の国立台湾博物館は、1908年に日本統治下で台湾総督府博物館として設置された自然史博物館を始まりとする。ここで前述のような自然と原住民を中心とするコレクションが形成された背景には、日本の植民地統治を正統化しようとする政治的意図が看取できる。自然史研究については、科学的な分類・博物学の導入を通じて近代化された植民者としての日本のあり方を誇示する手段として、同時に植民地統治における重要課題であった農業政策に必要な知識として、求められたものといえる。また原住民に関する民俗学的研究は、「未開な」人々が住む土地として台湾を描き出すことで、そこに文明をもたらす日本の植民地統治を正統化しようとする意図があると指摘できる。そしてそれは、皇帝の徳が同心円状に及んでいくとする華夷思想を背景に、山間部の原住民には干渉しようとしなかった清朝統治と、文明化によって支配を正統化しようとする帝国主義的な日本統治との、支配原理の差異を背景にするものである。

このような日本の植民地統治と結びついた展示は、戦後の国民党支配下では抑圧されることになった。49年に台湾省立博物館と改称されたが、原住民に関するものなど多くの資料は地下に収められ、水墨画など、台湾とは無関係な中国文化に関わりのある展示が多くなった。

しかし、90年代以降、李登輝政権で民主化が進み、また民進党の陳水扁が台北市長を務めるという政治的背景を端緒とし、以降の民進党政権下を通じて、民主化・「本土化」運動の進行という社会的変化を背景としつつ、国立台湾博物館の重要度が見直されていった。具体的には85年に大規模なリフォームが行われ、2000年代以降には、周辺の日本統治時代の建築を利用した、大規模な分館計画が進んでいった。その中で展示内容も前述のような自然・原住民を中心に据えるものとなっていったのである。

日本統治の開始	日本統治下 ＜植民地統治の正統化＞	日本の敗戦・国共内戦	→ 国民党支配下の低調 →	民主化・本土化運動	90年代～現在 ＜台湾アイデンティティ＞
	①近代科学の導入 ②農業政策上の要請		自然史的資料		台湾固有の資源・価値
	①「未開な台湾」の演出		民俗学的資料		台湾を単位とする エスニシティの多元性

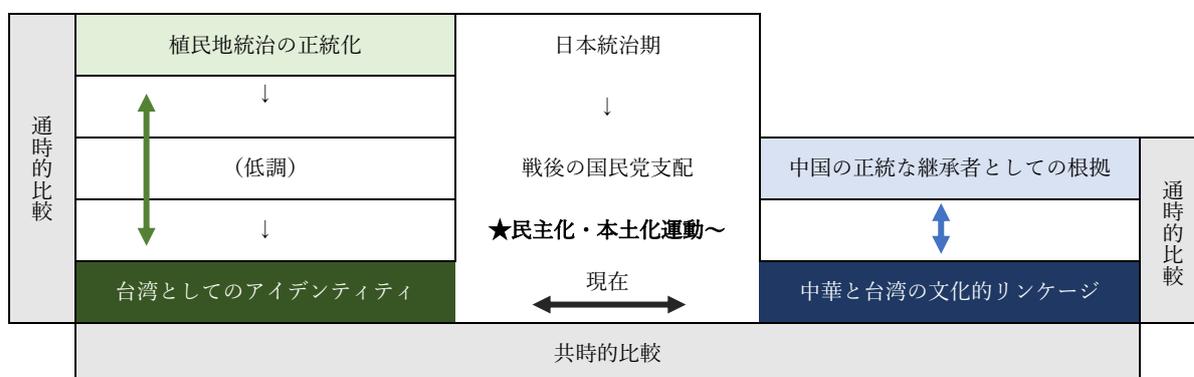
同様に、故宮博物院について通時的変容を確認する。故宮博物院は創設当初、「中国」の後継者としての正統性を示すものとして国民党が支配する台湾にとって重要であったが、90年代民進党政権の成立以降「台湾」としてのアイデンティティが台頭する中、むしろ中国と台湾のつながりを象徴するものとして、台湾と中国の一体性を主張する中国共産党・中国本土にとっての意義が大きくなっているという変化が重要である。故宮博物院の収蔵品は、従来北京の紫禁城にあったものを国民党が南京へ運び、1937年の日中戦争勃発に伴い重慶に移し、そして国共内戦での敗走に伴って台湾に運ばれたものである。元々中国本土に攻め帰る予定であったから、宝物は荷ほどきされずにあったが、60年代に本土反攻が非現実的になる中、台湾を大陸に攻め戻すための基地として発展させ、そして中華民国こそが「中国」の正統な後継者であることをアピールするという政治的要請が生じた。このような経緯で設立された故宮博物院は、まさに同時期に大陸では文化大革命が行われている中で、中華民国は伝統的な中国諸王朝の文化を破壊せず継承する正統な「中国」であるということを誇示する、政治的シンボルであったのである。このような背景から、国民党支配下では、故宮博物院は北京の故宮博物院とその正統性を争う関係にあり、政治的記号として国民党にとっての意義が重要であった。

しかし、90年代以降の民主化・「本土化」運動の進展の中で「台湾」としてのアイデンティティが成長してくると、その推進者である民進党政権下において中国王朝の文物に固執する政治的意義は低下していった。この中で文物の所有権をめぐる積極的に北京と争う姿勢もなくなっていったが、このような傾向は、今度は逆に中国本土にとって不都合なものとなっていったのである。なぜなら台湾と中国とのリンケージが失われていく傾向として捉えられるからである。このため、馬英九の下中国本土とのつながりを重視する国民党政権に戻ると、むしろ北京の故宮博物院との連携強化が進んでいった。これは単に両博物院の因縁が解消されたということではなく、上記のような政治的力学が作用した結果なのである。

設立当初 中国文明の正統な継承者としての象徴	→	90年代～現在 中国と台湾の文化的リンケージ
国民党の台湾にとって必要	必要とするアクター	中国と台湾の一体性を主張する 共産党の本土にとって必要
正統性・文物の所有権をめぐる争う	北京の故宮との関係性	共同展示などの連携強化

以上のように、この2つの博物館は共時的にも、そして各々について通時的にも、＜台湾としてのアイデンティティ＞と＜中華文明の象徴＞という対比軸によって対照的に理解できる。そしてその背景には、国民党政権による正統な「中国」としての主張と、90年代

以降の民主化・「本土化」運動の進展という、政治的・社会的背景を指摘できるのである。図式的に整理しなおせば下の表のようになる。



これまでの論をふまえると、ある社会について検討する切り口として、博物館が有用な存在であることが分かる。上記のように、博物館は単に文物や科学的事実を展示する場ではなく、そこに「何を展示するか」という決定に際して介入する、視座構造をも示す場となっている。この視座構造の差異が、同時代的な博物館間の差異を説明する。そしてそのパースペクティブがどのような意図を伴うものであるかは、その当時の政治的・社会的要請に応じて歴史的に変化してきた。このように、博物館は政治的・社会的要因の影響を受けてその性質が決定するものであるから、逆に博物館のあり方を通じて、その社会のあり方について理解することができるといえる。例えばこの分析の仕方を台湾に対して適用すれば、前述の内容から、台湾社会における自己認識のパラダイムシフトを捉えることができる。

そしてこの「方法としての博物館」は、特に台湾に対して有効であると考えられる。なぜなら、エスニシティやジェンダーなどの同時代的な多様性と、オランダ統治以降の歴史の重層性という、共時的・通時的の双方における多元性によって特徴づけられる台湾社会には、博物館によって代表されうる利益・価値・アイデンティティが多様に存在するからである。そのように、博物館の性質を決定しうる視座構造の可能性が幅広くある社会でこそ、博物館の側からそれを見ることで、社会の分節と融合のあり方を明瞭にとらえなおすことができると考えられるからである。

以上の内容は、グループワークに同行してくださった九州大学のエドワード・ヴィッカーズ教授のご説明によるところが大きいです。この場を借りて改めてお礼申し上げます。

台湾研修総括

文科一類

J1220108

二班・入澤大地

謝辞

この場を借りて、台湾研修に関わっていただいた東京大学の先生方や九州大学の方、また台湾師範大学のみなさま、そして訪れた各地にて協力していただいた運営の方々に、感謝の意を表します。本当にありがとうございました。

導入

2月17日から2月24日までの一週間、2022年度入学の東京大学中国語 TLP の生徒は台湾研修を行いました。台北と台南という台湾の主要都市を訪れ、文化、歴史、社会状況、そして国際関係といった、台湾を知り台湾という視点から日本、そして世界を見るという貴重な体験をさせていただきました。本文では、その中でも私が所属した二班が持っていた歴史という視点からエッセイを述べさせていただきます。

本文

一週間にわたる台湾研修を通じて、歴史に関するワークを行ったのは主に

- ・2月19日 台南一国立台湾歴史博物館
- ・2月20日 台北一総統府
- ・2月21日 台北一228 国家記念館
- ・2月22日 金瓜石一黄金博物館、九份

の四点が上がります。上三つに関しては先生方主導の研修、四つ目は二班の独自のグループワークを行いました。また、これら研修から最終日前日 23 日に台湾師範大学にてグループワークの発表を行いました。

発表の主な内容として、「台湾の歴史における光と影」というようなテーマを設定しました。「光と影」というのは、台湾の歴史における日本の影響の光と影を意味し、「日本が台湾にいい影響を与えた」と「日本が台湾に悪い影響を与えた」ということを遠回しに表しています。そもそも日本が台湾を統治していたことは紛れもない事実ですが、その反面「台湾は屈指の親日国家」というイメージが普及しています。このことから、実際に台湾にて現地調査を行い、台湾と日本という、とても地理的にも関係の深い国家関係を掘り下げていきました。

国立台湾歴史博物館

この国立台湾歴史博物館は、2010年代に公開された、新しい博物館といえます。ここには視覚的体験を通じた台湾本島やその周辺に関する歴史が「中華民国」という台湾以前、原住民などの時代から続く長い歴史が展示されていました。基本的に展示されている内容の主軸は、日本統治時代周辺、1870年代あたりまでは日本でも示されているような歴史観であったが、日本統治時代については、「制の側面と負の側面が存在する」という見出しから始まっていました。そもそもこの博物館は2010年代に公開が始まったものです。ではなぜ2010年代になってやっと台南にこのような国立の歴史博物館を公開することになったのか。それは、20世紀の戒厳令にまでさかのぼります。当時台湾では「歴史」に関する言論は統制され、「歴史を見返す」という行為自体がタブーであるとされてきました。その戒厳令が1987年に解除されて以降、白色テロに対する発言を民は恐れなくなり、その過程でこのような歴史博物館の建設案が登場したということなのです。台北にも同じように歴史博物館が存在するが、台南の台湾歴史博物館の方に尋ねたところ、台北の歴史博物館は主に台湾と中華人民共和国の関係を表すものとして20世紀途中から存在したものであるが、台南の台湾歴史博物館は戒厳令後に中華民国としてではなく、「台湾」としての歴史を綴ろうという志向からくるといい、そのような根本的に設立理由の違いがあるそうです。

黄金博物館、九份

次に私たちが注目したのは黄金博物館、またその一帯九份です。九份は名所であり日本人にとっても一度は聞いたことのあるような場所ではありますが、「観光名所」以上の価値を私たちは見出そうとしていました。

まず黄金博物館についてですが、この博物館が建つ場所「金瓜石」とはかつて鉱山町として栄えた場所です。日本統治時代には日本の鉱山会社の管轄の元鉱山町としての発展がみられ、たくさんの人がこの町を埋め、台湾の「銀座」とも呼ばれた祈堂街があるなどとも栄えていました。日本式の市場が並び、お祭りが行われや映画館が設立され、また教育システムが構築されるなど、日本統治時代に日本の影響で多くの近代的社会システムの導入が進んだといってもよいでしょう。このことは、日本による統治が良い影響をもたらしたといってもいいでしょう。繁栄期には、この鉱山町だけではなく周辺の街からも人を集めることになっており、台湾北東一帯の中心地となっていました。

次に九份についてですが、ここも隣の金瓜石と同じように鉱山町として発達していました。鉱山採掘量の低迷により一時は衰退した街ですが、その衰退した街並みを再利用し観光名所として一大成果をあげたといえます。私たちが実際に訪れた際も、多くの日本語を耳にし、九份のお店では日本語を使う店員さんも多く存在し、まさに観光を主軸として回っている場所でした。その中でもひととき多くの人を集めていた場所が「阿妹茶酒」といわれるお店の前にある小さな展望台でした。ここにはまさに台湾の観光ガイドブックの表紙に

もなるような光景をみることができ、九份に来たら必ずここから周囲を一望しなければならぬ、とでも言われているような場所です。ここでも多くの観光客が小さな展望台のわずかなスペースの中で良い画角を求めスマホやカメラを片手に感嘆の声を口にしていたが、その展望台の一段下には鉱山労働者の小さな像が存在していました。観光客はこの像には誰一人としてその像に注目する様子はなく、少し寂し気に独り存在するその像は、「九份」という場所そのものの現在の実態を表すようでした。多くの台湾人が日本の鉱山会社の元鉱山労働者として一日中働かされ、その利益を日本が奪っていく。そのどこまでも離れることのない、ただ注目されない「影」の歴史事実を無視したまま、多くの日本人や観光客がこの地を訪れていることは、今後の日本にとって、また今後の九份にとっても、悲しい事実であると思います。

終わりに

台湾での一週間はとても有意義なものとなっていたと考えています。まだコロナという大きな障壁が存在する中で多くの場所を訪れることができたことや、現地の学生との交流を通じて台湾での教育の方針や教育の成果、台湾人の思考プロセスの一部を垣間見ることができたことなど、多くの利点があったと思います。この学びを日本に持ち帰り、日本を訪れる外国人学生や日本に住む学生にも共有し発展させていくことが私たち学生の本分であると思います。

台湾研修 エッセイ

J1-220107 有馬万奈

台湾に到着して3日目の2月19日、私たちは国立台湾歴史博物館を訪れた。ここはその名の通り、紀元前から現在まで続く台湾の歴史を展示する博物館である。ガイドの方に率いられて2階の常設展を巡ったのち、1時間ほど自由に博物館内を歩くことができた。

常設展は文字資料がない時代を伝える「台湾、出会いの島」から始まり、日本統治終了後の民主化の様子を展示する「民主化への道」、そして人々の相互作用が未来をかたち作ること強調する「みんなの博物館」で終わる7つのコーナーから成っており、想像を上回る充実度だった。特に最後のコーナーの趣旨は、海上交通の要衝に位置することから中国・日本・ヨーロッパなど様々な土地の人々が交錯することによってその歴史が形作られてきた台湾ならではのものだと感じた。



博物館内の展示は原寸大のレプリカや建築・街並みの再現もふんだんに取り入れられたダイナミックなもので、その時代の人々の存在を肌で感じ、その生活の一端を追体験することができたように思う。むしろこれこそ、すなわち台湾の歴史は、台湾の土地を踏んだ一人ひとりが、ときに苦悩しながら決断し、刻一刻と過ぎる時間を確実に生きながら、平穏な日々を過ごすこともあれば時代の激動に飲み込まれたりする、このような人間の営みの歴史だということこそが、博物館が展示を通して伝えたかったことなのではないだろうか。

1階には「時空の駅」という、台湾の昔の人々の暮らしを汽車の車窓から眺めることができる展示もあったようである。今回は既に予約が一杯で入ることができなかったが、また訪れる機会があればぜひ体験してみたいと思った。

自由行動終了後、小講堂のようなスペースで軽いフォーラムが開かれた。館長の張隆志氏のお話ののち、学生が質問をする時間が取られた。皆積極的に質問しており、また参加されていた研究者の方々も真摯に答えてくださり、有意義な時間だったように思う。

滞在時間は4時間ほどだったが、台湾の歴史を間近に感じ、大変充実した時間を過ごすことができた。また台湾を訪れる機会があればぜひ再び訪問したい場所の一つである。

台湾歴史博物館

理科一類 丸山俊輔

J4-220674

先住民の時代から現代までの台湾の歴史が展示されていた。私は理系であることもあり、台湾の歴史の知識は日本が統治していた時代を軽く世界史の授業で学んだ程度しかなかった。しかし、この博物館を訪れることで台湾の歴史や文化に触れることができ、理解が深まったと思う。例えば、当時の建築様式やお祭り文化を見ることで台湾をより身近に感じることができた。また、台湾は比較的日本と地理的にも文化的にも近い関係にあるにもかかわらず、台湾の少数民族の知識はほとんどなかった。しかし、少数民族の展示をみることで台湾文化の多様性やその保全の意義を学べた。この博物館を訪れたのはとても良い経験になった。



先住民のお祭り



先住民の衣装

2023年2月19日 台湾研修3日目

国立台湾歴史博物館

鍵本 実佑

2月19日に訪れた国立台湾歴史博物館では、ガイドの方に展示の説明をしていたきながら常設展を見学した。常設展に入り一番に目に入るスクリーンの下には次の写真のような文章が書かれている。



写真中の文章を下に示す。

Who are you? Where do you call home? What brought you to this island?

Yesterday's immigrants and outsiders can be tomorrow's friends and family.

'Taiwan' reflects our collective experiences.

Look into our facts and share the 'Taiwan experience' together.

これらの文章のうち特に初めの2つは、台湾ほどの他民族との共生を経験していない日本では考えもしないことであった。来館者はこのような言葉を読んだ上で、その背景となる台湾の歴史を新石器時代から追っていくという展示の流れになっている。2020年のリニューアルによって日本統治時代の展示が詳細になったそうで、台湾の歴史を学ぶ上で重要となる日本統治時代について展示から学ぶことができた。

国立台湾歴史博物館の特徴としてほとんどの展示で人形を用いたリアルな再現がされていることが挙げられ、その一部には音声による再現もついていた。下の写真の左のものは媽祖の巡礼の様子を再現したもので、台湾国立歴史博物館に行く前にグループワークで訪れた聖母安潤宮で偶然目にした巡礼(下写真右)がガイドの方によって説明されている媽祖の巡礼と一致することを知った。このように、人形を用いたリアルな展示によって視覚的な学びや比較ができることは台湾の歴史や文化をより深く知る手助けとなった。



常設展を見て回った後は台湾の民族に関する特設展などを各自で見学し、その後館長と2人の研究員の方々、九州大学と東京大学の先生方へ質問をする機会が設けられた。質問会の中では台湾国立歴史博物館についての質問に留まらず、それまでの研修の行程で抱いた疑問にも答えていただいた。1つの質問に対して複数の立場からの回答を聞ける貴重な機会であった。

研修の2日目に国立台湾歴史博物館を訪問しました。本レポートでは展示の中で5つ、印象に残ったものを挙げようと思います。

常設展に入ってまず説明を受けたのが、17世紀以前から台湾に暮らしていた原住民のうちオーストロネシア語族に伝わる神話を題材にした現代芸術作品『生命の脈動 Tiyamacan』です。台湾の歴史というと私は西洋人や中国大陸に暮らしていた人達の立場から考えてしまいがちでしたが、この展示を見ることで台湾の土地の元々の主は原住民であるという理解が生まれました。

次に、1624年にオランダ人が台湾にやってきたことに関する展示です。オランダ人の船医と台湾人との恋を題材にした民謡「安平追想曲」など、親しみやすい話題から説明が導入されておりオランダ統治時代はさほど昔のことではないのだという実感が沸きました。

日本統治時代の展示では、まず台湾民主国の国旗であった藍地黄虎旗が印象に残りました。表面に描かれたトラの目は丸く、裏面に描かれたトラの目は三日月形をしていました。昼も夜も守ってくれるという意味が込められているそうです。南無警察大菩薩の絵では様々な手が描かれている中、眼鏡をかけた人を持っている手がありました。これは日本の台湾に対する思想管理と日本の警察の高圧的な態度を象徴しているとの説明を伺いました。どちらも絵に象徴的な意味がこもっている点で共通しています。

最後に、日本人の人類学者が台湾の原住民について研究した成果を記した書類について記します。原住民を生活様式、心理的特徴、倫理的特徴、宗教的関心などによって分類して整理することで原住民教育に役立てようという試みでした。日本語で記されていたため実際に書かれている内容を読むことができました。

以上が印象に残った展示です。観光の一部として展示を見るだけにとどまらず、展示物それぞれの持つ意味や背景について解説を受けたり考える時間を持つことができ、学びの多い時間となりました。

總統府

阿部 慧人

總統府では、ガイドの方の説明を日本語でしていただきながら建物の中の展示を鑑賞する形で回りました。荘厳な外観で、権威のある建築物であるため警備員の方もたくさん配置されていましたが、内部の展示や装飾は比較的ポップなデザインで観光客にも親しみやすいような工夫がされているように感じました。大まかに總統府の歴史的な成り立ち、建築様式、現代における利用、台湾の文化といった順番で展示はできていました。

まず、總統府の歴史について説明します。最初に建てられたのは、1919年3月31日の日本統治下における時でした。当初は台湾総督府と呼ばれ、下関条約によって清から譲渡された台湾を統治するために出向いた日本の官庁のオフィスでありました。のちの1935年の火事で5階が焼け落ち、1945年の台北空襲のよって建物は半壊状態だった。終戦後1947以降に台湾の地域政府が主体となって、補修作業を始めました。1948に完全に建物が元に戻った際、蒋介石の60歳を祝って、介寿館と名を改めましたが、翌1949年に国民党政府が台湾に逃げ込み、台湾遷都後は總統府とされるようになりました。以後中華民國の總統府として利用されていましたが、1998年に文化資産として登録され一般開放されるようになりました。

建築については主にコンクリートと煉瓦からなっていました。この煉瓦は東京にも用いられているものと同種で鋭角にすることで安定性を増しているということでした。中央に中庭を二つ作ることで支える部分が増えて、台湾で多い地震への対策が可能となりました。設計は1906年と1910年に開催されたコンテストで秀でたデザインを創った長野宇平治によるものでした。長野宇平治のデザインをベースに、森山松之助が台湾の地理的な状況を鑑みて、修正を加えて、さらに豪華な外観にすることで完成したと言われています。当時日本統治下であったことから上から建物を望むと日という字になっているのは興味深いと思いました。

現代における總統府の価値を示す展示の中に Power to the people というところがありました。台湾は白色テロなどの事例から見られるように国民と政府が大きく隔たれていたという歴史を持っています。そのためその後の民主化運動を通して他の国より強く民主主義、自由を大切にしようという思いを持っています。この power to the people というのはそのような文脈で政府というのはあくまで国民に仕えていて、国民が国の主権であり、そうすることで台湾は力強く成長していくという内容を表していて、その象徴殿も言えるのが總統府という風に書いてあり、納得がいきました。府という感じにも三つの意味があり

それぞれ以上の価値観と丁寧に対応させてあり、現代における役割も大きいということがわかりました。台湾では民主主義が若いという話もありましたが、国民レベルで主権としての自覚が強いのはこのような観光スポットからも感じ取れました。日本では若年層の投票率も低く、民主主義の機能は疑われるようなことがあり、実際自分自身も似た考えを抱いてしまうことがあります。台湾を訪れて総統府を見学して、意識がかなり改まった気がします。この意識を日本でいかに広めるかを考える上で、台湾の総統府の展示を参考にするのも良いかもしれません。

田中渚

2/20の午前中に總統府を訪れました。總統府は、日本統治時代の1919年に完成した建物で、日本統治時代には台湾總督府として使用されていましたが、戦後に中華民國に接收され、中華民國が台湾に拠点を移して以降は中華民國總統が執務を行う官邸として利用されています。1998年に一般人のガイド同伴での内部見学が可能になり、月に一度の「全館開放日」には通常では立ち入り禁止の区域も見学することができます。

總統が実際に執務を行う場所ということで、警察官と憲兵隊員による嚴重な警備体制が敷かれており、入館する際には手荷物検査を受け、金属探知機を通過し、飲み物はその場で一口飲むように求められました。



中に入ると、説明して下さるガイドさんと合流し、見学がスタートしました。最初の展示は、總統府の構造についてでした。現在の總統府が日本統治時代に台湾總督府として建設される際、設計は二段階の公募によって決定され、長野宇平治の設計に基づいて建設が開始、その後森山松之助によって気候や材料調達の観点から設計に修正が加えられました。建物の主要構造はコンクリートと煉瓦造りで、地震の多い台湾に適した日本型の平面構成になっています。建物を上から見ると漢字の「日」の形になっているのが印象的でした。また、總督府には竣工当時から電気、空調、エレベーターなどが導入されており、近代的設備を完備した台湾で最初の建物だと言われています。

続いて、總統府の日常についてのブースに向かいました。總統が執務を取るデスクや、かつて總統によって署名・発布された国民生活に関する重要書類(同性婚法制化など)、總統府で働く人の仕事に関わる様々な道具などが展示されており、總統府での職務の実際の様子を感じとることができました。



次の部屋では、国慶日(10月10日)の總統府に関する特集が行われていました。1949年から2022年までの各年の国慶日に總統府でどのような催しが行われたかということが写真付きで紹介されていました。



その後、初代の蒋介石から現在の蔡英文まで、歴代の総統を紹介するコーナーを見ました。日本の総理大臣は一人一人の在任期間が比較的短く交代が激しいため、総理大臣全員一人一人にフォーカスして展示をするということは考えられないと言ってよく、このような展示はとても新鮮でした。



他に、客家人や原住民族に関する特集が行われているコーナーや、台湾のモダンカルチャーやマスメディア、スポーツ等について紹介しているコーナーもあり、この総統府が台湾の象徴として、歴史や文化など台湾のあらゆる要素を人々に伝える役割を果たしているのだと実感しました。



2023年2月20日 台湾研修4日目(全員参加)

中華民国總統府

20日の午前中は、中華民国總統府を訪れた。

中華民国總統府に到着すると、朝にもかかわらず長蛇の列ができていた。總統府に入るための列だと思い込んでいたが、違った。總統府に入る前の安全検査のための列だったのだ。

「憲兵」と書かれた衣服を身につけた警備員に誘導されるままに、カウンターにリュックや上着を置き、ゲートを通った。航空機の搭乗前検査と似ていた。手荷物は全てのポケットを開けて見せる必要があった。そのため一人当たりには相当な時間がかかっていた。

厳重なセキュリティ・チェックを終えると通信機とヘッドホンを手渡された。生徒は二組に分かれて案内を受けた。總統府の外観を写真に移すこと・總統府内部においてビデオ撮影をすることを禁じられた。生徒はやや緊張した雰囲気です總統府に入っていった。

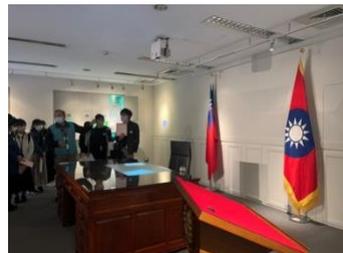


總統府の一階の常設展を観覧した。總統府の建築の視点からのあり方を学んだあと、總統府にまつわる台湾の民主化の歴史を学んだ。

總統府は1919年に日本政府により台湾総督府として建設された。設計案はコンペティションを通じて選ばれた。当初は長野宇治吉の案が採用された。しかし、より威厳を顕示する必要がある

と判断され、森山松之助と野村一郎が改変した。より高く、荘厳な総督府が目指され、建設当初は台湾で最も大きな建物となったようだ。森山松之助や野村一郎は東京駅設計者である辰野金吾の門下生だった。辰野金吾のデザインはイギリスのクイーン・アン建築方式にルーツをもつ辰野式建築として有名である。確かに、總統府の赤煉瓦と白壁は、東京駅を彷彿させた。また、部屋など建物全体が日本のある東向きに統一されていることや、角度付きレンガ・エレベーター・銅メッキの屋根など当時の最新技術がふんだんに用いられていることを学んだ。経費は当初の予算を遥かに上回った。また、郵便局や売店など日本統治下において總統府内で生活を完結させるための工夫も見られた。

1949年に、中華民国により中華民国總統府として利用され始めた。總統府は日本統治下で空襲に遭い、3日間連続で燃え続けた。そのため、決して即時利用は可能ではなかった。修復作業が行われ、技師の李重耀氏が活躍した。李氏は總統府の膨大な瓦礫の運び出しをおこなったり、インフレーション下で給与を現物支給としたりとさまざまな工夫をこらした。



以上で述べたように、1980年以前の総統府は「統治者のための場所」としての存在意義が強かった。しかし、1980年代以降の民主化が進展する時代には、「みんなの総統府」として社会運動の舞台としても利用されるようになる。ひまわり学生運動など、さまざまな社会運動の歴史が壁一面に展示されていた。人々は総統府に出向き、身を危険に晒してでも自らの主張を堅持した。

また、常設展の奥には原住民に関する展示もあった。2部屋ほど用いて原住民の種類の説明や言語の違い、独特の生活用品などが展示されていた。展示の観覧を通して、台湾の原住民は日本のアイヌ民族に類似しているのではないかと思った。実際、今回の研修中に出会った台湾人の方々の中には、台湾のエスニシティを語る際に日本のアイヌ民族に言及される方も多かった。しかし、日本において総統府のような国家の歴史を代表する建築物が展示される際、アイヌ民族に関する展示はどれほど行われるだろうか。総統府ほどのスペースや詳細な説明は用意されるだろうか。台湾のエスニシティの多様性を感じるとともに、日本の多様性や少数者に対する配慮について再考させられた。

さらに奥には、現在の台湾文化の展示もわずかながら見られた。台湾の屋台・信号機など日常風景が再現され、過去だけでなく現在にも総統府が生きていることを示していた。

午後の活動はグループワークであったため、説明を受けながら展示を一通り観覧した後は自由解散となった。展示の観覧後、多くの生徒は総統府の雑貨売り場にてお土産を物色していた。総統府をモチーフとした雑貨だけでなく、台湾島をかたどったキッチンスポンジや台湾をモチーフとした生活用品など、さまざまな商品が扱われていた。

総統府のアイデンティティは変化し続けたが、人民にとってかけがえのない存在であることは変わらなかった。

思い思いに総統府を満喫した後は正面に回って荘厳な総統府を仰ぎ、台湾の歴史を学ぶ上で触れざるを得ない総統府を後にした。

2023年2月20日 台湾研修4日目

總統府

木村眞子

朝にホテルを出て、總統府へ向かった。入り口には既にたくさんの人が並んでいた。入場前に手荷物の検査があり、カバンを開けて飲み物を一口飲むように言われた。總統府は入場無料ではあるが、今回の研修で訪れた他の場所と比べても特にセキュリティーには気を付けていることが感じられた。入場後2つのグループに分かれ、ガイドの方の日本語による説明を聞きながら總統府内部を見学した。

總統府は日本統治時代の1919年に台湾總督府として建てられた。建物のデザイン案は全国から募集された。元々採用された案では6階建てだったが11階建てに変更して、台湾の街のシンボルとして更に立派に見えるようなデザインにしたそうだ。第二次世界大戦では空襲に遭い大きな損傷を受けたが、戦後再建され、中華民國總統府として使われるようになった。

總統府の建築にはいくつかの特徴があり、例えば上から見ると建物が「日」の形になっていることや、中庭が台湾の国花である梅の花の形になっていることが挙げられる。また、建物の角は八角形になっている。建物全体が禁煙であるため、總督府として使用されていた時はそこが喫煙所になっていたが、現在は喫煙所ではなくオフィスになっているということだった。さらに、オフィスのドアノブにも特徴がある。日本統治時代、ドアノブは敢えて低い位置につけられていた。これは強制的に腰を曲げてお辞儀の姿勢をとらせるためだそうだ。



展示室には總統が使っているのと同じ机が置かれており、總統のサインが机の上のスクリーンに映し出されていた。大量の書類を整理する必要があるため、この机には座る側とその反対側の両方に引き出しがついているという特徴があるそうだ。他にも台湾に関する様々な展示が行われており、歴代の總統の紹介や、新幹線の開通など台湾のこれまでの出来事を記録した写真の展示、そして原住民族に関する展示もあった。台湾のポップカルチャーに関する展示もあり、台湾の街角でよく目にした放射状に広がった形のネオンサインや、タピオカなどが紹介されていた。また、「手」、「雨」、「鳥」などの身の回りの単語が台湾の各民族の言語ではどのように表されるかを紹介しているスペースがあり、台湾に異な



る言語を持つ民族が多数存在していること、そして異なる言語間でも似ている部分があることに気づいた。台湾固有の38種類の動物たちがデザインされた「台湾」という文字の展示もあった。総統府内には明治33年に設置された郵便局もあり、現在も営業していた。

ガイドツアーは1時間ほどで終わったので、各自総統府の中のお店でお土産を買ったり、展示品をもう一度よく見て回ったりしていた。私はスタート地点の方に戻って中庭の写真を撮っていたところ、別のガイドの方が話しかけてきて下さり、追加で説明をして下さった。



総統府では、青天白日旗が日出時に掲揚され、日没時に降納される。掲揚する時、国歌の演奏が終わると同時に旗がポールの頂上に到達するようにするため、下にいて国家の演奏を注意深く聞きながら、旗を掲揚する階上の人と通信し、上げるタイミングを知らせる人がいるようだ。また、建物の下の部分には白い扉があり、各階から落とされたゴミがそこに集められるため、ゴミを回収するために各階をまわる必要がないということも教えていただいた。

帰り際、中庭の中央に「国之磐石」と書かれた大きな石が置かれているのに気づいた。これについてガイドの方に伺ったところ、「国之磐石」というのは「国のもと」という意味で、この石は中華民国時代に新しく設置されたものであること、つまりここでの「国」というのは日本ではなく中華民国を指していることをご説明いただいた。

11時半頃に見学が終了し、グループごとに集まって午後のグループワークに向かった。

総統府を見学して印象的だったのは、総統府の国民に寄り添おうとする姿勢である。特に展示スペースでは、蔡英文総統と原住民との交流の様子が写真や文章で紹介されており、政府が原住民も含めた台湾の民族的な多様性を尊重していることをアピールしているように感じられた。また、先述した総統の机に加えて、総統府で使われているランプなど総統の日常生活に関する物の展示があったほか、今回は見つけられなかったが総統と副総統の等身大パネルもあるということで、見学者に総統府を身近に感じてもらおうとしていることが分かった。さらに、総統府には太陽光パネルが設置されており、総統府に必要な電力は全て太陽光で賄っているとガイドの方から説明を受けたが、こうした環境への配慮も、国民の総統府への理解を得る必要性から生じたとも言えるかもしれない。均整のとれた壮大な建物で国の統治機構としての威厳を保ちつつ、国民に開かれた総統府を目指す姿勢は、政治的な役割は全く異なるが日本の皇室のあり方と共通する部分があるのではないかと感じた。

景美人権文化園区 記録

松浦成美

沿革

1957～67年 国防部軍学校

1967～92年 軍法処看守所

(1987年 戒厳令(1949年～)解除

1992年 李登輝の大統領就任、刑法改正)

2018年 国家人権博物館開館

支所

- 白色テロ緑島記念園区
- 白色テロ景美記念園区

白色テロ(政府による弾圧)と赤色テロ(共産党勢力による)が融合していた

施設

軍事法廷

・流れ

逮捕→取り調べ→自白書取る→判決→執行

・執行の期日が確定したら直接刑場へ

・複雑度、被告の人数・地位の高低により裁判官の数変動

・軍事法廷の特徴

- 書記官の席が上にある(普通は真ん中←偏りなく事実のみを記録する)
- 軍事検査官(原告)が上にいる(普通は被告と同じ高さ)

・軍事裁判の特徴

1. 非公開 (普通は傍聴有り)
2. 判決が早い ex) 銀行泥棒 - 逮捕から銃殺まで 19 日
3. 判決は出来る限り重く ex) 普通は 3～5 年→10 数年
4. 目的：軍隊の管理と規律・名誉の保護のため(普通は権利と義務を明らかにするため)

・弁護も当てにならない

ex) 医師の裁判 - 弁護士「若い友だちの影響、若いから許してやってくれ」

→政治犯のほとんどは弁護依頼せず



碑石

- ・ 受刑した 1117 人の名前を刻んである
- ・ 白い数字=逮捕年、赤い数字=銃殺刑執行年
- ・ 名前が浮き出ている人は無期懲役
- ・ 何回も逮捕された人は左の白い数字が複数
- ・ 無期懲役の人の赤い数字は出所年・いなくなった年



江南事件

- ・ 戒厳令解除の契機に
- ・ 経緯

アメリカに移住しし政府を批判していた元台湾人が様々な秘密を暴露する蔣経国の伝記を出版しようとした

↓

1984 年 車庫で銃殺

↓

アメリカの華僑の注目を集めアメリカの警察に圧力

↓

台湾のマフィア組織を捕まえた、だが真犯人は既に台湾へ

↓

1985年 ヤクザ撲滅運動の際真犯人が注目を浴びる

↓

1人は海外逃亡、1人は捕まる

↓

裁判で情報局長(特務局長)の指示だと供述

↓

国内で話題に←国家が海外での殺人を指示

※当時台湾政府は自由中国というイメージだった

↓

アメリカは台湾政府へ圧力

↓

局長は裁判にかけられ無期懲役

※国家機密を知りすぎているために他の囚人とは別に監禁(外出は禁止だが必要なものは伝達してもらえる、週末は面会も可能)



仁愛楼

・金属物・現金は警衛室で没収、だが没収されたお金を使うことはできる

・足枷

法廷から刑場まで、態度が悪い場合

・小さい扉付きの鉄門

地位が高い人は門、他の人は小さな扉から

←逃亡時の混乱を引き起こすため

・大・小雑居房と独房

電気はつけたまま、常に監視出来るよう

・運動

一日 15 分のみ、さらに毎週木曜日の面会日や雨の日、態度が悪い時は中止

- ・ 同一事件の人たちは同一部屋に居ることはない、同一部屋の人同士運動時でも会話禁止

←同一事件の人たちを接触させない、運動場で話したら他の人に聞こえる

- ・ 売店は政治犯だけでなく軍の人間も利用

- ・ 政治犯の家族も非難の目にさらされるなど生活に支障

- ・ 食べ物は小さく切られて検査

- ・ 面会は中国語で 10 分間、全て傍聴・録音される



蔡焜霖さんのお話

緑島 - 新生訓導所(思想教育、労役)

cf) <https://kato-hidehiko.asia/taiwan-national-human-rights-museum/3/>

今後の展望

- ・ 現在の台湾は、白色テロや移行期正義について共通の理解に達してはいない

- ・ 移行期の正義を貫いたまま歴史の真相究明を行いたいですが中国からの影響も増しており難しい

景美人権文化園區 エッセイ

松浦成美

この日は台北での研修2日目だった。景美人権文化園區は国家人権博物館の支所の一つで、前日の総統府、同日の二二八国家記念館に続き、近現代の台湾が経た白色テロという惨事をダイレクトに感じ取ることの出来る場所になっていた。拘置所だったという歴史のあるこの場所は、今回の台湾研修で訪れた場所の中でも特に印象に残っている。展示物を訪問者に示しインタラクトさせる博物館としても、空間全てが展示物であり、文字通り五感を用いて歴史を感じ取り足跡を辿ることが出来るこの景美人権文化園區は特別な場所だと感じた。また、拘置所という普段中々近寄らない場所に立ち入ることが出来るということ自体が、そこにあるものへの興味関心を高めより多くのことを吸収する土台を作ってくれたように思う。

話は変わって、理系である私の高校での社会科目の選択は地理で、歴史は中学生の時に学んだ程度でその知識も曖昧。恥ずかしながら私はこの研修に参加するまで、台湾は中華人民共和国と違って民主的な国だという印象がある程度で、かなり最近まで戒厳令が敷かれていたということも知らなかった。私は台湾を訪れるのが今回で2回目だったが、歴史的背景を知ってから行くのでは抱く印象や実りが全く異なった。歴史意識が現在についての理解に繋がり、ひいては人権や社会意識に直結するということを改めて実感し、また特に海外といった外に出て初めて気づくことや刺激があることを痛感した。

グループワーク（4班・ダイバーシティ）記録

松浦成美

同志ホットライン協会

沿革

1998 協会成立

～当時の状況～

- ・LGBTQは異常視、家族による虐待や監視も
- ・1人のLGBTQの自殺→ジェンダー活動きっかけ
- ・インターネットがなかった→公衆電話でも出来るホットライン

2017 憲法の解釈変更

→同性婚認めるべき

2018 同性婚のやり方について国民投票

2つの派閥

a.修民法 民法修正→男女男男女女全て同じ扱い(1/3)

b.同婚専法 LGBTQは別扱い(2/3)

→b

養子縁組

- ・同性婚制度の欠陥

昔-20歳以上なら誰でも取れた

現在-同性婚者はだめ

- ・ジェンダー平等教育法も大事
- ・gender equalityの授業有り

パレード

- ・台湾のパレード 800~1000人→25万人

・去年5月に日本でも

・今年10月は前日にはトランスジェンダーのパレード

・台湾のLGBTQ団体は他の団体と密に連絡を取っている←一つでは非力

ex) 2人同士など非典型的な婚姻関係を勧める団体

相談内容

- ・変化多い

25年前- LGBTQの基準とは

現在- 人間関係(恋人、友達)、異性愛者からも電話←AIDSに関して調べると LGBTQ 団体が

- ・昔も今も親からの相談は多い

政治

- ・台湾にも LGBTQ を差別する政治家多い

- ・ LGBTQ の政治的立場

国民党- LGBTQ× 独立○ ←教会との繋がり有り

民進党- LGBTQ○ 独立×

→民進党を支持する LGBTQ は板挟みに

ex) kmt(国民党) 藍 gay 緑

トランスジェンダー

- ・手術を受けていない人は身分証明書の性別欄を変更できない

- ・性転換手術に特に法的な制約はないが家族の同意が必要な場合も

現在の状況

- ・都市によって考え方違う

大都市では LGBTQ に対して関心理解有

⇔原住民が多い場所は関心理解少

- ・公立学校は制服をスカート・パンツから選べる

⇔私立では性別により固定のところも多い

・電話だけで対面サービスはない←人手不足、ボランティアを指導しているのでプロではない

- ・電話を取る人は皆 LGBTQ→同じ目線で相談に乗れる

- ・去年 1805 通

- ・相談をカテゴライズ、それに応じてチーム作る

ex)

- ・親御さんからの電話のケースも多い→2003 家庭チーム
- ・若い人も多い→教育チーム
- ・ AIDS チーム、高齢者チーム=長期的なケア

- ・現在同性婚のカップル数 10000、少ない

←戸籍や身分証明書に記されたためカミングアウトになってしまう

ex) 大学教員が理解があるわけでもない

- ・ 去年 279 回学校で講演会
- ・ LGBTQ の人に 1 人でも会うと偏見がかなり減る→講演会では自分が LGBTQ だと言うことにしている
- ・ 現在の親世代の LGBTQ は逮捕されていた→理解少ない
- ・ 2010- 原住民の LGBTQ に関する活動
- ・ 夜遅くに集まって活動することが多い←周りの目を気にしたくない



ジェンダー教育平等協会

概要

- ・ オフィスは小さくスタッフも少ない
 - ・ 20 人の理事と 170 人の会員
- 会員の多くは学校の教師

民間活動

- ・ 講演テーマは多岐にわたる

ex) 基礎的なジェンダー意識を養う、ジェンダー関連の事件防止、ジェンダー平等教育法の普及を図る

- ・ 講演対象も様々

ex) 教員 + 最近は公務員、企業も

- ・ 企業とのコラボも様々

- 単純なドネーションからイベントの共同開催まで

ex) ジェンダー平等サタデー

教育活動

- ・内容 - 感情教育、性教育、人間関係に関する教育、セクハラなどに関する教育
- ・ジェンダー教育は義務付けられているが適当な教材が少ない + 実際学校でのジェンダー教育も教師によって差が有る ⇨ 日本
- マニュアル化した教材制作 by 書籍だけでなく様々なメディア ex) ビデオ、ゲーム (フィードバックもらいながら、対象は全年齢)
- 自分の理解 → 周囲との関係について学ぶ
- ex) 小5～中3 対象 → 物語を使って答えのない討論を
 - ・ポジティブかつ説教くさくなく
- cf) スウェーデンの教材
 - ・親は性教育を重要視しているものの自分が教えるのは難しいと考えている
 - ・近年ではインターネットも子供達の重要なコミュニケーションツール
- 児童の性的搾取の問題
- ボードゲームイベントなどを通して普及
 - ・教育に重きをおいている
- SNS で時事問題を扱う時も子供達への伝え方に焦点
 - ・30歳以下はジェンダー平等教育を受けているが、そうでない世代は大人でも教育を受けべき
- ※最もこうした教育を必要としているのは上の世代…?

政治活動

- ・台湾は国連に加盟していないが国連人権条約を遵守する活動をしていると国連に訴えている
- ・他の団体と協力
- 共に地元の議員にジェンダー平等に関する提言を行う、他の団体の応援に行く
 - ・ローカルな政治家に意向を伝える
 - ・韓国、フィリピン、タイ、日本、香港などの団体とも提携して国際的なシンポジウムの開催も
 - ・協会の整理や観察を担当する部門 - 政府関連の団体と提携

障壁

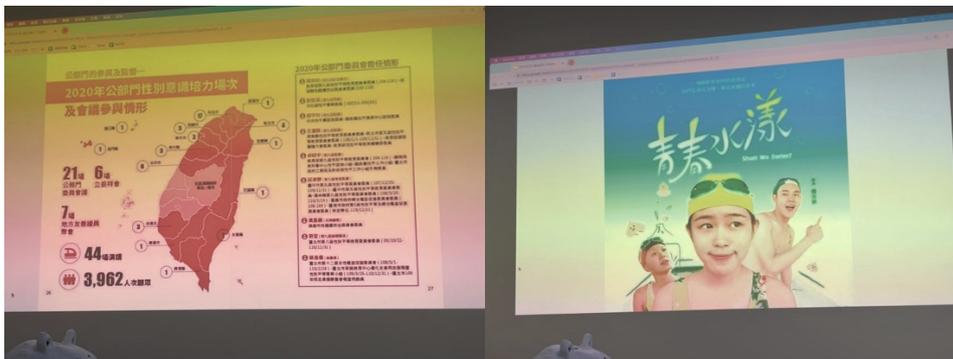
- ・性教育や女性差別撤廃などの運動が活発化し性別平等教育法が制定された 2012 年頃から強烈的な反発
- ex) 「この動画は獣姦を促している」
 - ・ジェンダー平等教育が始まって 18 年になるが未だ圧力をかけられている

- ・ 反対組織 - 宗教的な背景のある団体が伝統的なジェンダー観と結びつく
- ← アメリカの保守的な右派が影響

ジェンダーフリートイレ

- ・ 公的機関を中心に設置増加
- ・ 犯罪の多くはジェンダーフリートイレというより女子トイレで発生
- ジェンダーフリートイレと犯罪に因果関係無し
- ・ 安全性を守る設計が必要
- 男子トイレをそのままジェンダーフリートイレにするなどの安易な措置ではダメ
- 理想：入口1つ、盗撮されにくい壁の高さ、全個室、明るく通気性の良い開けた空間、伝統的に性別に結び付けられやすい赤青の色使いは避ける、入り口にはジェンダーフリートイレが必要な理由を記述
- ・ メリット
- 介護する・される人で性別が違う場合や性別の異なる親子もトイレを利用しやすく
- ※ トランスジェンダーの人は出来る限り外でトイレを利用しないために水分を取らないようにする人も

- ・ 台湾の怪談には女性の幽霊ばかり
- ← 未婚女性の魂は寂しいので幽霊になりやすいと考えられていた
- ⇔ 日本には男性の幽霊や妖怪もいる(儒教があまり根付いていないから?)



Lumaq

- ・ まだ認められていない原住民族も 10 程度有る
- ← 日本統治時代の無根拠な定義区分により分類、調査が不十分
- ex) 原住民 - 山地 / 平地
- ・ 原住民は政府に意見を言う方法がない

- ・ 16%が都市在住

→原住民のアイデンティティとは？

→独特の生活様式から生まれる原住民ならではの感性

- ・ 名字が原住民のものでないと正式に先住民とは認められない

しかし半分以上の若者が混血

→家父長制の影響の強い漢人の父がいると大変

- ・ benefit よりも identity が欲しい

←benefit により新たな差別が生まれることも

ex) 先住民は成績が 1.3 倍

- ・ 中国語を強制→いじめられるのが怖いから文化を伝承しなくなる→言語が消えると文化も消える

ex) 母も伝統文化を教えてくれない

- ・ bot プロジェクト→地方行政が会社に土地と権利を与えて開発 in 台東

→原住民の暮らしを奪う

- ・ 原住民はオーストロネシア？

台湾新文化運動記念館

- ・ 台湾文化協会内部でも派閥

→記念館の評価が未だ定まっていない

- ・ 元日本統治時代台北北警察署

- ・ 台北の監獄はほぼ全てパノプティコン形式←人手不足

- ・ 水牢あったが使われた形跡はなし



街歩き

- ・台北府城の壁を日本が再利用して公的機関に
- ・歸綏街=お金持ちが芸妓を侍らせ重要な会談をする上樓のある風俗街
→公娼あり、泌尿器科、産婦人科、漢方薬局など多い
- ・日日春協会（日本でいう swash）が保存運動
- ・建築保存（文創？）と取り壊し（都更）の瀬戸際
- ・都更=都市開発

反対運動も

- 住民自ら緑地の酸素排出量を計算して価値をアピール、代替案を提出
- ex) 中山に近い雙連の孔子廟周辺(市場、緑地)、お年寄りの散歩場所や観光地
 - ・年相応を求める考えがない
- 身なりも自由
 - ・色々と派手

ex) 廟に電光掲示板、葬式に水着の若い女性



文萌楼

概要

- ・沿革

1925年 完成

2016年 台北市指定の歴史建築に→壊されない

古跡=最高レベルの文化遺産

理由

1. とても古い

2. 社会運動の起点

3. 元々公娼がいた、性産業は古い歴史のある産業である、政府は無くしたい、初めての国民党以外からのちんすいへいが台北市長だったときに公娼を無くした際にセックスワーカーが活動した

4. 昔の建築や調度品がそのまま残っている ex) 緑の電気 in 日本時代

・公娼館は国営ではなく認可されたもの

・窓が大きい→外の客が座っている女性を品定め≡吉原

cf) 違法であれば明るく外から見えない→公娼館には建築の特徴=遊郭建築

・娼婦の写真は昔は無く椅子に座っていた

・店だけでなく娼婦もライセンスが必要

・娼婦のライセンスは本の形式

←毎週1回の健康診断検査済みの判子を押すため

・公衆衛生、価格も政府管理

・15分1000元←15分で1回出来る

=ブルーワーカーの日給程度←公娼館の客は一般労働者

・客が投票箱のような箱の担当した娼婦の場所に札を入れる

→毎日一人一人何人の客を取ったかを記録

=日本統治時代から受け継がれてきた簡単な計算方法

←公娼は貧しく教育を受けておらず計算も出来ない者が多い

※700元女性、300元お店

・派出所の電話番号が電話の隣の壁に書いてある←娼婦は保護されていた

・昔も今も違法の場合は客との恋愛という建前を作っている

・写真付きのライセンス

←違法労働に従事する娼婦の取締りの際、警察がすぐに確認できるよう

・ライセンスを取れる基準

1. その時点で結婚していないこと（未婚既婚問わず）

2. 健康であること

3. 犯罪歴が無いこと

4. 16歳以上の青年であること

・公娼が違法化されたとき128人抗議活動した

顔を隠す帽子被る←マスコミに顔の写真を撮られたくない

・ベッド椅子ヒーターなど簡素な作り

・性教育の部屋も←学校でも家庭でも性教育が無いので性教育の場を

・障害のある客が家族に公娼館に連れてこられていた

・性的欲求を満たす以外の機能も

ex) LGBTQの客も受け入れていた

- 陰間茶屋の役割
- 異装（女装・男装）が好きな人=今のトランスジェンダーが女性の服や化粧をしたりする場所
- ポルノ商品はほぼ日本から輸入
- 日本のポルノ商品から日本の女性のイメージが作られている
- 日本のポルノ商品のことを a pian という
- ライセンス取得難しい
- 違法の労働者は多い
- 戦後より増えていった
- ほとんどの人はお金のため、汚名化はずっとある
- ex) 人と遊びたくない←自分の話をしなきゃいけないくなる
- 帰るときは化粧を取る←厚化粧をしていて普通の労働者とは違う見た目
- 文明楼の見解：性産業で働く女性の地位が低いというステレオタイプを無くすべき
- ←お互いに尊重し合う関係で成り立っている産業でもある
- 台北市も資金を出して修復→社会が性産業を認めたという押し上げ
- 掃除のシングルマザーが子供を連れて屋根裏に住んでいた

問題提起

結婚という1対1の関係が果たして最も良いのか



アマーの家

アマーの家の由来

アマー=おばあちゃん in all languages、慰安婦を経て日本へ嫌悪感を抱いた人々
家=安全で温かい印象

なぜ慰安婦になるか

当時 貧しく子供の頃から働き教育を受けられない→職業の選択権無し

ex) 閩南・客家人 他の家の娘を養子にして自分の息子の将来の嫁に≡タダの働き手

1. 偽の広告に騙される
2. 各地区から抽選で当たった人が連れて行かれる
3. 日本の警察が女性を雑務に連行→脅迫し強姦

慰安婦の教育の状況

・閩南・客家人 貧しいゆえに小学校の卒業率は低い

⇨先住民 皇民化を進めるため警察に管理されており小学校卒業率は比較的高い

慰安婦用のパスポート→国の認めた存在であることの証明

葦=台湾の慰安婦の象徴←聖書の中で強さの象徴

蝶=世界の慰安婦の象徴、自由かつ短命で美しい

軍人が慰安所に入る際コンドームが配布されるなど規則有り

慰安婦には心理的・物理的苦痛

ex) 周りの人からの差別、出産が難しくなる=女性としての立場が著しく低下

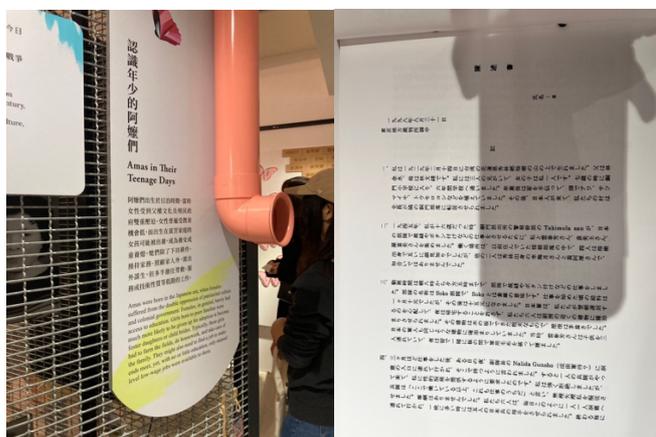
解決に向けて

- ・民事裁判（法的拘束力は無し）を行う
- ・心身治療ワークショップの開催
- ・芸術を通して彼女たちの痛みを表現

未来への展望

・膠着した日韓の慰安婦問題に台湾という視点から新鮮な考えを

・昔から発展した家賃の安い古い地域にある



グループワーク（4班・ダイバーシティ）エッセイ

松浦成美

私は今回、台湾のダイバーシティについてのグループワークを行った。今回の台湾研修に参加するまで私は、台湾は同性婚の法制化が進んでいるなどマイノリティーにも寛容で、東アジアの中でも最も多様性に富んだ社会を実現している国の一つだという印象を抱いていた。実際、事前学習を進め台湾を訪れる中でも、そうした印象はかなり正しかったと感じた。しかし、訪問した場所でお話を伺う中で、制度と現状のずれが少なからずあるということも見えたこともあり、ジェンダーに限らず日本国内外の様々なことについて調べるきっかけにもなった。また、同志ホットライン協会でお話の中で、台湾では主にLGBTQの人達が参加する大規模なパレードがあるが参加者はLGBTQだけでなく、互いに協力し合っている様々な社会団体も参加しているという。対して日本では、そもそもパレードといった形で市民が声をあげるという光景自体珍しいと感じる。台湾では、市民が民主主義国家の一員であるという意識を高く持っているように感じたし、台湾についてだけでなくそういった考え方についても学びの多い研修だったと思っている。

共同通信台北支局長 松岡さんの講義

渡邊滉太

2月22日夜に共同通信台北支局長 松岡さんからお話をうかがった。講義の後、質疑応答の時間も設けられた。

まず最初に、台湾での取材を通して松岡さんが感じていることをお話しいただいた。意外にも、約50年の日本統治を台湾の人々は割合肯定的に受け止めているという。一方で、日本統治期の殺傷や差別、太平洋戦争期の動員やその後の補償問題については、日本人として忘れてはいけないと意識しているそうだ。褒めてくれるからといって、その側面だけをみて満足するのでは、実は大きな落とし穴ではないか。この視点は、日本人として常に心に留めたいと感じた。

次に中国での取材についてご説明いただいた。ここで話された体験談が非常に衝撃的だったので、書き残しておきたい。――松岡さんが中国で取材にあたっていたとき、親密にお付き合いしていた先生がいた。彼は中国へ批判的な指摘をすることもあった。しかし、松岡さんが北京を離れることが決まり、彼と食事をするようになったが、果たして彼はその食事の場に彼の同僚も一緒に連れてきた。そこでの彼は中国語で中国側の公式見解をただ述べるだけの人物になった。松岡さんは、彼は自分に対してではなく、その同僚に対して話しているように感じたという。その後、松岡さんが中国を離れた後もやり取りは続いたが、ある時連絡をやめるよう彼の側から申し出があった。理由は、日本人とやり取りをしていると彼が中国政府に目をつけられてしまうからだ、と聞かされた。――この話から、表現の自由が確実に保証されない場所で人々の本音を引き出す難しさを理解するとともに、表現の自由の大切さについて改めて認識した。

中台関係に関する台湾人の動向についても話題が及んだ。中台関係に対する判断に関して、台湾人の有権者はかなり冷静だという。すなわち、台湾人は、中国との関係において、親中／反中のいずれにも極端にならず、振り子の如く柔軟に政局を見極めている。そのようなバランス感覚は私も参考にしたいと思う。

質疑応答については、学生からの質問は多岐に亘ったが、一つ一つ丁寧に答えてくださった。講義で触れられたテーマ以外にも、共同通信や日本・台湾の報道、「記者」の役割やメディア人として思うこと等にも話題は及んだ。特に、松岡さんが取材の際に心がけていることは、私たちにとっても非常に重要なメッセージを含んでいると感じた。それは、「多様な意見の人々と話をする」「実際に現場を見る／自分で体験する」というものだ。例えどんなに勉強ができたとしても、現場に対する理解が誤っていたなら、それは宙に浮いた理論となっ

てしまうだろう。松岡さんから教わった姿勢を、私たちもしっかりと行動に反映させていく必要があると感じた。

台湾研修 活動の記録・エッセイ

J3220061 阿部想

1. 共同通信支局長のお話

2/21の夜、私たちは共同通信社の台北支局長・松岡誠さんのお話を伺いました。松岡さんは、主に日中関係や日台関係、対中関係や民主主義と報道のあり方について多角的な面からお話をしてくださいました。

その中で特に私の印象に残ったのは、中国での取材が近年かなり厳しくなっているという点です。松岡さんのお話の中では、それまで親しくしていた、中国政府への批判も躊躇わなかった学者が、ここ数年で会うことはもちろん、連絡を取ることもできなくなってしまったことや、あらゆるものが電子化されたことにより移動に足が付くようになったため地方への取材ができなくなったことなどを教えていただきました。取材・報道は、弱者の声を拾い上げ、権力の不正を追求する根幹だと私は考えています。したがって、今の中国に代表されるような、取材・報道の自由の弾圧に対し、マスメディアは自らの本来の役割をどうやって死守していくか本気で考えなければいけない佳境に立たされているのだと強く実感しました。

さらに、以前から気になっていた日本のマスメディアの「反現場主義」についてのお話を伺うこともできました。「反現場主義」というのは、マスメディアの記者が事件・事故の現場へ訪れて取材を行うことが少なくなっている現象を指します。この背景には、雲仙普賢岳噴火報道において消防の勧告を無視して現場に入った沢山の報道関係者が火砕流に巻き込まれて亡くなったことをきっかけに、マスメディアの安全管理が厳しくなったことがあると言います。しかしながら、そんな中、共同通信は今回のウクライナ戦争にあたって、日本のマスメディアで1番現場に近いところにいるのだそうです。この理由を伺うと、現在の管理職のトップが若い頃イラク戦争で現場取材を粘り強く行った経験があり、現場の声を尊重する人だからとのことでした。松岡さん自身も現場に赴くことの重要性を認めており、「現場の声を聞く」ということは、「真実・事実に近い声を聞く」ということで、記事に重みを出すと言ってくださいました。このように、「現場主義」を大切にする意識が日本のマスメディアに残っていることに希望を感じる一方、このような「現場主義」がトップの入れ替わりによって簡単に変わってしまう脆さも感じました。

以上のように、日本のマスメディアを取り巻く環境は、決して生やさしいものではなく、むしろ課題は山積みだと感じました。

また、この話はマスメディアという大きなものだけでなく、私個人にも還元できる話だと思います。マスメディアの「現場主義」とは、個人レベルにおいては、なるべく情報操作がされていない一次情報にあたるということによって実践できます。一次情報にあたる上で重要になってくるのは翻訳されていない、生の声を聞くことです。なぜなら、声は他者を介すことで歪められることが往々にしてあるからです。したがって、世の中に存在する生の声に耳を傾けることが、弱者の声を踏み潰し権力の不正を隠蔽する力に対抗する一つの手段になりうると思います。だからこそ、私はマスメディアの役割を自分個人の中でも実践していくために、もっと中国語を学んで、他者の声を介さない生の声に耳を傾けられる人間になりたいと強く思います。

2. グループワークの記録記録

私たちが訪れた金瓜石は雨の多い街として知られています。私たちが訪れた2月22日も御多分に洩れず、小さな街は雨に包まれたまま私たちを迎え入れてくれました。

最初に訪れた金瓜石では、午前中の時点ではまだ小雨でした。山間に位置する黄金博物館から周りを一望すると、周囲の山々に霧のような雲が薄くかかっている、まるで山水画の中にあるような気分になります。そんな景色にうっとりしながら、私たちは日本統治時代に金瓜石に建てられた黄金神社へ向かいました。黄金神社は金瓜石鉱山を管理していた日本の企業によって1933年に建立された神社です。太平洋戦争ののち廃社となって、今は鳥居や社殿の柱のみが

残された状態になっています。黄金博物館から神社までは段差の高い石段が敷かれていて、登るのも一苦労です。雨に濡れた石段に滑らないように慎重に足を進めていくと、見晴らしの良いところに鳥居と社殿の柱だけが残っていました。薄暗い空模様の下、小雨に濡れてひっそりとたたずむ柱たちからは、かつて鉱山で働く日本人を中心にこの神社で毎年行われていた盛大なお祭りの賑わいを想像するのはほとんど困難に感じられました。

かつての鉱山の賑わいに思いを馳せながら私たちが次に向かったのは砂金取り体験です。聞けば、金瓜石や九份に鉱山が発見されるきっかけとなったのは、近くの川から砂金が見つかったことなのだそうです。砂金が金瓜石の繁栄の扉を開けたと言っても過言ではないでしょう。私たちの砂金採り体験を担当してくださったのはとても気さくな方でした。冗談を飛ばしながら砂金の採り方を指導し、私たちが手間取っているとすぐに駆け付けて助けてくれます。段々と雨足が強くなり、気温も少しずつ下がってくる中、冗談を言いながらくしゃっとした笑顔で笑う砂金採りの先生の大らかさと優しさで心は温まり、台湾での素敵な出会いに私は心から感謝しました。

最後に向かったのは金瓜石事件碑です。砂金採り体験場からは少し離れたところにあるこの石碑に向かう時には、雨足はかなり強まっていました。傘の意味もなく、雨は靴や洋服をじわじわと濡らしていきます。日本統治時代に皇太子が台湾訪問に際して滞在する予定だった太子賓館の横を通り抜け少し階段を降りたところに金瓜石事件碑がありました。金瓜石事件とは、日本統治時代に特別高等警察が中国側との密通を疑って北部・金瓜石の住民を逮捕し、33人が判決を受けないまま獄中死した事件です。被害にあった人たちは地元の小学校の出身者ないし保護者等関係者であったため、太平洋戦争後にその小学校の同窓会が記念碑を設置したそうです。中国語で書かれた碑文を台湾の学生の方が翻訳してくださっている途中、その方は碑文に書かれたある言葉を取り上げました。それは「日閥」という言葉です。この言葉は、反日的な意味合いの色濃い言葉なのだそうです。この言葉を聞いた時、自分の肩に何か大きな重いものがずっしりと押しかかってきた感じがしました。

私はこれまで、学校の教科書の記述から日本がかつて台湾を植民地化しその下で現地の人々を虐げることもあったと理解してきたつもりでした。しかし、こうやって、日本人に虐げられ、大切な人の命を奪われた人々の怒りや悔しさ、悲しみが込められた言葉を目の前にした時、私は今まで日本が戦前に行ってきた加害行為と本当の意味で向き合えてはいなかったのだと、ハッとさせられました。日本で教育を受け日本で育ってきた私は、日本が戦前に行ってきた人権侵害を強く意識させられることはこれまでほとんどありませんでした。しかし、一方では今もなおその加害行為によって苦しめられた人々が存在していて、そんな人々との溝は確実に私の前に横たわっているのです。

事件碑から視線を落として俯くと、滝のように地面に打ちつける雨が私の足下をどンドン濡らしていくのが見えます。体の芯から冷えるような冷たい豪雨の中、私は重い足取りで金瓜石を後にしました。

2022年度中国語TLP台湾研修 記録とエッセイ

文科一類一年 中島茉保

1.共同通信支局長 松岡さんのお話

共同通信で台北支局長をされている松岡さんにお話を伺う機会を得た。台湾の大学の講義室一室を借りて行うという形で、共同通信のビルにでも入るのかと期待していた私には若干の拍子抜けであった。もっとも、のちに話に出たように台北支局というのは一人局だそうで、共同通信の事務所もそんなに大きなものではないのだろうが。

私たちのスケジュールの遅れにより、講演を聞く時間はだいぶ短くなってしまった。しかし松岡さんのお話は急なスケジュール変更にもかかわらず簡潔にまとまったものであり、続く質疑応答において議論を深めるにあたって十分な素地を提供してくださった。現地で報道に携わっている人の腕を見た気がした。

お話の要点は、台湾の親日姿勢、中国と台湾の違い、台湾を取材する中で考えること、であった。「台湾が一概に親日国家というわけではないよ、そもそも日本が植民地支配をしていた時代もあったんだよ」というメッセージは、その解像度はさておき渡航前から繰り返し伝えられてきたことだ。「報道関係者から聞いた話」として特に印象に残ったのは後者の二つだった。

中国と台湾は政治制度が違う。それに伴って市民への情報開示具合も違う。台湾は日本と同じ民主主義の根付く場所だ。高校で世界史を学べば、当たり前のように知っていることだ。台湾に渡航して日本との社会制度の違いを意識することはなかった。社会体制を考えれば当然とも言えるだろう。しかし台湾で感じた中国像は、日本で想像されるそれとはっきりと異なっているように感じられた。政治的な文脈で中国をとらえる機会は研修中を通じてそれほど多くはなかったが、その限られた機会の中で言葉の端々に警戒感が滲み出ているのがわかった。さながら台湾を鏡のようにして中国の姿がはっきりとしていくようだった。松岡さんは、近年中国で取材をするにも本音が聞けなくなっていると話されていた。自分が「危険思想」をもっていないことを同僚に示すポーズとして、同僚を呼んで松岡さんの前で当局の見解をおうむ返しした学者がいたという。日本人からしたらかなり直接的なコミュニケーションをとる中国人が日本人もしないような婉曲的なものの伝え方をしているのを知って、なんとも言えない複雑な感情になった。

私は松岡さんのお話を聞くと伺ってから、台湾研修の行程の中でもかなり楽しみにしていた。その背景には、中学生のときに選挙立候補者のチラシに「元・新聞記者」とあるのを見てから報道の恣意性について漠然と考えてきたことがあるのだと思う。政治家というのは特に何かしらの政治的思想をはっきりと持った存在だ。それに立候補するような人がかつてメディアにいたという事実は、中学生の私には盲点だった。どこか文字通り「媒体」だと思い込んでいた各種メディアが必ずしも中立的ではないんだ、ということは、以来私の心の中になんとなく燻り続けてきた。中国ではもはや人々の本音を聞くことが難しい、というお話を聞いた時、ではそこで得られる「事実」はなんなのだろう、私たちが受け取っているニュースは何なのだろう、と思った。私たちに届けられる

ニュースは、幾重ものフィルターを介してでないと届かない。取材対象者が記者に対して話すときにかかるフィルターもそうだが、同時に記者の側にもフィルターがあるのではないか。取材で聞いたことをどう受け止めるか、どのエピソードを抽出して記事にするのか。記事を書く段階ですでにフィルターを通過しているように思えた。では完全な客観を実現することはできるのか、それを実現するには記者の感情を排除することになってしまうのか。記者の主観を排除するとしたら、記者のモチベーションはなんなのか。全くまとまらないうちに挙手してしまったものだから、私の発言はもはや質問の体をなしていなくて、ただ自分の思ってきたことをたどたどしく表明しただけだった。それでも松岡さん(と、周囲にいた研修参加学生)は真摯に話を聞いてくださったし、松岡さんのお返事は、それはずっと考えてきていることで、いまだにわからない。という言葉から始まった。私にわからずにいたことは報道に携わるプロの方でさえわからないようなことだったのだという安心感のようなものが確かにそこにあった。

もはや「事実」さえも一意に定まらないような世の中であって、「本当のこと」とは何か。たしかに大学生として日々を生きる中で、そこまで深いことを考える必要性はおそらくないと思う。受け取ったニュースを「ふーん」と思って消化してしまえばそれで事足りるし、実際大体のことでニュースと「本当のこと」は一緒なのだろう。しかしあの日、確かにかの異国の地で私をあの意見表明に駆り立てた何かが存在した。あれが「民主主義への危機感」と形容されるものなのか、浅学の私にはわからないけれど、でも確かなことは、あの時私は「本当のこと」を知りたい、それを知ることができるようにしなければならない、と思ったということだ。全ての一次情報を自分で手に入れたり、完全に客観的な立場から情報を伝えるすべがない以上、自分自身の内部を豊かにしてしっかりとした目を養うことで抗うしかない気がしてきた。

2.班行動

班行動は半日の台北市街地での時間と、1日の時間があった。私たちの班行動の本質は1日をかけて巡った金瓜石と九份にある。「台湾鉱業に日本統治時代がもたらした光と影」という題名でプレゼンテーションを終えたが、そのタイトルが全てであったように感じている。

金瓜石・九份は雨が多いからという阿古先生の取り計らいのもと、車を手配してまずは金瓜石に向かった。道中で運転手の方が豆知識をたくさん披露され、ありがたいと思いつつも心地よく車に揺られていたら、気づいたらあたりは山で、台北の市街地の面影はなかった。自分たちでは到底巡れないようなローカルルートで思いがけず黄金瀑布も見学でき、少々興奮気味で黄金博物館へ到着する。

黄金博物館は一带に当時の鉱山の面影を残す施設を残しており、その中心をなす博物館のような建物が黄金館だ。黄金館では、まず一階に日本統治時代の鉱業の様子が、二階には鉱物そのものについてが紹介されていた。入館時に予約した砂金取り体験までしばらく時間があったので、黄金館を出たあとは日本統治時代に建てられた神社を見に行くことにした。小雨が降り出す中、想像の五倍ほどの悪路を攻略し、山腹にある「黄金神社」へたどりついた。あいにくの曇り空だったけれど見晴らしはよかった。黄金神社の名前とは裏腹に石造りの廃墟のようになっていた様子は、ある意味日本統治時代が過去の遺物と化していることの象徴のようでもあった。砂金取り体験をして、雨足が強まる中逃げるように昼食をとったあと、金瓜石事件の記念碑を見に行った。日本軍の冤罪によって起きた金瓜石事件について記してある碑文は、日本に対して批判的である「日閥」という呼称を用いていた。予想はしていたものの、台湾に来て日本に批判的なものを見たのはこれが初めてだった。石碑は園區の中心部からは外れたところにあったが、大きさのあるしっかりしたものだった。金瓜石での最後の行程として、実際の坑道に入った。すでにあたりを歩いて靴は浸水していたが、坑道の中でも雨か地下水だかがしみだしていて、ほとんど絶え間なく水の滴る音がした。坑道をプラスチックで覆うようにしてあったので観光客は濡れないようになっていたが、鉱夫にはこのような雨除けはなかったはずだ。毎日ずぶ濡れになって労働していたのかと思うと嫌な気持ちになった。辛うじて雨が本降りにならないうちに車に乗り込み、夕暮れの九份へ向かった。

夕暮れの九份はやはり幻想的だった。同じくかつて鉱業の街として栄えた金瓜石とは違い、鉱業の面影はほとんどなかった。車のチャーターの時間もあり九份をじっくり見て回る暇はなかったので、足早に中心部をめぐる。日本人？とあらゆるところで聞かれる商店街、各地に灯る提灯、狭い路地。日本にはない風景なはずなのにどこか郷愁の念を抱かせる不思議な街だと思った。九份の、ひいては日本人からみた台湾の象徴ともいえる阿妹茶楼の前にやってきた。すでに雨は土砂降り、用意周到にレインコートを着込んだ観光客までいる中、折り畳み傘しか持ち合わせていなかった私たちはずぶ濡れだったが、その価値があるくらいの絶景だと感じた。阿妹茶楼に臨んだ写真を撮るために、隣の小さなデッキに所狭しと観光客が陣取っている。運転手さんとの待ち合わせ時間が迫り急いで戻ろうとする中、班のメンバーが気づいたのはデッキの一段下にあった鉱夫の像だ。

その像は観光客は目にもとめない様子でひっそりと存在していた。おそらく私たちも観光を目的にしていたら全く気づかなかったと思う。九份に確かに息づく鉱業地としての、あるいは日本統治を受けた場所としての過去の証でありながら、ライトアップされた街並みの影のように目立たずに存在していたあの像は九份の現在を物語っているように感じられた。九份の歴史を全ての日本人観光客が熟知していく必要があるとまではいわない。幻想的な観光地としての九份も十分に美しい。しかし今回、日本統治時代の鉱業という視点から九份をとらえる機会を得たことで、九份を見る目は確実に異なるものになり、そして九份をより立体的にとらえることができたと感じる。学問の入り口に立つ大学生として、研修で訪れた意義のある九份訪問であった。

共同通信総局長の講義

文科一類 松浦知希

台湾研修の5日目の夜は共同通信の台湾支部総局長のお話を伺った。内容は主に台湾人の親日姿勢、取材を通して感じた台湾と中国の違い、台湾で記者として活動する中で感じたことであり、ここで総括する。

台湾の正式名称は中華民国で、第二次世界大戦後中華人民共和国（中国）から国民党が到来し、長年独裁体制を維持していた。この影響で、台湾を中国の領土とする中国と、台湾は台湾それ自体で一つの国であるとする台湾の間に衝突が生まれており、現状も改善していない。台湾と中国の違いとして主なものを考えると、台湾は民主主義・なのに対して中国は共産党一党独・反日である、と言える。しかしこれは日本人の台湾、中国に対する一つの見方でしかなく、台湾が親日である、という文言を鵜呑みにしてはいけない。確かに台湾人の親日姿勢は存在し、実際研修中屋台で買い物をするときや街中で道を聞くときなどにこちらが日本人であることがわかると台湾人の方は親切に（ときには日本語で）対応してくださり、さらには中国人か日本人か聞かれ日本人であると答えると丁寧に接してもらえるということもあった（これは台湾人が中国人に対し敵意を持っていることも表していると言える）。しかし、それら親日姿勢は台湾の日本統治時代に日本が近代技術を持ち込み発展に寄与したため、という理由づけがしばしばされるが実情はそのように単純なものではない。この理由づけは主に日本統治時代に台湾のエリート層（植民に関わった側）であった高齢者が日本語で日本の貢献に関する書籍を出版したことによるものであり、本省人の、植民される側の台湾人の日本観は制限されてきた。こうした理由で、台湾人の親日を一元的に捉えてはいけないのである。

取材における台湾と中国の違いとして、記者の言論の自由が保護されているかどうかの違いがある。中国は共産党独裁体制のもと、その技術の多くを国民の監視に費やしている。中国において記者に取材を行うと、中国人記者は中国当局が発表する見解に反することのない建前の意見しか述べない。この傾向は年々強まっており、10年程前では比較的自由に、記者個人としての意見を教えてくれたという。記者も「中国の公式見解」しか話していない、というアピールをしなければならないため、あるいはキャッシュレス化が進み個人の足取りが全て政府に筒抜けであることなどから、自由な意見を求める他国の記者との接触は次第に減り、本音の話を聞くことは難しくなってしまった。台湾における取材では、台湾人は自分の考え方を包み隠さず話してくれるため、これにより一層中国における取材の不自由さが際立つという。

台湾の取材を通して感じる近年の台湾人の中国に対する意識としては、やはりこのまま民進党政権が続くと中国支配されるかもしれない、というものがある。昨今の中国の習近平やアメリカのトランプにより引き起こされた世界のナショナリズムの動きに台湾も飲み込まれており、ロシアのウクライナ侵攻、それに対しアメリカが派兵しなかったこ

となどもあり台湾では自衛意識が高まっている。蔡英文は国民の財産をどのようにして守るか悩んだ末、現在の主張は「現状維持」であるが、本音は独立を宣言したいと考えられる。蔡英文が中国対抗を述べることに對し台湾人は情勢不安を感じており、2024年にある総統選は難しいものになると予想される。

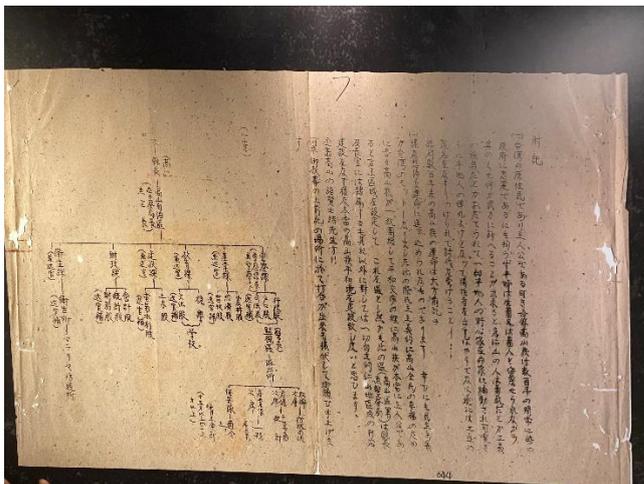
台湾研修 ～二二八国家記念館～

J1-220112 佐藤瑠璃

台湾研修の5日目である2月21日、私たちは二二八国家記念館を訪問した。台湾の二二八事件については概要をなんとなく知るだけであったが、実際訪れてみるとその凄惨さをまざまざと見せつけられた。二二八事件とは1947年2月28日に台湾の台北市で発生し、その後台湾全土に広がった、中華民国政権による長期的な白色テロ、すなわち当時はまだ日本国籍を有していた台湾人や日本人等の民衆弾圧および虐殺の引き金となった事件のことである。

現在では二二八国家記念館であるこの施設だが、従来は現在とは別の用途で使用されていた。1931年から1945年までは台湾教育会館、1945年から1959年までは台湾省参議会、1959年から1996年までは米国広報文化交流局・米国文化センターとして、いずれの時代も台湾における重要施設であり続けた。

多くあった展示の内、最も印象に残っているのは原住民族により日本語で書かれた抗議文である。私たちが記念館を訪れた時、偶然「台湾先住民族と二・二八」という特別展示が行われていた。以下に写真を掲載するが、この抗議文の始まりは「台湾の原住民であり主人公である可き」となっている。これは白色テロで粛清の対象となり、日々厳しくなる監視や社会的制約を受けたものだと考えられ、当時の中華民国政府による原住民族に対する政策の理不尽さを強く感じ取ることが出来た。また、その後に行われた「中国化」により先住民族の言語や文化、アイデンティティ、歴史が徐々に失われていったという。ガイドの方によると当時は原住民でさえも日本語を話すことができたが、中華民国政府の厳しい言語政策により日本語が廃止され中国語のみが認められるようになると、多くの原住民族を含めた台湾人が illiterate になったそうである。この抗議文が日本語で記されているのは、そうすることによって原住民族による言語政策への強い抵抗の現れを見せつけると同時に、そういった背景があることも示唆しているのである。



←原住民族である高山族による抗議文

その他にも興味深い展示は多くあった。展示室の壁一面に展示されていた二二八事件の被害者の顔写真もその一つである。被害者の名前や年齢、職業も併せて書いてあり、女性や子ども、日本人も含まれていた。特に日本人であり、琉球出身の漁民である青山恵先氏が含まれていたことが衝撃的であった。中華民国政府にとってみれば台湾人か否かの判定は中国語が話せるかどうかであったそうで、青山氏は当然中国語が話せず対象となったという。そのような意味でも二二八事件及びその後起こった白色テロの惨さを痛感させられた展示の一つであった。



←青山恵先氏の顔写真

2023年2月21日 台湾研修5日目（全員参加）

二二八国家紀念館

村上真人

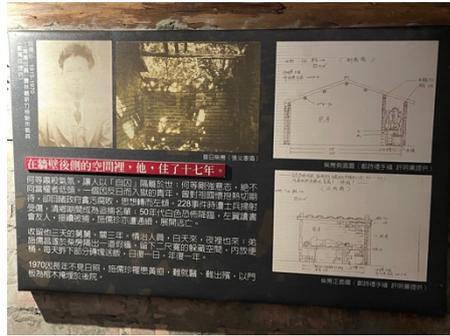
台湾研修の5日目午前は台北の二二八国家紀念館を訪れました。紀念館の紹介ビデオの視聴の後、ガイドさんに展示を案内していただきました。

ビデオでは、二二八国家紀念館の建物の来歴が紹介されていました。日本統治時代の1931年に台湾教育会館として完成したこの建物は、戦後台湾省参議会の議場として利用されました。その後米国在台湾新聞処、米国文化センターを経て2011年に二二八国家紀念館として正式に開館したとのことでした。そのような沿革や総統府に近い立地、そして多くの議員が二二八事件に巻き込まれ犠牲者も出たということが理由となり、この建物が紀念館に選ばれたそうです。日本統治時代、二二八事件とその後の白色テロの時代、そして民主化の時代を見つめてきたこの歴史ある建物は、二二八事件を後世に伝えるための記念館としての風格を感じさせました。

2階の展示は10のエリアに分かれています。エリア1からエリア5では二二八事件の背景及び展開がさまざまな史料とともに紹介されており、エリア6からエリア10では犠牲者についての展示が主でした。展示の中で特に印象に残ったものを写真とともに紹介します。



一つ目はエリア3にあるこの金庫です。キャプションには、腐敗した役人が横領した大量のお金を市民が燃やしたという旨が記載されています。第二次世界大戦後に台湾へ渡ってきた外省人役人の汚職や腐敗が本省人の不満を買い、二二八事件の背景となったことはエリア1でも説明されていました。人々が横領されたお金を奪いかえすのではなく燃やしたというところに、彼らの汚職や腐敗に対する強い怒りが現れているように思えます。



二つ目はエリア8にある施儒珍の壁と呼ばれる小さな空間です。これは二二八事件に続く白色テロの時代に、施儒珍という人物が弾圧を逃れるために17年間もこもっていた幅二尺の狭い空間を再現したものです。日光も射さず、身動きもまともに取れないような空間にこもらざるを得なかったということから、当時の政治的弾圧の恐怖を感じ取ることができました。

展示だけではなく、ガイドの方のお話もとても興味深く、短いながらも非常に有意義な時間でした。昼食には二二八基金会の招待でしゃぶしゃぶをいただきました。

台湾研修まとめ

J3220069 ジェニングズ パトリック 蛍

記録1：景美人権園區・国家人権博物館

国家人権博物館は元々政治犯収容所だった施設を民主化後に白色テロの時代の国家暴力の実像とその被害者達の記憶を忘れないために博物館にしたものである。政治犯が実際に収容されていた監獄から、運動場、家族と面会する建物など、白色テロの時代の面影をそのまま現代に伝えるような施設が多く保存されている。

ツアーで最初に訪れたのは当時政治犯を実際に裁いていた軍事法廷だった。ガイドの人がその法廷の部屋のレイアウトからわかる当時の司法の様々な問題点を挙げていて、興味深かった。例えば、傍聴席がないことや、検察官が裁判官と同じ位置に座っていることは、裁判が非公開で公平でなかったことを示唆しているらしい。

その後は、江南暗殺事件に関わったとして捕まった政府高官の牢屋に連れて行かれた。牢屋と言っても豪華なもので、別荘と変わりはない。プロップとして彼の書斎に置かれていた本がマルクス主義批判だったのは少し興味深かった。

次に連れて行かれたのは通常政治犯が入れられていた牢で、先ほどの部屋とは反対にとっても惨めな雰囲気だった。

最後に見たのは囚人と家族が面会する場所だった。ここで一番興味深かったのは面会中の会話は中国語ですることが強制されていたことだ。中国語を喋れない囚人達はただ面会相手と見つめあうことしかできなかったという。

エッセイ1：国家人権博物館

国家人権博物館の軍事法廷跡の外壁には天秤の両端に巨大なスローガンが書いてあった。これらのシンボルは法廷の公正さや、法の正義を体現するものであったが、その部屋の中で下された続けた審判は到底公平とは言えないものだった。僕は、オーウェルの『1984』に出てくる概念である”doublethink”を思い出さずにはいられなかった。口では理想を語りながら、実際には全く別のことを為すという矛盾を指す言葉であるが、このように矛盾した雰囲気は白色テロの時代の台湾社会全体に浸透していたのではないかと感じた。陰鬱とした牢獄は当時の空気を僕に伝えた。

現代の権威主義国家においても、その多くは白色テロ時代の台湾の同じように自由を標榜しながら一般の人々を抑圧する。台湾のすごいところはやはり、そのような状態から民主国家を作り上げたことだと思う。安易な進歩史観に陥ることは避けたいが、やはり自分の意見が言える社会は、自分の意見が言えない社会よりはずっといいことは間違いない。そのような民主的な台湾社会を作り上げたのは、日本統治時代の独立運動から連

綿と続いてきた台湾人達自身の強い覚悟と当事者意識ではなかろうか。景美の展示ではその意識の片鱗を観察できたと思う。

蔡焜霖さんの話に強い感銘を受けた。台湾の多層的な歴史の生き証人である蔡さんの話を聞いたこと自体驚いたし、自分はなんて運がいいんだと思った。一番衝撃的だったのは蔡さんが二十歳の誕生日を牢屋の中で迎えたということだった。僕はその話を聞くつい2週間くらい前に二十歳になったばかりだったので、自分のことのように考えられた。白色テロの時代の人権弾圧を頭では理解していたが、心で感じたのはその時が初めてだった。

記録兼エッセイ：グループワーク

台南

最初に大天后宮に訪れた。オーソドックスな廟のような気がしたが、とにかく神の数が多かった。そこで働いていた方に参拝の形式を教えていただいたのだが、線香を12本も持たされたときは驚いた。出口のところで近所に住んでいそうなおじさんに少し案内してもらった。あまり言っていることはわからなかったが、少しだけ聞き取れたので嬉しかった。その後赤崁楼に行ったのだが、とても観光地化されていて正直あまり印象に残らなかった。班員の一人が建物の極彩色を見て沖縄の建築のようだ、と指摘したが確かに色使いや装飾は首里城などの琉球建築に似ているような気がした。その後訪れた林百貨店もとても興味深かった。古い建物を活かして、台湾人の持つ摩登（摩登）へのノスタルジーを上手く利用している施設のように感じた。日本にもレトロという言葉に代表されるような過去への憧れはあるが、林百貨店ほどその方面に振り切った商業施設はないと思う。

台北

華山文創園區にまず行った。廃墟を活用したアイデアはとても興味深く、僕たちの班のテーマと深く関係していたが、蓋を開けてみたらちょっとおしゃれな商業施設に過ぎなかった。売っているもの自体は、日本の少しハイエンドな雑貨店に売っていきそうなものだった。しかし、様々な芸術展覧会や映画上映などを行っている点で文化施設としての役割を通常の商業施設と比べ多く担っていると感じた。

四四南村の眷村文化を紹介する博物館のようなものは空いていなかったの、僕たちは同村の主に商業的部分を見た。明らかに眷村の時代にはなかったであろうおしゃれなネオンサインを潜った屋内には雑貨屋やとても美味しいベーグル屋があった。真ん中の広

場ではイベントの資材を片付けていた人がいて、文化の発信源としての四四南村の役割を知った。文化財保存と商業化のせめぎ合いの結果としての文創の側面を班員は感じた。村の近くには小さい公園があり、様々な健康器具がおいてあった。多くは日本にもありそうなものではあったが、両足を載せて歩行をする器具はとても新鮮だった。この器具は大陸の公園にもあると聞いたので、高齢者の方の健康習慣においては兩岸あまり差異はないらしい。国父紀念館でも太極拳をしている高齢者の女性のグループを見つけてステレオタイプの真実を確認した。

二日目の午前には萬花や迪化街で様々な建築を見た。興味深かったのは迪化街の街並み保全の取り組みだった。京都の旧市街のコンビニのような形で、新しく作られる建物はそれまでの街並みに合わせて建てられていることがわかった。元々ある建物と新しく建てられた建物の微妙な違いを探すのは楽しかった。

その後、台湾師範大学を訪れた。台湾師範大学の前身は旧制台北高等学校であり、現在大学内でその歴史がどのように覚えられているかにとっても興味があった。実際に行ってみると、思った以上に高等学校時代の歴史はちゃんと記憶されていた。例えば、キャンパス内の中庭には台北高等学校のスローガンである自由自治と台座に書かれた鐘があった。さらに、少し脇に追いやられている印象はあったものの、旧制高等学校の生徒をかたどった顔抜きパネルがラウンジのようなところに置いてあった。

白色テロの時代の師範大学は保守的な風潮が強かったと言われる。民主化後の大学はより自由になり、その自由の歴史的系譜を台北高等学校に求める考え方がとても興味深く感じた。

これは現地に行くまで全く予想していなかったことではあったが、キャンパスのサイズ感でさえ駒場と似ていて、とてもしっくり来るとともに、空間の雰囲気というものがその歴史に左右されることを改めて思い知った。

駒場と異なる点はキャンパスの活気だろう。共同通信の支局長の方のお話を聞いた後、少し班員とともにキャンパス内を歩き回ったが、夜だったにも関わらず、ダンスをしている人やスケボーをしている人など様々な人達がキャンパスで活動していて、驚いた。やはり、キャンパスに生徒が実際に住むということの意義の大きさを感じた。

二二八記念館 記録

木佐貫祐香

阿部さんに案内してもらおう

陳さんからイントロダクション、二二八事件の概要や財団についてなど

事件のことは中高教科書で扱う

闇タバコを売っていた子連れ的女性が警官に銃で殴られる→繁華街での出来事だったので他の人々が警官に詰め寄る→警官が焦って銃を撃つ→流れ弾が1人に当たって死んでしまう→デモから暴徒化

二二八事件前夜の闇タバコ取り締まり事件を描いた版画

原画は神奈川県立近代美術館に収蔵されている

作者は戦後中国から台湾にやってきた芸術家

上海の版画展で展示、内村鑑三関係者と知り合いだった縁で日本に持ち込まれた

作者も反体制側の思想を持っており、白色テロで犠牲に

日本引き上げ→期待→歓迎→国民党政権は腐敗、市民弾圧→失望

日本人は引き上げの際に荷物2つと現金1000円しか持てなかった(高官も大学教授も皆同じ待遇)

日本統治時代から台湾人の議会を求めていたが得られなかった(1945.4には台湾人の衆議院選挙定められたが戦争の関係で実施されず)→そのときからの結果として引き上げ時には期待が高まった

台湾文化→日本文化→中華文化 という目まぐるしい変化を味わった

日本時代には抑圧はされたが殺されはしなかった→新聞紙上で政府に対する批評や要求、新政府は自分たちの味方だと思っていた→後々新聞社のトップは殺される

台湾は米や砂糖の産地→物資全て中国に送られた→台湾人の生活は苦しくなる一方

事件のことはラジオで台湾全土で広められた結果全土で人々が立ち上がった

各地で二二八処理委員会発足:ここで要求を出せば良い台湾になるだろうと人々はこぞって参加
→のちにそれが仇になる

当時大きな役割を果たしたのが学生たち

…日本統治時代には日本人からはっきりしたものではないにしても差別(学校の定員など)→日本引き上げに期待→自分たちのコミュニティも駆使して新時代のために活動(日本統治時代に軍事訓練も受けておりそのときに使用していた刀なども残っていたのでそれを使用したりもした)→政府からは嫌われる

中国から派遣された兵は正式な兵ばかりではない、大陸各地から集められた人たち、言葉も通じず恐怖心から銃を向けてしまったという面もあるのではないか

当時の政府発表と後々公開された機密情報は食い違っている→二枚舌政策

ex. 政治改革を承諾したが裏では中央からの軍の派遣を要請していた、市長選挙を許可すると言っていた裏では高尾で機銃掃射していた、派兵しないと約束した裏で基隆に上陸した軍隊が無差別に市民を殺害し血の海にしていた

新聞社は閉鎖されたり政府に有利な記事しか掲載させなかったり、学校も閉校させたり…

改革委員会をやる、と触れ込んで集まった人々を逮捕したり

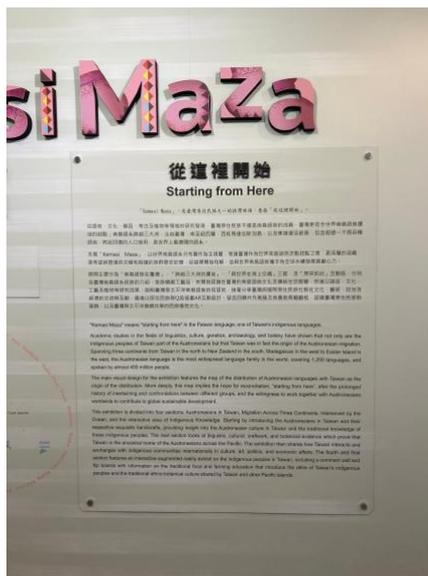
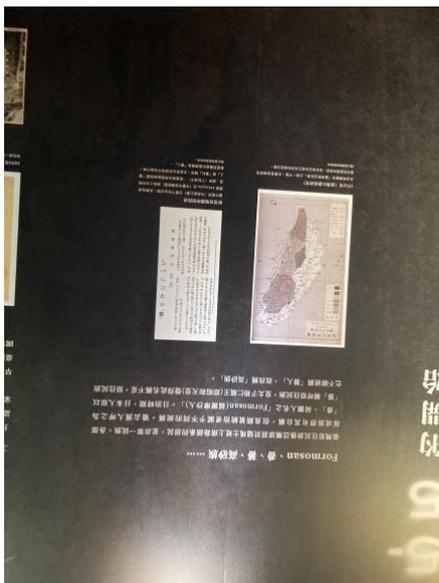
犠牲になった人々は議員や医者、司法界の人々が多い:高学歴で頭も良く身分も高い、日本に留学して学んでいたような人々もいた

【司法界の人々】

日本統治時代は法治国家→台湾独立でより法治を進めようとした→主張→逮捕、処刑



特に印象に残っている展示：当局に追われ、逃れることもできず、家の庭にあった小屋の壁の裏に17年間潜んでいた方の当時の居住スペースのレプリカ。身動きひとつ取れず、食事も家族が運んできたものをここで食べ、排便もこの中でおこなった。陽の光を浴びることも運動することもできず、黄疸になるも医者に見せることはできないので、そのまま亡くなった。埋葬も、人目につくことを避けて自宅にあった板で作った棺桶に入れられ、自宅の庭に埋められた



原住民についての特別展（上写真左）←こういった展示があることに驚く。総統府でも原住民に関する特別展（上写真右）があり、人々がその存在を常に意識できるようになっている気がした

元は原住民文化の名前がある

日本統治時代は日本風の名前、戦後は中国風の名前に改名→人によっては3つの名前を持つ
今では原住民には補助がつく→アイデンティティのためというよりそのために原住民として生きるように

部落で共有していた土地→日本統治時代に近代化の中で所有権を明らかにできなかった土地は
接収される→戦後もそのまま国有地として保持される→事実関係や権利関係が複雑になった結
果簡単には土地を元の部族に戻せない状況

原住民は行政の管轄が別(山地行政)

原住民は積極的に政治的活動に参加していたわけではないが、巻き込まれる形で亡くなった方
も少なくなかった

エッセイ：二二八記念館

木佐貫祐香

2月21日。台北に来て2日目である。抜けるような青い空にいかにも熱帯らしい陽の光、爽やかに吹き抜ける風が特徴的な台南とは一転し、2月の台北はまだ寒く、どんよりと曇り、時折雨もばらついた。あらゆる物の輪郭がはっきりしている台南を恋しく思いつつ、バスを降りると、目の前に現れたのは重厚な煉瓦造りの建物だった。二二八国家記念館である。横浜育ちの私にとって、古めかしい西洋館はどこであれ懐かしく感じられる。ここもまたそうだった。よくよくお話を伺うと、建物自体はもともと、1931年に日本の手により台湾教育会館として建てられたものなのだという。

常設展に足を踏み入れると、まず目に入るのが大きな版画だ。闇タバコを販売していた子連れの女性が、それを摘発しようとする警官に殴られながらも子を庇おうとし、それを目にした周囲の人々が警官に詰め寄る。焦った警官の撃った一発の流れ弾が群衆の一人に当たる様が、印象的に描かれている。実はこの絵は、台湾人によって描かれたものでもなければ、原画も台湾にはない。作者は大陸出身の黄榮燦という画家で、戦後台湾に移り住み、国民党政権による国家権力の濫用に心を痛めていたのだという。この絵は彼自身の手で他の作品と共に上海の絵画展に出展され、内村鑑三の関係者を經由して日本に持ち込まれ、今では神奈川県立近代美術館に保管されているのだそうだ。人の縁というものの不思議さに思いを馳せて気が遠くなると同時に、人の想いに国境はないのだろうと思った。なお、作者はこの後、白色テロ時代に犠牲になったそうだ。

この版画に描かれる闇タバコ摘発事件が二二八事件の直接の原因であるとはいえ、導火線自体はもっと前から引かれていた。日本統治時代、台湾の人々は自治権を奪われ、また目に見えぬ差別も味わっていた。だからこそ、国民党が台湾に上陸すると、人々は「ついに我らの”祖国”が実現するのだ」と高揚し、諸手を挙げて歓迎したのだった。国民党政権下では、台湾で採れた米や砂糖が軒並み大陸に送られ、台湾人の生活は苦しくなる一方だった。加えて役人たちの間では汚職が横行、物価も高騰し、それまで公用語とされていた日本語は禁じられ、台湾は社会・経済ともに未曾有の大混乱に陥った。初め新聞社はこぞって党の政治を宣伝し、そして時には新たな政治への期待や要求も掲載したが、次第に政権を批判するようになっていっ

た。知識人たちも自分の知識やコミュニティを駆使し、新時代の幕開けへの期待から、より良い台湾のために行動を起こそうとした。人々がこうした動きに出ることができたのは、日本統治時代には抑圧こそされ、その末に殺害されるようなことはなかったからである。ところが、新たな指導者はそうではなかった。

警官の撃った流れ弾が群衆の一人に当たり彼が亡くなったということは、すぐさま台北に広まった。それまでに蓄積されてきた中華民国への怒りが爆発し、デモに参加していた人々は次第に暴徒化、中国人の営む商店を焼き討ちにする者も現れた。台北市のラジオ局は闇タバコ事件のことを台湾全土に放送し、暴動は台湾全土へと広まっていった。この一連の二二八事件に大きく寄与したのが、学生たちである。彼らは日本統治時代に、高等教育のほか軍事教育も施されており、また独自のコミュニティを有していた。手元にあるものを駆使し、彼らは戦ったのだった。

彼らはもちろん時代の被害者と言えるが、実は被害者は他にもいる。鎮圧を担った国民党側の軍人たちである。大陸からの兵士のうち、正式な訓練を受けた職業軍人はあまり多くなかったのだという。大多数は大陸全土から集められた下級兵士であった。訳もわからず言葉の通じない島に連れてこられたと思ったら、ものすごい剣幕で大勢の群衆から詰め寄られるのである。パニックに陥って機銃掃射という手に出てしまう兵士がいてもおかしくはない。当たり前だが、その行為自体は擁護の仕様もないものである。とはいえ兵士たちも、そのような時代に生まれてこなければ人を殺めることなどなかった一般の人々に過ぎない。かくいう私も、生まれた時代と場所が違えば、彼らの一人になっていた可能性があるのだ。恐ろしいことである。

国民党政府は、どうにか暴動を治めるべく、いわゆる二枚舌政策を採った。公式発表では政治改革を承認する一方、秘密裏に大陸へ軍の派遣を要請し、市長選挙を許可すると言う側から高雄で機銃掃射を行い、派兵しないと公式に宣言したにもかかわらず基隆に上陸した軍隊は市民を無差別に殺害した。新聞社や学校もたくさん閉鎖された。改革のための委員会を開くと触れ込み、集まった人々を逮捕することすらあったそうだ。

展示に沿ってこのような流れを追い、気がつけば事件被害者の遺した遺書の展示ケースの前にいた。「親愛なる妻へ」という字面から、自然と自分の恋人のことを思い出す。もしも恋人あるいは配偶者が、夢と希望を追った末にいきなり行方不明になったら。紙切れ一枚を残して二度と会えない人になってしまったら。この展示ケースの前には、あまり長いこと立っていることができなかった。

足早に最後の展示に向かう。数えきれないほどの人の顔写真と名前が壁一面に貼られている。事件被害者のものだった。驚くべきことに、展示されているのは被害者の一部に過ぎないのだという。たまたま無差別殺害の場に居合わせただけの人々も、あるいは言動から当局に目をつけられていた人々の家族というだけで殺された子供もいたようである。悲しいなどという言葉では言い尽くせない感情に襲われる。二度と繰り返してはならないし、誰もが知っていなければならない、そして永遠に語り継がねばならない負の歴史だ。

台湾の素晴らしい点は、連続する歴史の中で以前の政権が起こした過ちを隠し立てせず一般に公開していることだ。この記念館が完全にあるのかは私にはわからないが、それでも事件や被害者と向き合う施設が存在していることに違いはない。台湾はほんの30年ほど前まで白色テロ時代の渦中にあったにもかかわらず、今や人権先進国と呼ばれるまでになっている。この急速な進歩が実現した根底には、歴史と真っ向から向き合う姿勢があったのだろう。戦前の日本にも政治犯は存在していたが、彼らと向き合い負の歴史を語り継ぐ公の大きな施設は、日本にない。我々は、こうした点では台湾を見習わねばなるまい。

記念館を出ると、雨はまだ降り続いていた。風もやや強く、コートの襟を立てる。遠くに目をやると、雲の隙間からほんの少しだけ太陽の光が覗いていた。

228 国家紀念館

J1-220115 出水 喜太

今でこそ「民主的」と言われる台湾が、日本統治時代の終了当初はそうは言えなかったというお話は、事前研修の段階で少しは意識していました。また、「二・二八事件」の存在も、高校での世界史の授業や今回の事前研修で、名前は耳にしたことがありました。しかし今回の研修で、現地ならではのさまざまな資料に触れ、そこで初めて深まった考えがありました。

まずは、228 国家紀念館の建物は、1945 年から 1959 年の間は「台湾省参議会」として、日本の統治から解放された台湾人が民主政治について議論する場に、1959 年から 1996 年の間は「米国広報文化交流局・米国文化センター」として、欧米の情報を得る重要な場に、それぞれなっていたというお話を聞きました。日本統治時代の終了後、この建物は、台湾の人々が民主政治を目指すための場として機能してきたということです。ここで、台湾の民主化を目指して行動した人がいたこと、またそのための場があったことを、改めて意識しました。

次に、展示の見学を行いました。二・二八に関するさまざまな知識に関し、現地ならではの資料を交えて理解を深めました。特に印象的であったことを述べていきます。

まず、民主化を求める人々については、「台北での騒動は、ラジオを通して全台湾に伝えられたこと」「二・二八事件の終結のため、政府に要求を出す『二・二八処理委員会』が存在したこと」「学生の役割も大きかったこと」が特に印象的でした。台湾の民主化を目指す人々の動きは、研修前に自分が思っていたよりもはるかに大規模で活発なものでした。

次に、政府側の動きについて特に印象的だったのは、「台湾への上陸後、台湾の豊富な食料を大陸に大量に輸送し、食料危機を引き起こしたこと」「官吏の汚職も目立ったこと」「選挙を行う裏での武力鎮圧など、本音と建前で構成される『両面手法』を行ったこと」「話し合いのために委員会を開くと言って民衆を集め、殺害したこと」「新聞社を閉鎖し、偏向報道を強制したこと」「台湾人が開いた学校を閉鎖したこと」です。今も台湾の政権を握ることのある国民党のこうした強硬な側面は、高校までの学習ではそれほど強調されてこなかったもので、今回はかなり新鮮で衝撃的な体験をすることになりました。展示の終盤で、犠牲者の写真がたくさん並ぶのを見た際は、かなりの衝撃を覚えました。

こうして今回は、二・二八事件に関してかなり見識を深めることができたわけですが、最後に「台湾の学生は、中高時代に二・二八事件をよく学ぶ」というお話を聞きました。その一方で、二・二八事件は名前しか聞いたことのなかった僕は「日本の学生も、歴史の授業の中で二・二八事件についてもう少し学び、考えを深めるべきではないか」という考えが一瞬頭をよぎりましたが、今の学習内容の多さを考えると、それは難しいことなのかもしれません。そこで考えたのは、それぞれの学生が、自分の住む地域で起きた悲しい出来事についてよく学び考えを深めることで、形は違えど他の地域でも似たような悲劇は起きていて、また誰が加害者になるか、被害者になるかは分からない、という視点を持つことが大切なのではないか、ということです。

今回の学びを忘れず、これからの国際交流に活かして行きたいと思います。今回のように台湾で学ぶ、台湾を学ぶ、という貴重な機会を与えてくださった方々に感謝の気持ちを表し、このエッセイを締めたいと思います。

二二八国家紀念館

吉田小乃果

台北の二二八国家紀念館は台湾で起きた二二八事件についての展示をしている施設です。二二八事件とは、日本軍が降伏後、中国国民党の統治下の台湾において閩タバコの取り締まり事件をきっかけに国民党の腐敗政治に対し台湾各地で大規模な反抗が起き、戒厳令が敷かれ、激しい弾圧が行われた事件です。

まず、資料館を見学する前に、二二八事件記念財団の陳さんに資料館の沿革や事件の概要についてのレクチャーを受けました。資料館はもともと、日本統治時代に台湾教育会館として建設され、美術展を開く場所などとして利用されていたそうです。太平洋戦争終結後、1946年にこの地で台湾省参議会が発足しました。その後省参議会のメンバーの多くが逮捕や殺害され、二二八事件に深くかかわった場所でした。その後、米国広報文化交流局が入居し、現在は二二八事件にまつわる展示を行う紀念館となっています。



その後、二つのグループに分かれ、紀念館の中を案内していただきました。壁には二二八犠牲者に追悼する人々の写真が飾られていました。中国国民党は、中華民国憲法に民主、人權、自由などを明記しているにもかかわらず、実際は圧政を敷いていました。台湾において二二八事件は長らくタブー視されており、犠牲者に追悼している人々はのちに政府に逮捕されたそうです。紀念館の常設展に入ってまず目につくのは、壁一面に貼られた二二八事件の犠牲者の写真です。ずらりと並べられた写真は事件の深刻さ、凄惨さを物語っていました。中には日本人や韓国人の写真もありました。また、2歳の子供までもが「政府に反抗心があった」として犠牲になっていました。しかし、ここに並べられている犠牲者は決して全員ではなく、実際には知られていない犠牲者がいるそうです。



常設展では、時系列を追って事件の様子が展示されていました。太平洋戦争で日本が降伏したのち、日本軍が撤退すると中国国民党の軍が台湾へ派遣されました。台湾の人々は、日本の統治から逃れやっと同じ民族の統治を受けられることができると喜び、「光復」と称して中国本土からやってきた軍を歓迎しました。しかし、軍の実態はみすぼらしく、台湾の人々は落胆したそうです。軍隊の規律がなく、汚職や犯罪が横行しました。日本式の生活を営む台湾の人々は差別され、台湾人は中国語が話せず文化を理解できないとして出世をさせないなど、結局台湾人への差別はなくならず、台湾の人々は不満を抱いていました。日本統治時代、日中戦争までは漢文を容認していたのに対し、国民党は1947年にはすでに日本語の使用を禁止しました。日本統治終了時、台湾の識字率は95%程度に達しており、中国本土の10%程度を大きく上回るものでした。そのため、台湾には知識人層が多く存在し、雑誌などが多く発刊されていました。その後、こうした雑誌は発刊に政府の許可が必要となりました。政府の汚職や本省人（もともと台湾にいた人々）への差別は大きな不満を生みました。

二二八事件の勃発後、政府への反抗手段として、知識人が中心に支持した言論による解決と政府は信用できないとして武装による解決が望まれました。二二八事件処理委員会が立ち上げられ、言論による解決、政治上の改革が望まれましたが、国民政府は協力的な姿勢を見せた一方で激しい弾圧を行いました。政府が蒋介石に電報で援軍を要請したことで、中国からの増援部隊が基隆などの都市に到着し、武力鎮圧を行いました。また、高雄では駐屯地の司令官が独断的に鎮圧行為を行い、発砲や虐殺を行いました。

3階には、捕らえられた人々が鉄線で手を縛られ、次々と銃殺されていく様子を描いた大きな絵も展示されていました。これは、捕らえられた人の1人がたまたま生き残り手を縛られたまま足で泳いで脱出し、その証言をもとに描かれた絵だそうです。その後、企画展が行われていた原住民と二二八事件についても案内していただきました。原住民の人々が日本語で打ち合わせを計画している文章が展示されていました。



記念館の中を案内していただいた後は、最初にレクチャーを受けた部屋に戻り、質疑応答の時間となりました。部屋に戻る際、杜福安氏の漫画版「烈火の中の二二八」をいただきました。事件の経緯が詳しく漫画で描かれており、二二八事件についてより深く学ぶことができました。質疑応答で、台湾の学校教育において二二八事件がどのように扱われているのかについて質問しました。二二八事件は現在中学や高校の教科書に掲載されており、学ぶ機会があるそうです。また、大学でもジェネラルエデュケーションとして台湾史を勉強する機会があるそうです。二二八記念館は2月28日当日に記念行事に参加するで、私たちの訪問時はちょうどその準備をしていた時期だったそうです。また、週末には学生が訪問し、記念館を見学するそうです。記念館は事件について学ぶ場所として機能するだけでなく、教育においても発信地となっていることがわかりました。現代では民主化された台湾において、こうした強権的な政治が行われた時代があること、このような悲劇を繰り返さないという教訓を学べたことは、台湾の歴史について学ぶ上で非常に有意義な機会となりました。

台湾研修課題(二・二八国家紀念館)

J1-220113 杉本英輝

今回の研修で初めて台湾に渡航し、行く先々で台湾の新たな側面を発見することができた。二・二八国家紀念館もその例外ではない。

昨今、メディアなどで台湾は民主的な国家として権威主義的な中国と対比されることが多い。そのような影響もあってか、非民主的な台湾というのはどうしても想像しがたいが、中国で文化大革命が起きていたのと同時期に台湾においても白色テロと呼ばれる国家による人権弾圧があったことを二・二八国家紀念館で知った。

台湾における白色テロは二・二八事件が発生した1947年から厳戒令が解除された1987年までの約40年という長い期間にわたり続いた。台湾が世界的に自由と民主主義の国家として評価されるようになるまでの過程には、それらを達成しようと奮闘した人々の努力や国家による弾圧で犠牲となってしまった命があるのだということを展示品を見て実感した。展示品の中で最も衝撃的だったのは弾圧で命を失った人々の顔写真の一覧だった。犠牲者の写真は老若男女にわたって存在したが、流れ弾にあたって亡くなった赤ん坊や無実なものにもかかわらず殺されてしまった青年たちの生前の写真を見て、本当にいたたまれない気持ちになった。弾圧を逃れるためにある人が暮らしていたという隠れ家も同じくらい衝撃的だった。ガイドの女性いわく、人が一人入るか入らないかのスペースで生活していたその人物は逃亡が見つかるのを恐れて病院に行くこともできず亡くなってしまったようだ。

第二次世界大戦後に日本の統治から解放され、やっと自由と民主に基づく自治を行うことができるのではないかと台湾人の期待は、彼らが祖国として思いを寄せていた大陸中国の政府によりむなしくも裏切られてしまった。二・二八事件は白色テロを象徴する出来事の一つであるが、そのような事件にきちんと向き合う台湾や二・二八国家紀念館から学ぶべきことは多い。自由かつ民主的と評される台湾が積極的に自国の負の歴史と向き合う姿を見ると、どんなに勇気が必要で容易なことでもなくともそれを実践することが大切だということが身に染みて実感できる。

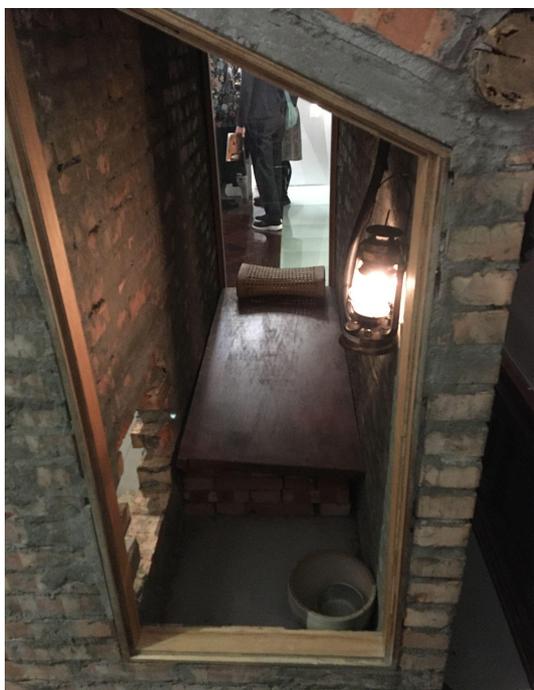
二・二八国家紀念館内の写真



二・二八事件の様子



犠牲者の写真



隠れ家

台湾研修エッセイ_松浦拓夢

理科一類松浦拓夢

夕食交流会振り返り

台湾研修が終わった今、僕は台湾に対する、いや、東アジアという地域に対する言いようのない感情に囚われている。それがどのような感情であるのかもわからないしなぜ生じるのかもわからない、ただ、ふと、日常生活で台湾や中国に関連する出来事に出くわすとなぜか目頭が熱くなるのだ。台湾から帰国した三日後、僕はたまたま台湾の方とお話しする機会があった。そのh音の抜けた台湾訛りの中国語を聞いた瞬間何かが込み上げてきた。そのような出来事をいくつか経験し、僕は台湾研修を通して「何か」が僕に深く突き刺さったことを確信した。

ただ、今言えるのは、その「何か」を言語化するには僕の感性、知性はまだまだ浅いということだ。いつかその感情を言語化できる日が来るのだろう、しかしそれは少なくとも一ヶ月後だろう。

台湾研修を思い出すと、その「何か」が僕に刺さった決定的な瞬間として夕食交流会が考えられる。7日間台湾という空間を感じ、自分の中で「何か」が醸成されていることはなんとなく感じていた。その「何か」が僕の芯に強く刺さり、心を強く揺さぶり始めたのは夕食交流会で台湾を研究されている方々のお話を聞いたときだと思う。

真理大学で日本語を教えられている先生は、2年間台湾にいるつもりが気が付いたら32年になってしまったらしい。彼女の台湾は民主主義がまだ若い国、まだ民主主義が生きている国、という言葉が印象に残った。それは完全とは言えずとも僕の台湾に対して感じていた「何か」を部分的に言い表した。僕が感じた台湾特有のエネルギーの一部は確かにそこに起因すると思う。そして、そこに惹かれている自分がいる。初めての海外でずっとその国に居着いてしまう人もいる。そのような人は何を感じるのだろうか。それは僕を感じる「何か」に似ているのだろうか。

阿古先生の話も印象に残った。京論壇が僕たちと同時期に香港で研修を行っていたこと。東アジアの中の一つの国として日本と台湾を強く意識させられた。この7日間、台湾において日本と台湾の関係性について感じるが多かったからか、このお話も僕の「何か」に強く響く部分があった。彼女は台湾を研究されているわけではないが、東アジアという視点が自分の中で大きなものとなった。

こんなふうにして僕はなんとなく台湾に惹かれ始めた。そして、帰国後3日して突然台湾のブロックチェーンスタートアップのCEOと繋がり、インターンに誘われたこ

とは歯車を大きく加速させた。東アジアを起点とした自分のキャリアが一気に現実味を帯びた。「何か」を本気で探求してみよう、そう心から感じた瞬間だった。

台湾で感じた「何か」。これは間違いなく自分にとって重要なものだろう。僕は今、京論壇に参加すること、自分の運営する東大ブロックチェーンクラブで東アジアの大学と関係性を構築すること、そしてインターンを通してこの「何か」に迫ろうと考えている。2年間の滞在のつもりが32年になったように、この8日間で僕の人生に大きく響くかもしれないと考えるとワクワクが止まらない。

グループワーク振り返り

「場」を経験して得られることは何か？これはグループワークを通しての僕の一つの大きな問いだった。台湾研修に加え東大工学部の選抜メンバーによるシリコンバレー研修を春休みに予定していた僕にとってフィールドワークの意義は大きな問題だった。インターネットの発展により、下調べによって大方の疑問は解決してしまう。また、下調べによって解決しなかった疑問もオンラインミーティングを行えば簡単に一次情報が入手でき、解決する。これでは現地にわざわざ赴く意味などないではないか。確かに現地に行き、しか得られないものはあることは間違いがない。しかし、それは本当に航空券の料金に相当するものなのか？台湾研修のグループワークはその問いに対する示唆に満ちていた。その示唆から自分のフィールドワークの意義に対する考察を広げていこうと思う。

結論から言うと、現地へ行き、「文創、建築」というテーマに対する解像度は上がったし、現地訪問にはかなりの意義があることを実感した。

この要因として挙げられるのは新たな視点の獲得であろう。下調べ時点では対象に対する視点は自分のものだけに限られる、しかし、現地を訪れて実際に感じるのは様々な要因が複雑に絡み合った表象である。例えば、華山1914文化創造地区において、僕は「カウンターカルチャーがサブ・メインストリームカルチャーになるまで」という視点で下調べを行っていた。しかし、実際に訪問して感じたのは「アーティストのインキュベーション」「様々な文化の交差点」と言った要素であった。自分の目で場所を観察することは気づきを与え、今後のリサーチにおける様々な示唆をもたらす。

また、「非言語的な情報伝達」も挙げられると感じる。インターネットで文創作品を見て感じることと実際に目の前で文創作品を見て感じることは大きく異なる。視覚だけでなく五感を持って空間を体験できることが大きいだろう。また、「非言語的な知見」は意図せずに降りてくる。街を歩いているとき、ご飯を食べている時、

現地の方とおしゃべりしている時、当初のリサーチ案では予想していなかったタイミングで自分の感性に訴えかけるものを感じる。それもまた現地に行ってこそ得られる財産である。

さらには、当然と言えば当然であるが人との出会いも欠かすことのできない観点である。台湾研修のグループワークで一緒になった現地の大学生の方とは今でもラインでやり取りをしている。仮にオンラインで話していてもこんなに仲良くはならなかったであろう。

コロナ禍でテレワークが推奨され、インターネット上で全てを完結させることが可能で効率的となった今、現地に行くことの意義を問い直すことは僕にとって重要課題であった。自分なりの視点で下調べをできるところまで行うことができるのはインターネットの恩恵であると感じる。その一方で、一見軽視されがちな非言語的な知見を深めることや、新たな発見を見出すことは現地でしかできないことである。フィールドワークはいわば、0→1を生み出すのに適しているのだ。それぞれの特徴を把握して知見を蓄積していくことこそが旅行の楽しみなのではないかを感じる。

今回台湾研修に参加させていただいて、様々な場所に足を運び、実際に現地で活動なさっている方々の声を聞くことで、渡航前に自分が想像していたよりも多くの知識や問題意識にあたることができ、本当に貴重な経験となりました。このエッセイでは、私が特に関心を寄せた、台湾のイノベーションについて記したいと思います。

20日の午後の班別行動で、オードリー・タンさんがデジタル担当大臣だった際に設立なされた施設である社会創新実験中心を訪れました。社会創新実験中心は、タンさんがデジタル担当大臣在任中に毎週水曜日滞在し様々な方と議論を行っていたオフィス、新しく起業した、社会問題に取り組む企業に貸し出しているオフィス、そして医療とITを用いたベンチャー企業を支援する団体であるTAcc+が同じ建物内に存在している場所です。私は台湾は社会問題への取り組みやイノベーションが活発であるというイメージを抱いており、その理由を知りたいとこの施設への訪問を決めました。

しかし、案内してくださった方によると現在社会創新実験中心は活動が停滞しているとのことでした。トップであったオードリー・タンさんが2022年8月27日に新たに設置された数位発展部の初代部長に就任したことで社会創新実験中心はトップを失い、今後誰のもとで運営されるのかや運営方針などが定まっていなかったためです。このことを伺って初めて、私は、権力の円滑な移動や組織の維持は重要なインフラであると気づきました。台湾では組織のトップが変わるとトップに合わせて仕組みを大きく変えてしまい、今まで蓄積してきたノウハウなどを活かせるなくなってしまうことがたびたび起こるのです。権力の円滑な移動や組織の維持ができなければ必然的にリソースの無駄が大きくなってしまいますし、ノウハウの蓄積が必要な分野では発展が阻害されかねない分野では遅れをとってしまいます。イノベーションや変化が活発であることは時代の変化に素早く対応できるメリットもある一方、権力の円滑な移動や組織の維持ができていないことの裏返しでありデメリットが必ず存在するのだと感じました。社会創新実験中心の建物は元々日本軍の兵站面を担う基地であり、その後アメリカの空軍が使っていたものだそうです。急いで建築や改築がなされた結果建物の強度が保証されておらず工事をしなければならない状態にあるという事実も、権力の移動が円滑に行われていない台湾の現状を象徴しているかのように思えました。

もう一つ、権力が円滑に移動できず解散した組織の例としてPDISがあります。PDIS(Public Digital Innovation Space)は公共サービスをデジタル技術を用いて改善するよう促す団体であると同時に、各省にParticipation Officerを配置して育成し、定期的にParticipation Officee同士の会議を開催することで省の垣根を越えた協力を促す役割も果たしています。これもオードリー・タンさんが設立なされた団体であり、社会創新実験中心と同様に現在はアクティブではありません。タンさんや協力者が個人的に行っているブログでの発信は続いており、「政府でなく個人ベースの活動であれば続けやすい」と案内してくださった方がおっしゃっていた通りでした。

個人での活動には限界がある以上、今後理想的には政府が一貫したイノベーション支援や社会問題への取り組みを行っていく必要があります。これが私が感じた、台湾のイノベーションの現状です。

グループワーク (ハイテク班)

一人当たりのGDPが日本を超え、経済成長が著しい台湾の主要な産業は半導体産業である。自由行動の二日目は、半導体の製造で世界一のTSMCのミュージアムと、TSMCなどの半導体企業にAMR(Autonomous Mobile Robot)を提供しているGyro Systemsという会社の企業見学に伺った。また、自由行動の一日目は、イノベーションを促進する目的の政府機関である社会実験中心を見学させていただいた。

TSMCは、半導体の設計ではなく製造を専門にする世界初のファウンドリ会社である。当初は従来通り、設計から製造まで一貫した生産ができる会社を作る予定だったが、設計ができる技術者が少なく、製造に専門化することにした。また当時アメリカのシリコンバレーでは逆の状況、即ち先進的な半導体を設計できるが資金がなく製造できない企業が生まれていたため、好都合だった。製造を専門にすることで、TSMCは世界一の技術力を確立し、ファブレス企業の繁栄、ひいては業界のイノベーション推進につながった。

また、TSMCがある地域は新竹サイエンスパークとして、国から税金の免除や、特別に税関を設置し輸出を容易にするなどの待遇を受けていた。このように台湾政府が半導体産業を国を挙げて支援しているのが印象的だった。

Gyro SystemsのAMRは、半導体のある工程から次の工程へ輸送する、本体とグリップからなる機械である。本体は自ら地図を作成し、100個以上のセンサーを利用して移動し、最後にQRコードで位置を微調整をする。本体は一緒であるが、運ぶ半導体ごとにグリップが異なる。以前は人によって行われていたが、機械に任せることで非常に高価な半導体が破損するというリスクを軽減することが目的だ。

工場内には、OHT(Overhead Hoist Transportation)という所謂ベルトコンベアを採用している箇所も存在するが、全てOHTという訳にはいかない。なぜなら時期によって生産するものが流動的に変化するため、ベルトコンベアで工場のレイアウトを固定化することは都合が悪く、AMRで柔軟性を保つためである。また、なんらかの不具合でAMRが停止する際は、急に電源が落ちるのではなく、そのままの位置で停止するようにFail Safetyのシステムが用意されている。

AMR一台あたりの値段が非常に高価なので、台湾でrichな産業である半導体産業を相手にしているが、将来コストが下がっていった暁には災害救助など別の分野に進出することを考えていた。Gyro Systemsは起業当初3人だったメンバーが現在は120人にまで増え、中国やシンガポールに支店を持つ。社長さんのお話を伺い、中小企業であるGyro Systemsの事業拡大に対する野心的な姿勢がとても刺激的であった。

J4-220668

理科一類 1 年

釜土真周

2023/03/04

TSMC の技術力

班での自由行動が許された日に、我々ハイテク産業班は世界トップの半導体会社である TSMC の展示を訪れた。そこでは TSMC の軌跡はもちろん、技術の進化によってどのような将来が期待できるかについての展示もあった。VR で体験できる未来の世界では自動運転をはじめとする様々な活動の自動化がなされていたが、正直なところ見て呉れただと感じた。他の班員も VR の体験後に同様の感想を抱いており、それについて意見を交わし合ったところ、興味深い結論が出た。

技術は目的に先行することが多いというのが我々の結論であった。つまり、何かを実現するために技術を開発することよりも、既存の技術を目の当たりにした何者かが「これを使えばこういうことができるのではないか」と閃くことの方が多いのではないだろうか。TSMC の最大の強みは現在世界で最も薄い半導体チップを作成できることだが、この技術を応用して別の何かの実現がなされるかもしれない。展示を見たときは徒らに技術を進歩させてもしょうがないのではないかと疑った自分だったが、班員とのディスカッションで科学産業も塞翁が馬が常々であることに気がつけた。他にも半導体チップの作成に関するドキュメンタリー動画などを閲覧でき、理系学生としては非常に興味をそそられる展示の数々に大いなる刺激を受けることができた。経済学に興味のある同じ班員は TSMC の創業者が政府に提出したビジネスプランを熱心に読んでいた。各々が各々の興味のある分野について知見を深めることのできた班行動は大変有意義な時間であった。

J4-220668

理科一類 1 年

釜土真周

2023/03/04

Cofacts Workshop

A never-ending battle against ignorance

台湾に着いた初日、我々は Billion 氏が開催した Cofacts というサービスについてのワークショップを訪れた。Cofacts というのは主として質疑応答に応じてメディアニュースの正誤を AI が利用者に教えてくれるサービスである。台湾で公式 LINE などが発信するフェイクニュースが非常に重要な問題であると Billion 氏は感じ、自らのメディアリテラシーに自信のない人々のために当サービスを開設したと述べていた。

現在の AI のファクトチェックの精度はまだ不十分で、編集者が AI の発言を監査している段階だとのことだ。ゆくゆくは AI に完全に情報の正誤判断を委託する目論みだろうが、それとはまた別にサービスの利用者が意見を交換する SNS のようなプラットフォームも存在する。自分は「利用者」と「AI」と「監査者」の3つの勢力には明白な信頼度の上下関係がないとこのサービスは成り立たないだろうと考えた。メディアリテラシーに自信がなくてこのサービスを利用した人々にどの発言がもっともらしいかを識別するように指示するのは本末転倒な気がしたからだ。Billion 氏の考えでは、情報の真偽に関して仮に一つの絶対的正義が誕生した場合、それこそが人々が与えられた情報を盲目的に信じる従来と変わらない体制が生まれてしまうので、あえて絶対的正義を作るべきではないとのことだ。つまり、Cofacts は AI が利用者に答えを与えるサービスを提供しているが、真の目的はその利用者のメディアリテラシーの育成なのである。フェイクニュースがこの世からなくなることはないかもしれないが、それに騙される人が一人でも少なくなることを期待したい。

台湾のハイテク産業

阿部慧人

私はこの台湾研修にハイテク産業をテーマとして参加した。台湾では一人当たり GDP が日本を超えるほどの目覚ましい経済成長がありその背景には半導体産業があること、また台湾の大手半導体企業 TSMC が日本にも工場を持っていることなどをきっかけに台湾のハイテク産業の実態（つまり本当に世界基準で見ても発展している方なのか）またその背景（どうして発展できているのか）という二つの大まかな疑問を元に各所で取材や見学をした。

以下が自由行動日に主な行程である。

2月20日

2月22日

午前	なし	TSMC ミュージアム見学 新竹科学園區散策
午後	社会実験中心取材 台北 101	Gyro Systems 取材

社会実験中心では政府のイノベーションを促進する取り組みについて、TSMC では台湾最大の半導体企業、Gyro Systems では台湾の中小ロボット企業を訪問することで台湾のハイテク産業を違った視点から捉えようとした。

まず政府の機関である社会実験中心だが、設立当時は現デジタル担当大臣であるオードリータンさんが所長であり、彼女のオフィスもあった。施設の概要としては、幾つもの会議室やデスクがあり、各々が自由に作業をし、会議を開けるようになっていた。プロジェクターなどの設備も整っており、サイトに登録し、利用用途を文書にまとめるだけでこれらを無料で利用できるのは需要が十分見込めると思った。他にもデザイン性に富んだ撮影ブースなどもあり、近年の動画サイトを用いたプロモーションも思う存分できるようだった。特にまだ自社の設備が充実していなく、個人で活動している人が多く訪れているらしい。社会実験中心の歴史について軽く触れると、元々は日本統治下時代の空軍基地だった。建物が二つの棟からなるのもそれによる。戦後も米軍の協力を得ながら。軍隊の物資

を扱うところだった。しかし、その基地が移転したことを契機にもともと物資を扱っていたことを生かして、台湾に新しい技術などを showcase として展示し、先進的な活動をすすめるものらの交流を促す場として展開された。

訪問中に実際にスタートアップ企業が会議をしているところに居合わせたため、TAcc+ という会社の CEO の話も聞くことができた。TAcc+ は新規事業を行う会社の成長を accelerate (加速させる) 会社である。台湾の起業の強みとして失敗を恐れないことを挙げていた。それに対して組織だったことをするのが苦手であるため、日本の方がその点は優れているとおっしゃっていた。

次に台湾の半導体シェアが一位である TSMC を訪問した。TSMC は 1987 年に Dr.Morris Chang によって設立された。半導体専攻のファウンドリ会社、つまり設計は他者に委託して、製造に専念する会社である。現在は従業員を六万人以上で、売上高も 568 億米ドルにまで登り、台湾の GDP の 5.7% を担う。今は、台湾のみならず、米国、中国、日本にまで工場を展開している。ミュージアムに展示やガイドさんにした質問によると、ここまで成長できたのは、製造に専念したことにあるとされていた。製造に専念することで、技術が大幅に飛躍し、現に 3nm のチップという他の国では見られないレベルのサイズのウェーハの製造が可能になっている。サイズを小さくすることで半導体の集積度が上がり、サイズ毎の処理能力が向上するという構図になっている。また、科学園区内の展示によると、園区内には税関が設置されており、輸出が容易になるよう国からサポートされているということだった。さらに台湾は科学産業において、基礎研究よりも経済を優先するような政策がとられているとも言われていた。

最後に中小企業ともいえる Gyro Systems を訪問した。従業員は 100 人ほどでまだ発展中というお話だった。2014 年に現 CEO が三人で設立して、創業当初は IoT など様々な分野を扱っていたが、2017 年に AMR (Autonomous Mobile Robots) の第一号を作ったことを契機に AMR の製造を主だった事業としている。AMR とはものの製造工場において各過程の間を運搬するロボットであり、廊下を移動するボディとものを掴むアームからなる。当会社は、TSMC、UMC など半導体会社の工場で使われるような AMR を製造している。というのも半導体はチップ一つにつき 30 万米ドルという価値で、人が運びミスをして壊すようなリスクを取りたくないと考えている会社が多いということだった。さらに、そのような需要からビジネスパートナーとして利益が見込めることも理由に挙げていた。様々なユニークな技術が駆使されていてそれも興味深かった。現在の技術ではアームの部分を取り替えることで様々なものを掴むことができているという。今後はつかめるものを増やしたいということだったが、今の科学技術では人の手のように柔軟に様々なものを掴むことは困難だということだった。また、食べ物工場のように完全に工場を定型化したベルトコンベアのようにしないこと理由は半導体産業にユニークなものだった。先端技術の商品は、年々進化し、製造工程が変わるため、工場を固定化してしまうと全て立て替えなければいけなくなる。そこで AMR などように、各プロセスをバネのようにつなげるもの

はそのような分野では重宝されるということだった。今後は、ある程度技術が出来上がり、利益が見込むことができれば、半導体産業にとどまらず、他産業の進出もし視野に入れている。個人的に災害現場などで使うロボットにこのような精細な技術を持った会社が参入してくれると、災害の多い日本、台湾には大いに役立つだろうと思った。

1班(ハイテク班) エッセイ

台湾の経済に興味があった。漠然と台湾の経済は最近伸びているらしいと聞いていたが、実際に調べてみると1人当たりGDPが日本を超えたという記事を見て驚いた。資源的には恵まれておらず、中国との政治的な問題も抱えている台湾がなぜそこまで発展したのか知りたいと思った。特に予習せず1日目の訪問先に行った。Social innovation labでハイテクを使ったスタートアップの支援をしている企業とお話をさせてもらった。特に予習をしていなかったため、相手が何をしている団体なのかあまりよく分かっておらず、英語で説明されたがそれを理解しきることが出来ず、取り残されてしまった。同じ班の英語のできる友達はどんどん質問をしていた。僕はその場でよくわからないなあと思うだけだった。悔しかった。2日目のグループワークの際は、訪問先がどんな企業なのか予習し、質問事項も考えてから向かった。1つ目の訪問先のTSMCはテクノロジーを駆使した(手で押して動かせるスクリーンや半導体の向上による違いが一目でわかる展示など)展示を行っていて、スマートで非常に分かりやすかった。世界のトップ企業であることがうなずけるような展示でとても面白かった。時間の都合で質問は出来なかったが、予習をしていったおかげで、ガイドの説明もきちんと理解することが出来た。2つ目の主な訪問先はGyro systemsという、半導体工場で使われるロボットを作っている企業だった。TSMCとは異なり、中小企業であり、工場もかなり田舎にあったため、行く前はたいしたことないだろうと思っていた。しかし、行ってみると清潔な工場を多くのロボットが動いていて非常に面白かった。プレゼンもとても分かりやすく、お菓子までいただいて丁寧に説明してくださった。あらかじめ質問を用意してきたおかげで、聞きたいことも聞けた。台湾政府は企業を支援すると言っているが、実際は中小企業には支援してくれない、中国の政府は中小でも支援してくれる、台湾と中国の経済的なつながりは実はとても強い、などと答えていただいたのが興味深かった。別の訪問先では政府が積極的に企業を支援していてそれが発展につながっていると聞いていたが、政府に対してあまり良く思っていない台湾の人もいるのだと思った。また、中国が台湾に侵攻する可能性もあると報じられているぐらいなのだから、台湾の人にとって中国は敵なのだろうと考えていたが、人によってはそうではないのだと気づいた。Gyroの方の話からは、中国を重要な経済パートナーと考えているように感じた。

台湾研修 活動報告

J1-220107 有馬万奈

台湾研修の8日間のうち、2月20日の午後と22日の全日はグループワークに充てられた。私が所属していた班は、「台湾鉱業に日本統治時代がもたらした光と影」をテーマにグループワークを行った。20日は台北市内に残る日本統治時代の名残を重点的に巡り、22日は金瓜石に移動し、日本統治時代に鉱山都市として栄えた金瓜石・九份の歴史を確認した。以下、班で訪れた場所をピックアップしながらグループワークを振り返る。

20日に訪れたのは、松山文創園區と華山1914文創園區である。松山文創園區は1937年に設立された「台湾總督府專賣局松山タバコ工場」がその前身であり、日本統治時代の経済発展に大きく寄与したものの、需要減少などにより1998年に停止した。しかし、近年の文創の流れに乗って2011年にリニューアルオープンを果たし、現在アクセサリなどのセレクトショップとして活用されている。一見するとレトロでおしゃれな店内だが、壁に残るたくさんのかすり傷や柱にかけられた「松山煙草工場」の看板がかつて工場として産業の一角を担っていた松山の歴史を物語っていた。華山1914文創園區は1914年に清酒工場として創建され、専売制の施行に伴い官営化されたが、台北酒廠の移転により工場としての利用が停止された。文創を経た現在は、多方面にわたるアートの発表の場として活用されている。松山に比べるとイベント色が強く、多くの客で賑わっていた。一世紀も前に建てられた建築物ともなると、建て替えられてしまっていたり、立て替えられこそしないものの一般客が立ち入れない状態のものも多いが、松山文創園區と華山1914文創園區は日本建築時代に建てられたまさにその建物を極めて容易に利用できる点が印象的だった。



22日は主に金瓜石の黄金博物園區を歩いた。金瓜石はかつて「アジア一の鉱山」とも呼ばれた金鉱であり、日本統治時代に繁栄を極めたものの、戦争の中で操業を停止した。最盛期には1万人近くもの従業員を抱え、金瓜石の小さな町も隣の九份と同じように人口密度の高い賑やかな街となったのであった。黄金博物園區では、日本統治時代の鉱業を支えた金瓜石の歴史が総合的に展示されていた。展示は複数の建物に渡る、大変充実したものだった。また、坑道（五番坑）に入り、実際に使われていたトロッコや作業の様子 of 展示を見ることができたこ

とも印象的である。黄金博物園區にはいわゆる観光客のような人々の他に、小さい子供連れの家族や修学旅行生も多く見受けられた。台湾の人々にとっては比較的身近な場所なのかもしれない。

同日に訪れた場所でもう一つ特筆すべきなのが、国際終戦和平記念園区である。鉦山から資源を取り出すためには、採掘・銑鋼・精錬など様々な手順が必要であるが、この過程で必要な労働力は第二次世界大戦における戦争捕虜によって補われていた。台湾にあった16の捕虜収容所のうち16番目に設けられたのが金瓜石捕虜収容所で、まさにその跡地が国際終戦和平記念園区となっている。ここでは、鉦山での労働に従事させられていた戦争捕虜の境遇が取り上げられていた。彼らは、少ない食事により栄養不足の状態で鉦山の中の最も暑くて危険な場所での作業を強いられており、多くの捕虜が飢餓・病気・体罰・過重労働で亡くなったそうである。街を支えた金瓜石の鉦業だが、少し視点を変えると日本統治時代の負の側面が明らかとなる。



台湾はしばしば「親日」と形容される。現地の方で日本語を操る方も多く、またそれゆえ台湾には日本人観光客が絶えない。しかし、台湾を訪れる日本人の中で日本統治時代の正と負の側面の両方を認知できている人はどれほどいるのだろうか。台湾の歴史が日本の影響と不可分であるからこそ、日本人がそれを意識せずに台湾を訪れることがあってはならない。

とはいえ、物事の影響を把握すること、ひいてはその影響そのものの存在を認知することは決して容易なことではない。今回私たちの班は鉦業にテーマを絞って事前学習を進めたが、他のテーマ・他の視点から台湾の歴史を見た時、きっと全く違うものが見えるのだろうと思う。また、そもそも私たちの想像の及ばないような考察も数多存在していることだろう。今回の台湾研修ではこのことを強く実感した。全てを知ることは不可能であるが、いかに正確な認識を導けるかは少なくとも持てる知識の量に依存するはずである。今後も自分の認知の限界を意識しつつ、貪欲に知識を求めて学びを深めていきたいと思う。

日本統治時代の産業(鉱業)

渡邊滉太

2月20日午後は台北で活動を行った。



最初に艋舺龍山寺を訪れた。龍山寺は福建の泉州から台湾に移民した人々が1740年に建立した、非常に歴史がある寺院である。少し余談になるが、寺院名名の「艋舺」という言葉からも、当地域の歴史的な変遷を窺い知ることができる。「艋舺」は台湾総督府による行政改編のなかで表記が改変されたため、現在の行政区画としては「萬華」とされているという経緯がある。右上の写真はMRT駅の案内板であるが、艋舺と萬華が共存していることが読み取れる。実際に訪れて特に印象的だったのは、観光客だけでなく、今も多くの地元の人々がお供え物を持ち寄るなど、人々の集う場所や祈りの場となっているということだ。私が事前学習で見出した日本統治時代という側面よりも、むしろ過去から現在までの「人々のつながり」に重点をあてて龍山寺を捉えるべきだと感じた。

次に、華山1914文創園區／松山文創園區を訪れた。それぞれ日本統治時代の酒工場／タバコ工場の跡地であるが、現在ではリノベーションが施され、文化創造・発信の場となっている。しかし、一括りに「文創園區」といっても、実際に訪れると両者の印象は大きく異なるものだった。華山1914文創園區ではアニメ・漫画の発信などポップカルチャーの側面がかなり強いように思われた。一方、松山文創園區は自然が非常に多く、かなり高級感のある場所であるという印象を受けた。どちらの文創園區も過去の倉庫跡を有効活用しており、例えば松山文創園區の土産店内の柱に日本統治時代の煙草工場の看板が残っているなど、非常に興味深かった。

2月22日は金瓜石／九份で活動を行った。金瓜石・九份ともに日本統治時代に鉱山開発が行われ、鉱山都市として繁栄したという歴史を持っている。今回のグループワークでは両者について詳細な現地調査を行う時間がないため、金瓜石を中心に調べることにした。

まず、金瓜石 黄金博物園区を訪れた。以下、黄金博物園区のスポット・体験を簡潔にまとめたい。

○黄金博物館

1階では金瓜石の歴史について、2階では広く鉱山・鉱物について学べるようになっている。2階の最後の部分には、世界2位の大きさの巨大金塊も展示されている。展示については、金瓜石の歴史を多角的かつ客観的な視点から理解できるように工夫されていると感じた。

○金瓜石神社跡

日本統治期の金瓜石神社の跡。険しい石段をひたすらに登っていくと、10～15分程度で拝殿・本殿があった場所にたどり着く。かなり体力が削られるが、拝殿・本殿があった場所から見える景色は、本当に圧巻だった。解説の掲示なども整備されており、歴史的経緯の学習にも適している。

○砂金取り体験

比重選鉱という方法を用いた砂金取り体験ができる。皿に水を入れ指でかき混ぜる等、方法自体は非常に単純に見えるが、実際はかなり難しかった。

○礦工便當



作業員が食べたとされる弁当を、食堂で食べることができる。しかし、黄金博物館の展示によると、捕虜の食事では肉は殆ど提供されなかったそうであり、(当然捕虜と一般の作業員の待遇は異なるであろうが)実際の作業員の弁当がこれほど豪華だったかは疑問が残るだろう。

○金瓜石事件記念碑

日中戦争期に日本軍が引き起こした冤罪事件の被害を記憶する石碑である。碑文の「日閥」という言葉に着目する必要があるという。これは日本に対して批判的な呼称であるため、この碑文を建てた人々の意識を窺い知ることができる。

○第五坑道

実際の坑道が保存・再現されている。狭いうえにかなり暗く、当時の人々の労働環境を実際にイメージすることができた。

黄金博物園區の次に、国際終戦和平記念園區を訪れた。ここには、1942年から1945年までイギリスなど連合国の兵士の捕虜収容所があった。現在は、複数のモニュメントや、収容されていた人々の名前が連ねられた壁などが置かれている。また、設置された説明板の末尾には「永誌不忘」と記載されており、この園區が担わされた役割を明瞭に示しているように思われる。

ここで、金瓜石の鉱業について所感をまとめたい。当然、日本統治時代に地域が発展したという側面もある。一方で日本統治が生んだ負の側面も色濃く残る場所であった。金瓜石が一括りでは語りきれない複雑性を有する地域であることを、肌で感じることができた。

帰り道の途中で九份を訪れた。この日の九份は、ゲリラ豪雨並みの大雨であった。これほどの悪天候であったが、観光客が非常に多かった。「九份」といえば、阿妹茶樓の景色を想像する日本人が多いであろう。私たちも阿妹茶樓を見に行っただが、隣接するデッキにおいて以下の写真のようなモニュメントを発見した。



今回のグループワークを通して、台湾の歴史の複雑性を再認識した。現在は観光地として日本人から熱烈な視線を集めている九份も、他方日本統治時代の金鉱という歴史的な側面をも包含している。上のモニュメントが示唆することを理解する観光客は多くないかもしれない。しかし、そうであるからこそ、研修として台湾を訪れた私たちは、その歴史的な重層性に

目を向けていく必要があるだろう。このような多角的な視点を意識する機会を得たという点において、このグループワークは大きな意義があったと感じている。

今回の台湾研修で、私たちの班は「日本統治時代の鉱業」というテーマでグループワークを行った。しかし、私はもともと鉱業に対してそれほど興味を持っていたわけではなかった。ではなぜそのようなテーマを選んだのか。それはズバリ「九份に行きたかった」という理由からである。

九份といえば、日本で、いや世界でもよく知られた人気観光地である。レトロな街並みとそれを照らす提灯の灯りが織りなす美しい風景に心を惹かれてここを訪れたいと思う人々は数多い。グループワークに取り組む前の私も、その中の 1 人だった。そこで、「どうしたら九份に学習的な意義を見出せるか」ということを考え、九份の歴史について調べてみた。すると、九份は日本統治時代に鉱山町として栄えた場所で、現在の九份の街並みもその時の名残であるということを知った。そこで、「日本統治時代の鉱業」というトピックを主眼に据えることを決めたのである。

実際に九份に行ってみると、日本統治時代が九份にもたらした正負の側面が見えてきた。ここでは、行った場所の中から数ヶ所をピックアップしたいと思う。まず、九份から車で 10 分ほどの金瓜石という地域にある黄金博物館を訪れた。そこでは、金瓜石鉱山の歴史や鉱山労働者の生活などが紹介されており、特に現地住民や連合国の捕虜が劣悪な環境での労働を強いられていたことを学んだ。



その後、黄金博物館の近くにある金瓜石事件碑（左下図）と国際終戦和平記念園区を訪れた。金瓜石事件とは、日中戦争中に金瓜石鉱山の関係者など 100 人以上の住民が中国側との密通や武器の密造の疑いで捕えられ、うち 33 名が判決を受けずに獄中で亡くなった事件である。また、国際終戦和平記念園区はもともと日本軍の捕虜収容所があった場所で、連合国軍兵士の捕虜が収容されていたが、鉱山での厳しい労働環境の中で亡くなった捕虜も多かったそうで、現在は劣悪な扱いを受けた捕虜たちをしのぶために作られた各捕虜の名前が記された壁がある（右下図）。

以上のように、九份一帯は日本統治時代に鉱山町として繁栄した一方で、その背後には現地住民や捕虜の抑圧という暗い過去も存在した。この日の最後に私たちが訪れた華やかな九份老街（九份のメインストリート、下図）は、日本統治時代の九份の繁栄、すなわち「光」の部分象徴しているが、今もひっそりと、しかし確かに残されている「影」の部分の存在を見落と



してはいけないだろう。

観光地としての九份を訪れる人の中に、その過去について理解している人はどれだけいるだろうか。観光地を見る際に、その場所の景観などの、今見える、かつ肯定的な側面だけに囚わ



れてはいないだろうか。九份に限らず、歴史的な観光地には、そこが持つ歴史的側面は度外視され、ただただ視覚的な美しさによってもてはやされているという場所が多い。そのため、その場所の歴史的背景を知ることなく歴史的な観光地を訪れているというケースは多いし、自分も特に海外旅行に行ったときにはそのようなことが多々あった。もともとは九份に行きたいがために選んだテーマであったが、今回のグループワークを経て、現在観光地として賑わいを見せている場所を様々な視点から捉え直していくことの重要性を知ることができたのではないかと思う。

台湾研修事後エッセイ

田島みのり

私は、「建築・文創・アート」をテーマにグループワークを行い、成果発表に参加した。建築についての知識は豊富ではないが、未熟ながらに観察・考察し学んだことを以下に述べたい。

「建築・文創・アート」を学習テーマに選ぶと思った理由は、事前学習において文創の説明を受けた際、理解できなかつたからである。文創とは台湾文化の要素を現代風でファッションナブルなものとして活用したり商業化したりする試みである。文創においては日本による植民地支配を受け、当時建設された建物を利用して台湾文化を発展させていく試みがなされる。日本統治下に建設された建物がどのように現代の感性に適合するのかや、その利活用の実際を自身の目で確かめたいと思った。

台湾研修始の中では、グループワークとして行う活動以外にも、「建築・文創・アート」に触れる機会が多くあった。例えば、20日午前に研修参加者全員で訪れた総統府では、建築の面で学ぶことが多かった。東京駅に類似し、数多くの文創建築物で用いられる赤煉瓦と白壁の建築様式は辰野式建築という。総統府でも採用された辰野式建築はイギリスのクイーン・アン建築様式をルーツとしヨーロッパ的雰囲気纏う。ヨーロッパ風の建築様式を駆使し、角度付きレンガなど最新技術を取り入れることで、建築は国力の象徴となりうるということ学んだ。

20日午後のグループワークでは、近代建築と文創によるその利活用を学んだ。華山1914文化創意産業園區や四四南村を訪れた。華山1914文化創意産業園區は日本統治下の工場跡地をカルチャーセンターとして再利用したものである。アニメや漫画に関する展示が同時に複数開かれており、併設のカフェや雑貨店も利用できる。ここでは、文創はもっぱら文学青年つまり文青が主体となる試みではなく、老若男女に開かれた文化的営為だということ・多様な人々に開かれつつも価格帯などで対象を限定する可能性があることの2点を学んだ。四四南村では、近代建築の歴史的側面とその利用を学んだ。四四南村は日本統治下では陸軍倉庫だったものが、中華民国政府の流入に伴い移住してきた外省人労働者に住居として提供されたものである。外省人の集住地域は眷村と呼ばれる。四四南村は最古の眷村であり、1990年代には区画整備の流れの中で取り壊しが予定されたものの、知識人らの呼びかけで2003年からは信義区の文化センターとして保存・再利用されるようになった。眷村文化を学べる展示に加え若者向けの雑貨屋や飲食店を併設することで、観光スポットとしても有名で

ある。日本統治下・中華民国政府支配初期において支配者側の一部として利用され、現在では多様な世代に開かれた文化の中心地であるという四四南村の歴史の変遷は、非常に興味深い。負の歴史が現在において正の効果をもつことを実感した。

22日のグループワークでは、龍山寺・迪化街・新文化運動記念館・台湾師範大学・誠品書店を訪れた。龍山寺・迪化街周辺は危険な地域とされ、ホームレスや浮浪者の姿が見えた。過去に交易や海運で栄え、歴史的な建築物が多く残されている場所であると同時に、苦しんでいる人々を集める場でもあることを学んだ。歴史的な建築物や街並みを保全・展示することで正の面に焦点を当てるだけでなく、現在の経済的問題点などの負の側面も無視してはいけない。

新文化運動記念館では、日本統治下の社会運動がどのように抑圧されたかが展示されていた。元は北台北警察署であり、日本統治時代や中華民国政府支配当初は警察署として利用された。政治犯などが逮捕・勾留された場であり、監獄としての側面を生かしたダーク・ツーリズムスポットである。また、併設されたカフェは監獄をテーマにしている。歴史の負の側面を観光スポットとして生かす文創の営みを見ることができた。日本でも類似の営みは見られる。

誠品書店は文創の中心的担い手である文青について知るために訪れた。日本語書籍やその翻訳が多く見られた。特に、漫画コーナーにおいてその傾向は顕著であった。また、個人的には自己啓発本の類は自分の能力を向上させることよりも自分を受け入れることに焦点を当てるものが多いと感じた。日本と異なる傾向だと感じた。

最終発表の段階においても、文創とは何かを完全に把握し定義づけることは困難であったが、少なくとも知り得た1点がある。文創は台湾人全体を包括するものだという事だ。文創スポットの多くは入場無料である。文青によって牽引されているように見えるが、迪化街の商店に代表されるように、実際に文創を営んでいる人々は必ずしも感性の高い若者とは限らない。実際に現地を訪れることで、文創を体感でき新たな学びを得られた。学習において自分の目で確かめようとする事の大切さを実感した。

2022年度 台湾研修 エッセイ

村上 真人

正直にいうと、台湾研修に参加しようと思ったのは低い自己負担で海外旅行に行けるという不純極まりない動機からだった。しかし、事前講義で台湾の歴史や文化を学ぶにつれ、自分の中でこの重層的な歴史を持つ美しい島国への興味が次第に高まるのに気づいた。現地ですべてにさまざまな場所に訪れたことで、台湾についての「知識」は確かな「経験」に変容したと感じている。ここでは、研修中に特に深く考えさせられた二つの事柄について簡単に記したいと思う。

一つ目は、人権である。2/21に訪れた二・二八国家紀念館および景美人権文化園區の展示や見学内容を通じて、私は人権の脆さとそれ故の大切さを感じることができた。「人権とは人間が人間であるというだけで生まれながらにしてついでに侵害されてはならない権利である」といった類の言説にはこれまで多く触れてきていたが、二・二八国家紀念館や景美人権文化園區ではそのような言説とは裏腹に国家権力によって容易に人権が侵害されるという現実を突きつけられたような気がした。現代の日本で過ごす私は人権を当たり前のように享受しているが、隣の台湾ではつい数十年前まで政治的弾圧と人権侵害が行われていたとは俄には信じがたかった。景美では私たちと同じくらいの年齢の青年もが拘置されていたという説明を聞いたが、自分がその青年であったらと想像してみると、それまで漠然とした概念として捉えていた人権が一気に私の自由を保障するものとして現実感を帯びてきた。思うに、人権とは空気のようなものであって、それは目に見えず、あるうちはありがたみも何も感じはしないが、無くなって初めてその重要性に気づくものなのかもしれない。もしそうだとするならば、人権を失わずにその大切さに気づけたことは一つ大きな収穫だったのではないか。そして、目に見えず実体もないが人が存分に生きる上で欠かせないものだからこそ、一層人権という想像の産物、普遍的な価値を守っていかなければいけないと感じた。世界にはまだ人権侵害が行われている国や地域がある。将来は人権に関わる問題を扱うことも視野に入れたい。

二つ目は、日本統治時代である。もちろん植民地支配は一定の地域を服従させ搾取するという意味で悪ではあるが、日本による統治が台湾にとってプラスになった面もあるといえるだろう。現代の日本人が日本統治時代にどのように向き合うべきかというのは難しい問題である。私自身は「台湾は親日国家」という言説を無意識のうちに受容していたように思える。台湾で「我是日本人。」といえれば現地の人に喜んでもらえるだろうと無自覚のうちに信じ込んでいたことがその表れである。しかし総統府や国立台湾歴史博物館を訪れて、そのような一面的な理解は不十分だったと自覚できた。もちろん事前講義の段階でも日本統治時代について学んだが、やはり現地での体験が私の考

えを変えるのに一役買った。とはいえ、台湾の後に訪れた韓国の大韓民国歴史博物館の日本統治時代に関する展示は台湾のそれと比べて日本を批判する色が強く出ていたように思えたため、台湾は比較的親日であるという印象は拭いきれない。さて、現代の日本人が日本統治時代にどう向き合うべきかという問いに戻るが、私自身は日本人が日本統治時代の存在を知ることが全てだと思う。正直、過去の日本の行いについて誠心誠意謝罪することは私には難しいし、それに意味があるとも思えない。しかし、日本統治時代について知っておくことは、日本国民として果たすべき責任であると信じている。

以上、台湾で考えた二つの事柄について述べてきた。台湾ではこれらの他にも中国語学習のモチベーションを得たり文創についての理解を深められたりと非常に実りのあるものだった。ここに引率の先生方や TA の方々、現地で助けてくれた方々への感謝を記して終わりたいと思う。

台湾研修エッセイ ～文創～

J1-220112 佐藤瑠璃

今回参加した台湾研修ではかなりの部分において行程が学生の裁量に任せられており、学生達は各々のグループにおいて興味関心に基づき行程を立てることができた。私が所属していたグループでは「文創」をテーマに台北でフィールドワークを行った。このエッセイではグループワークを通して得た知見や実際に現地に赴かないと理解しえなかった点について述べていきたいと思う。

そもそも今回私達のグループテーマであった「文創」とはいったい何なのだろうか。文創とは文化創意産業の略称で、その定義をインターネットで調べてみると「台湾ならではの伝統や文化を取り入れた創作を奨励し、産業として発展させる試み」であった。私はこの説明を見てもいまいち文創とはどういうものなのかピンと来なかったが、現地を実際に訪れてみてやっと完全にとまでは言えないが理解できた気がした。台湾では様々な施設が実際に利用されていた頃の状態で展示されているほか、新しい文化の中心としてリノベーションされているものもある。こうした施設を実際訪れたことで、文創とは実際に利用されていた当時では一部のみにのみアクセスが可能であったような施設を、多くの人の目に触れうるような開かれた存在にし、それによって人々が当時のことを学ぶきっかけを作るといった試みのことを指すのではないかと考えるに至った。

台湾の歴史は非常に複雑で、時代によって統治者が異なる。オランダに始まり、鄭氏、清朝、日本、中華人民共和国と統治者が変遷したことはそれぞれの時代に建てられた建築物からも見て取ることができ、それは今回の研修で訪れた場所についても同様であった。

今回、グループワークで訪れた場所は以下のとおりである。

- ・華山 1914 文化創意産業園區
- ・四四南村
- ・台北 101
- ・龍山寺・萬華区
- ・旧三井物産株式会社北門倉庫
- ・迪化街
- ・台北北警察署
- ・台湾師範大学

このうち私が実際に訪れて最も「文創」を感じた、すなわち当時は閉じられた空間であったものの現在では多数の人々に開かれた空間であるということをも強く感じた場所は台北北警察署である。台湾新文化運動紀念館とも呼ばれるこの場所ではかつて新文化運動を行ったことで逮捕された多数の政治犯が拘留されていた。当時実際に使われていた牢屋や水牢等も見学することができ、私達のような海外から訪問した学生でも見学するこ

とが出来たことから、この場所が開かれた空間となったことを強く実感した。

ほかにも台湾師範大学の図書館にある資料室を訪問した際も同様に感じた。この資料室では台湾師範大学の前身である台北高等学校についての資料を扱っており、台北高等学校が当時「エリート中のエリート」であったことを強く感じさせられた。これも、学力面で非常に狭き門であり閉じられていた空間であったが、現在では少なくとも当時よりは開かれている、すなわち文創の一例であると感じた。

以上述べてきたように、この台湾研修で私達のグループは文創をテーマにフィールドワークを行った。この活動を通じて思ったことは、この考え方は日本にも輸入できるのではないかということである。日本においてもかつては一部の人にしか公開されていなかった施設が博物館や記念館となる例は多く見られる。したがって日本も、台湾のように政府や自治体がこの文化創意産業を推進することが大事になってくるのではないかという結論に至った。

記録（4班：ダイバーシティについて）

※黒字はお聞きしたこと、薄字は感想や思ったこと

2/20

同志ホットライン協会

鄭智偉さん (chiwei@hotline.org.tw)



・文科省的なところ（教育部）が制服男女どちらもスカート・ズボン選べるようにしている
⇔私立では性別で固定していることも多い

・島内でも東西南北/地域によって考え方が違う

- 今日のお話は台北視点のもの、この協会のオフィスは台北と高尾にある
- 台湾には6都(6つの大きな県)あるが、ここでは同志に友好的な傾向
- 原住民の多い地域では同志に関する理解は台北ほどは進んでいない
- …2017年に法律解釈の結果同性婚を許可せねばならない

→同性婚のやり方に関する投票(民法改正により男女の婚姻と同様に同性間での婚姻を認めようとするもの vs 新たに法を作って別個の制度として同性婚を許可…後者の勝ち=真の平等とはいえない、社会の多数の人々から同性婚と異性婚は別物だと思われているから)

・1998年、鄭智偉さんは大学生でホットライン協会の1期生として電話番に…当時はLGBTQへの風当たりが強くCOすると体罰を受けたり正常になれと言われてたりした→それを苦に自殺事件→彼らをサポートする組織が必要と考えた

⇔インターネットもGoogleもないので電話がベストな方法、ホットラインを立ち上げた

※他のソーシャルサービスでは、ゲイの男性が失恋したとの電話に「女性に恋したら？」と回答することも→この協会では電話をしてくる人が全員同性愛者だと念頭に置いている

・去年は1805件の電話があった→内容をカテゴライズしてカテゴリーごとにチーム結成：家庭チーム、教育チーム、エイズチーム、高齢者チームといったチームがあり、長期的なケアができるよう考えている

- 電話は当事者のみならず親御さんからも→中でも電話を受けてすぐ「あなたはゲイか？」と聞かれ「はい」と答えると「恥知らず、親が悲しんでいる」など怒鳴りつけられたことも→家庭チーム ☆協会の家庭チームが出した「パパ、ママ、私は同志です」という本を親の部屋に置いておいてCOする人も(結構売れている本らしい)

- 学校でいじめられたり先生から否定的なことを言われたりしたとの相談も→教育チーム

・台湾では同性婚よりも大事なのが「性別平等教育法」：学生も教師も皆がジェンダー平等に関する教育を受けなければならないと制定

・TGの議題も:日本統治時代からある身分証明書では性別が書かれているわけではないが性別+居住地を示す数字で構成された番号で男女が分かるようになっている→性転換手術を受けていないTGの人も性別表示を変えられるようにしろと国を訴えている事例も

☆TGと友好的な関係を築くためのガイドも発行されている

・最近の協会は同性婚をした人々も養子を受け入れられるようにする活動

…元々の法律では20歳以上であれば誰でも養子をとることができた⇔同性婚の法律ができた結果、同性婚をした人は養子をとれなくなった

ex:未婚時代に養子を取り同性婚しても結婚相手はその子と関係ない人ということになる

・最近の協会の活動では LGBTQ の中でもさらにマイノリティ(高齢者、身体障害者、HIV の方、原住民など)へのケアも意識

・韓国、日本、香港などの様々な LGBTQ 団体とも協力、しかし台湾の団体の特徴は LGBTQ に限らず女性の権利を訴えていたり身体障害者の権利を訴えていたりする他の NGO とも協力すること←NGO 1 団体の力は微力なので

・2003 年に始まった台湾プライドパレードは 800~1000 人(何人来るかかわからないので色々な NGO に声をかけて参加してもらったりもした)→25 万人:東アジア最大規模

☆参加するなら 1 日前に来た方が良い、前日にはトランスジェンダーのパレードもあるので

・非典型的な婚姻関係(ポリアモリー?)に関しても議論が始まっている

・相談内容は変化している。25 年前は「どうやったらわたしは LGBTQ であるとわかるのか、基準はあるのか」という質問が多かった。今では人間関係に関する質問「彼氏/彼女と喧嘩しちゃった」「友達の作り方」が多い。異性愛者の男性からは HIV に関しての心配について電話が来ることも(HIV についてググると同性愛関係の組織の HP が出てくることが多いから)。昔も今も親御さんから「子供が同性愛者だったらどうしよう」逆に子供から「どうやって親に CO しよう」みたいな電話は多い。ネットが発達した時代でも電話をかける人はいて、彼らはサポートしてくれるリソースが本当にないのでホットラインに辿り着き電話をかけてくる。昔は 1 回の電話で解決することも多かったが、今は 1 人につき 10 回も電話してやっと解決することも。10 年以上かけてきてる人も。対面のサービスは一切なし:人手不足+ボランティアを指導して電話に出てもらう形なので彼らはプロではないから

・同性婚成立後 3 年で同性婚したカップルの数は 1 万組=2 万人とはいえ台湾全体で人口は 2300 万人、そのうち 7%が同性愛者なら 161 万人も同性愛者はいるはずなのに…… CO の壁が原因?結婚すると戸籍に登録されるから同姓と結婚したと親にもバレる、身分証明書には配偶者欄があるので名前から同性婚したとわかってしまう→職探しの際などマイナスになることも

・性別平等教育法があるにもかかわらず LGBTQ が原因でいじめられたという相談はあとをたたない→去年だけで 279 回台湾各地の学校に行き講演会などの活動を行った

・BL 好きな女子学生が LGBTQ への深い理解を示すようになった←日本でもありそう

・当事者に一度も会ったことのない人は1人でも当事者と会えばかなり偏見が減ることが研究で判明→智偉さんはいつも講演のとき CO

・親御さん(40~50代以上)にとって同性愛者は処罰の対象だしジェンダー教育も受けていないし儒教の考え方もあるので理解を求めるのは難しいところがある

・LGBTQの子供を持つ親御さんへのワークショップでシングルマザーの方が「私が離婚したから子供はゲイなのかしら」と言ったところ隣の夫婦が「うちは離婚してないけど子供はゲイです」と言いシングルマザーの方がちょっと笑ったというのが印象的

・2017年から原住民のLGBTQの方に対するプロジェクト開始、内容はプライドパレード時にお招きしてメインステージに上がってもらい生活状況や困難な点を話してもらうなど。台湾には有名な原住民の歌手が何人もいるので彼/彼女らが強くサポートしてくれたりする

・スタッフの人数は12人フルタイム(10人が台北で8チームあり、2人が高尾で2チーム)、ボランティアは計500人→LGBTQの方も障害者の方もいて年齢も15~60歳と様々、同志の人々の親御さんもボランティアになり同じような立場の人の質問を受けたりもしている

・夜中にはもっと賑やかになる:多くのボランティアは仕事や学校が終わったあと来る、金曜日の夜は特に賑やかで夜の11時、12時になっても人がたくさんいたりする

…ボランティアの人々の中にも友達や家族にはCOしてないから周囲の目を気にせず好きなことを言える場が欲しい人がいる

・今までで一番嬉しかったのは、15~16歳の頃アクティビティに参加していた子達が成長してボランティアに参加するようになったこと

・1年ほどかけて学校におけるLGBTQに関する調査→性別平等教育法があるにもかかわらずまだ問題は残っている(先生が授業中にステレオタイプなことを言って揶揄うなど)→文科省(教育部)に訴えて法律のより厳格な施行を求めた

・台湾にはAセクもいるしそういう団体もある、民主主義と自由と性別平等教育法があるので若い世代はどんどんオープンになっている、ジェンダーアイデンティティも多元化、パンセクシャルとかQIAと自分をアイデンティファイする人もいる。最近行ったアンケートでも自分をノンバイナリーと定義する人も増えている。学校で講演するときも先生方は語義を質問することも多いが、若い子達は単語を聞いて意味がわかる人が多い。

・LGBTQ を差別する政治家は台湾にもたくさんいる。国民党と民進党の2大政党が存在するが2011年ごろまでは同性婚などの議題がすくなかった。同性愛を否定しているキリスト教会と繋がりがあある国民党は同性愛に否定的だったりする。民進党の方が差別する人は比較的少ない傾向。政治の話はLGBTQ コミュニティに大きく影響。「藍(国民党のテーマカラー)甲(ゲイ)」というワードも(ゲイなのに国民党を支持している人)。中国ではLGBTQ に関する制度がほぼない→台湾独立を支持

・2016年までは中国のLGBTQ のNGO とも交流があったが、習近平の態度硬化により交流が困難になった

・台湾の性転換について:結婚してはいけないという制限はあまり障害でない(同性婚にスライドすれば良いので)、手術の際に家族の同意が必要であったり2年以上2人以上の精神科医から診断が降りていたりしなければならないという制限はある。

・TG に関する反発は女性からのものが多い。



- ・ オフィスは小さくスタッフも少ない(6人)
- ・ 2021年は離島含む台湾各地で講演 319回
- …講演テーマは多岐に渡り、基礎的なジェンダー意識を養うものやジェンダー関係の事件を防ぐもの、性別平等教育法の普及を図るものなど
- ・ 講演の対象も色々で、初期は教員へのレクチャーが多かったが、最近は公務員に対してやるコミュニティ内での講演、企業からの依頼も増えている
- ・ 講演の実施のみならず教材の発行も行う。初期の出版物は書籍の形をとるものが多かったが、最近は様々なメディアで発行
- ・ より柔軟な性教育の場を作りたい
- ・ 日本の学校の先生は性の話を避け気味、小学校では男女分かれて性教育をうけたり性的な話をしている児童に先生が「そういう話はまだ早いからやめなさい」と言ったり
- …台湾と近い。先生ごとに意識に違いがあるので、熱心な先生は詳しく教えたりもするがそう

でない先生はあまり深く扱わない。保守的な親御さんも多く、調査によれば、性教育を重要と考えているにもかかわらず自分が教えるのは難しいと感じる方も多いよう。

・台湾で数年前に放送されていたドラマ、親が娘に性教育をしようとする曖昧な説明になってしまいよくわからないことになってしまっている、というストーリー。スウェーデンの教材を参考に、ポジティブで説教くさくないやり方で、若者たちに自分の体についてや他人との関係について伝える教材を作ろうと思った。R18的なコンテンツではなかったものの、動画を出した後保守団体から強烈な反発を受け、「この動画は獣姦を促している」などの悪口も

・ボードゲームで性教育を促す試みも。

- 多様な家庭のあり方や多様な人、生き方の存在を子供たちに示唆するストーリーテリングゲーム。ルールは簡単。家のカードに人物のカードを入れていき、プレイヤーはその家のあり方を想像してストーリーを創造する。

→完成してから鉄道沿線の学校に配りに行ってフィードバックをもらい、それに従ってゲームを拡張。おかげでより多様な人物が追加された(全身火傷を負ったので圧力服を着ている子供や先天的な遺伝子異常を患っている子供など)。対象年齢0歳~99歳を謳っており、高齢者のコミュニティに持ち込んだこともあった。

☆マジカルスクールというゲームでは学校内でのいじめを取り扱っている。

・ジェンダー教育の教材はマニュアル化されているので先生たちはそれに従えば全12回の授業を完成させることができる。毎授業で使えるイントロ用のショートビデオも用意

…ジェンダー教育の中には感情教育、性教育、人間関係に関する教育、セクハラなどに関する教育などがある。これらは教育することが義務として定められているが、適した教材が少ないため、この協会ですべて3~4年かけて完成させた。まず自分を理解し次に周囲との関係(告白編、お別れ編)を学ぶ。対象は小5~中3なので、なるべくストーリーを使って教えたいと考え、また結論がすでにあるようなものでないディスカッションができると良いと考えている。

ex:体が糸の人たちの住む星。結婚すると金色の糸で結ばれるが、彼らの中にはたまにそのせいで苦しい思いをしたりする人もいる。そこで、話し合っ糸をほどいたり鋏で切ったり自然と糸が抜け落ちたりすることもある。糸が切れてからの反応も人それぞれで、喜んでパーティーする人もいれば悲しみに暮れる人もいるし、糸を思い出にする人もいれば切れたことを受け入れられない人もいる。フィリップとビビアンは仲良しで糸で繋がれてから2ヶ月だったが、次第に異なる道を歩むようになって喧嘩も増え、話し合った結果別れを迎えようとした。フィリップ

プは別れたかったがビビアンはそれを拒んだ。ここで「彼らはそれぞれどう思っているでしょう」「なぜフィリップは別れたいのか」「なぜビビアンは別れたくないのか」などと子供達に問いかける。このようなオープンなディスカッションを通じてそれぞれの考えを示してもらう

・教育に重きを置いているので、SNS で時事問題を扱うにしてもそういった問題をどのように子供達に話すかという点から投稿している。

・企業とのコラボ:単純なドネーションからイベントの共同開催まで様々。

ex:ジェンダー平等サタデー

・30歳以下はこういった教育を受けている世代だが、そうでない世代は大人であってもこのような教育を受けるべき。最もこういった教育を必要としているのは上の世代であると考え人もいる。

・なぜ台湾の怪談に出てくる幽霊は女ばかりなのか、という問題意識に基づくディスカッションもある。それは結婚していない女性の魂は寂しい霊になるから幽霊になりやすいと考えられていた。(日本は男の幽霊・妖怪も沢山いる→儒教があまり根付いてないから?)

・近年は子供たちがネットを使うことが普遍的になったのでネットは彼らにとって重要なコミュニケーションツール→児童の性的搾取にも目を向け始めた。ボードゲームイベントなどを通じて教育を深めている。

・協会の整理や観察を担当する部門では政府関連の団体と提携。

・ローカルな民意代表という人(小規模な政治家みたいな)に意向を伝えたりもしている。国連には国際人権条約があるが台湾はそれに加盟していない、とはいえ条約を遵守する活動をしていると国連で訴えたりもしている。他の団体と共に地元の議員にジェンダー平等に関する提言を行ったり、他の団体の応援に行ったりもする。

・国際的には、韓国、フィリピン、タイ、日本、香港などの団体とも提携してシンポジウムを行ったりも。

・協会には20名の理事と170名の会員も属しているが、会員の多くは学校の先生。

・トイレ含め色々な空間が男女で区別されている理由は?

→トランス女性の子供がトイレでいじめられた末に亡くなった事件

ジェンダーフリートイレについて。台湾では学校のような場所や政府関連の機関を中心

に男女どちらも使えるトイレが増えている。安全性やプライバシーが守られなければならない空間なので、盗撮しにくい設計や壁の高さの規定なども考えられているが、一部の学校では押し付けられたからそうしているという感じで男子トイレをジェンダーフリートイレと書き換えただけのもので済ませたりもしている。犯罪行為とジェンダーフリーのトイレに因果関係はなく、多くはジェンダーフリートイレというより女子トイレで起きているので、別の対策を考えるべき。入り口が一つ、全トイレが個室になっており、明るく通気性がよく開けた空間となるような設計が理想と考えている。色使いは伝統的に性別の結びつけられやすい赤や青を避け、入り口にはジェンダーフリートイレが必要な理由も記述されている。このようなトイレは、介護する・される人たちで性別が違う場合や性別の違う親子でも使いやすくなるだろう。

☆トランスジェンダーの人たちは外でトイレを使いたくないからあまり水やスプを飲まないようにしているという話がある。

- ・性教育や女性差別撤廃などの運動が活発化し性別平等教育法が制定された⇨2017年頃から強烈な反発が。例えば「真実の愛連盟」という団体は指導要領に関する公聴会でプラカードを掲げ、今に至るまで多くのアンチ LGBTQ の団体が彼らの権利に対して反対している。2018年には同性婚や LGBTQ 教育に関する国民投票。

- ・ジェンダー平等教育が始まって 18 年経ったが未だに協会は圧力を受けている。

- ・ジェンダー平等教育反対団体：宗教的な背景のある団体が台湾の伝統的な考え方(男・女はこうあるべき!)と結びついて強固に反対しがち。最近では研究者がジェンダー平等教育に反対している人々の主張内容を分析、彼らの多くはアメリカの保守的な右派から影響を受けていると判明。

【1日を通しての感想】

台湾は、同性婚が合法化されていたりジェンダー平等教育が義務化されていたり公的機関にはオールジェンダートイレの設置を義務付けていたりとかなり進んでいるが、保守的な層ももちろんいて、NGO 団体への嫌がらせもある。同性婚も国民投票の結果異性婚とは違う制度を新設する形での実施に決まり、必ずしも同性愛者の権利が異性愛者同様に守られているわけではないという点に驚くとともに、自分の中で当事者の視点が抜けていたことに反省。とはいえ日本より進んでるのは事実だと思う。



・お話されている savungaz さん(今は 36 歳)は父が漢人、母が原住民

台北で育ち、16 歳のときには法的には原住民として認められていなかった。金銭的理由から原住民として認められ補助をもらうため母方の姓に変えた。父方の祖母は「息子が母方の姓に変えたら父方との関係がなくなるからダメだ」と怒ったので、彼女の弟は父方のまま。

大学生のとき 2012 年にアミ族にとって重要な土地だったビーチが法的には所有が認められず訴訟、他の部族の原住民の人々が連帯して戦う。彼女もビーチに 1 週間滞在。そこで服についた砂を払おうとしたらアミ族の 1 人に「なぜ？」と言われた。そこで衝撃

原住民として認定されるには母方(原住民)の姓を知らないといけない⇔漢人の文化は父系なので母方の姓を知るのが難しい

母はブヌン族の言葉を教えてくれなかった、部族について何も教えてくれなかった→すこし母に腹が立った→台東出身のアリー?さんと出会う 台東はブヌン族が元々住んでいた地域(本来は山奥に住んでいたが日本統治期に統治のため低地に移住させその先が台東であった。5~8 日

間歩いて移住した、新しく伝統的な暮らしを始めた。

山を歩くイベントでブヌン族の文化(木々の名前やその用途:薪や建築用 etc.、石を3つ並べて調理場を作るなど。)、民族の歴史を学んだ。

- ・法律は文化に沿っていない→改正したいが原住民の人々はそのための手段がない

- ・若い世代の原住民は50%以上が漢人などとのハーフだし都会に住んでいる人が多い

- ・経済的利益のためでなく自分のアイデンティティのため自分たちを原住民と認めてほしい

⇔歴史的なトラウマのせいで自分を原住民だと認めづらい…そういうところを払拭したい

…中国語を話すよう強制され、伝統的な言語を話すとき学校で札を下げられたり叱られたり同級生からいじめられたりする←日本の方言札と同じ、日本統治時代の負の遺産？

⇒政府はそうした文化の破壊に責任とりたくないからお金を出すことで解決しようとしている

- ・研究者によって書き留められた「○○族らしさ」「○○族の文化」は必ずしも現状通りではない。文化は生きているので変わりゆくもの。そうした「らしさ」を行政や周囲から押し付けられている状況を変えたい

- ・法律ではどの民族の言語(原住民のものも中国語も)も等しく扱わねばならないと定められているが、身分証には漢字で無理やり当て字にした名前が書かれる。本来の読みとは全く違う呼ばれ方をするのは嫌。人によっては名前のことを揶揄われることも(マヤさんが馬○と当て字されて馬と揶揄われるなど)

- ・彼女の話はあくまで一例で、他にもいろいろな生活史が

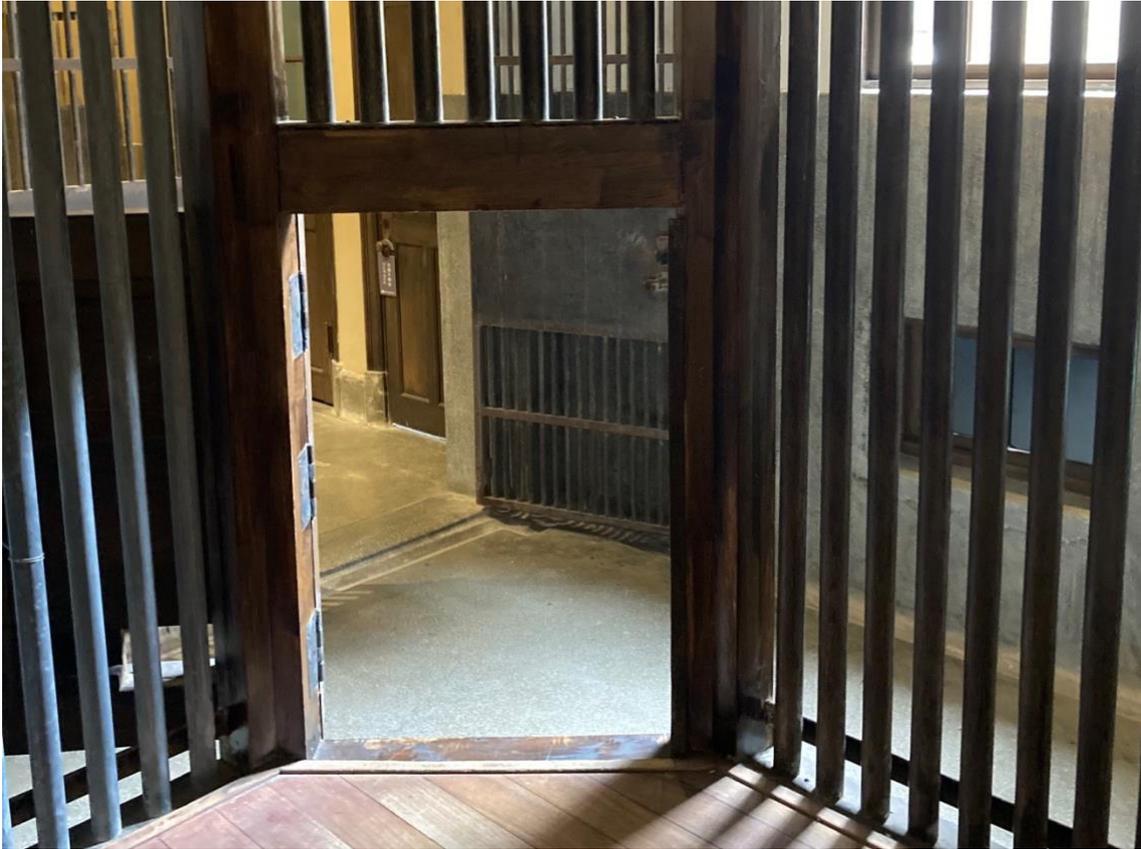
- ・民進党の方が国民党より原住民族をサポートする姿勢が強い(国民党は金さえ渡せばそれで良いみたいな)→90%以上の原住民の人々は反国民党

- ・政府は原住民族の中に山岳民族、平地民族といったカテゴリーを設けて権利に差をつけている←おかしい

- ・文化の違いが政府によって原住民族として認めるか否かの基準になっている。台湾政府が独自に調査をしたりはしていない、日本統治時代のカテゴリーをそのまま引き継いでいる

- ・原住民は大学の成績が上乘せされる←逆に差別

台湾新文化運動記念館



- ・元警察署、留置所には政治犯として捕まった人も入れられた、パノプティコンみたい
 - ・周囲は台北で最も初めに栄えた地域
 - ・台湾人のための台湾を実現するために演劇を用いて主張したりもした…文化運動
- その結果逮捕されたりも

☆清朝の時代:台北府城(中国風の都市は城壁で囲まれていた)

→日本統治時代:児玉源太郎の時代あたりに近代風の街並みを作ろうとして、城壁をリサイクル

ex. 台北北警察署の周囲を取り囲む壁

歸綏街

風俗街であり城楼があった場、日本・台湾人の紳士たちはそこで政治や文化について討論

日本統治時代末期には公娼が建てられていった

文萌楼



・独特の遊郭建築

- 窓が大きい:女性の顔を外から確認するため。違法の場合はむしろ窓を小さく作って明るみに出ないようにしていた

- 緑色の電気:戦後につけられたもの、公娼館の特徴の1つ

・1階入ってすぐの場で客を接待、壁には登録証を貼ってある、公娼館には細かい規則がある

・女の子も1人1つ許可証を与えられた:定期的(週1、毎週水曜日)に健康検査を受けなければならなかった、医者は許可証に営業許可の判子を押した

・サービスの価格も行政により決定、1単位が15分と定められ、1999年には1単位あたり1000元(40~50年前は50元だったが物価の変動に従い値上がりした、ブルーカラーの人々の1日の給料と同じくらいに設定されていた→一般労働者を主な客としていた)

・女の子が何人接待したかの記録をつけるための箱→それによって日給を渡した、女の子と店の給料の分け方は7:3(良心的?)、日本統治時代から受け継がれてきた最も簡単な計算方法

…貧しくて体を売る仕事しかできない女の子たちは学校にも通うことができず計算もできない子が多かったのも、このような形で計算した

- ・警察署の電話番号が壁に書いてありすぐ隣に電話が置いてある…公娼の時代には警察によって保護されていた

- ・今では性行為を商売するのが違法なので日本のソープみたいな形で営業しているが日本統治時代に端を発する公娼制度では合法として性産業

- ・許可証なしに違法労働をしている女の子がいないか警察がチェックするため、窓の上裏側の壁に許可証を貼っていた

- ・結婚していない(離婚した、夫が死去したことも含む)、健康である、犯罪歴がない、16歳以上であることが公娼として認められるための女の子の条件

- ・公娼制度をなくそうとする動きに対し当時公娼として働いていた100名以上の女性たちが抗議→マスコミが注目→顔がバレないように農夫スタイルで抗議に参加した

- ・営業部屋にはベッド、椅子、扇風機、ヒーターが基本的に置いてあった

- ・かつて性教育が公的に施されていなかった時代、公娼館がほぼ唯一の性教育の場。障害者の家族が彼を連れてきたこともあった(公娼館にあった性的欲求を満たす以外の意義)

- ・レズビアンやトランスジェンダーも客として受け入れていた

- ・男性が男性を接待する店は違法だったが存在した

- ・性行為だけでなく異性装(外の世界では周囲の目があるからできない)をしたい人のための場でもあった→社会で受け入れてもらえない人々を受け入れるという意味でとても重要な場

- ・建物の横は隣の建物と繋がっている→窓は前後にしかない→風通しをよくするため営業部屋の上部は開いていた→音や声が漏れて恥ずかしくないのか? 15分という短い時間に集中していたので周囲のことなんて気にならなかった

- ・許可証を取る基準は厳しく、違法の性産業も横行…違法の方が危険性はある、とはいえ許可証を取る面倒さを避け特に戦後(国民党政権下)は年々公娼館減少、違法が増加

・女の子たちはお金がないから公娼館で働いていた、少しでもあるなら他の仕事を選んだ、公娼館で働いているというのはやはり社会からの目もあり良いこととはみなされなかった、自分の仕事を恥ずかしく感じ他の人には言えなかった、友人と旅行や遊びに行くと自分の話をしないといけなくなり気まずいので遊びに行くのを避けた、台湾の女性は化粧をしない傾向⇨公娼館では化粧をせざるを得ない⇒家に帰るときは化粧をとった

・所有者はさっさと売ってしまおうとした(風俗街であったことが明るみに出ると高値で売れない)が、日々春協会という台湾の性産業従事者のための団体が保存のため働きかけ、つい最近残されることが決まった

☆「都更」の流れが広まり古い建物はどんどん壊されていっている

・大正時代、1925年に建てられた

2006年に台北市の指定歴史建築となり、壊してはいけないことに認定が困難な「古蹟」に登録

1. とても古い 2. 社会活動の中心となった

3. もともと公娼、性産業は古い歴史がある産業だが政府としてはなくそうとしてきた産業。たとえば陳水扁の時代には違法とされた。

・性産業従事者は地位が低いという見方がステレオタイプ、手で物を作ったり足で何かを運んだりするのと同様に女性が自分の体を使って何が悪い、他の労働の違いはないという立場
…顧客層の労働者は自分たちを慰めてくれる存在として公娼を尊重、持ちつ持たれつの関係
⇨今の世界を見ていると社会的に下層に位置する男性はインセルとして女性に憎しみを抱く人も、何がこの変化の理由？

・フェミニズムの高まりと共に公娼に対する見方が二分、女性を守るために公娼をなくすべきという立場／労働問題として捉え産業を公的に認めることで労働環境を守るべきという立場

阿嬤家



- ・「アマー」…閩南語でおばあちゃんを呼ぶ呼び方 + 家…安全で暖かい印象
- ・日本統治時代には民族問わず女性たちが慰安婦とされた、今では 60～70 歳の方々
- ・展示の特徴
当事者や関係者たちの声を聞くことが一番大切、全てのエリアの入り口に音声パイプ設置
常設展を順番通りに巡るとおばあちゃんたちの生きた歴史を概観できる
- ・養女やシンプアの娘、家が貧しくて教育を受けられなかった娘が職業を選べず慰安婦になることが多かった
⇔原住民の子供は警察による統治下におかれ、日本化を進めるために小学校を卒業する割合が高かった
- ・はじめから自分の意志で慰安婦となった人はいないよう
- 新聞上の慰安婦広告では「掃除婦」「看護婦」「食堂係」などと書いていたが応募した娘たちは気づけば慰安婦とされた

- 家に無理やり押しかけてレイプされ、その後は強制的に慰安婦とされた
- 小学校が慰安所とされることもあった

- ・日本の衆議院議員伊東秀子が「慰安土人（差別的な言い方）」と書かれた戦時中の日本の軍人による電報を発見 + 貧しい少女のパスポートが発見（本来持っているはずがない）
- + 新聞に「基隆に慰安所を設置」という記事 + 慰安所における慰安婦たちの名札
- + 軍人に配られたコンドーム

- ・葦は台湾の慰安婦の象徴、聖書において葦は強さの象徴なので慰安婦の強さを示している。
なお世界の慰安婦の象徴は蝶：命は短いが自由で美しい

- ・戦後の慰安婦は性暴力による体・心の傷のみならず周囲からの差別も経験。また性暴力が原因で子を産めなくなり、それもさらに差別の原因となった。

- ・小学3年生程度の子を対象にわかりやすく慰安婦についての絵本をつくった

- ・韓国・台湾ともに日本での民事裁判には敗れる…日本の国家は今や賠償の義務がないから
⇔2000年、女性国際戦犯法廷が開かれた
…法的な拘束はないが慰安婦たちが自分たちの経験を語り、そこでは彼女たちが勝訴。この模擬裁判は補償を求めるとともに今後戦争で性暴力が起こらないでほしいという願い

- ・元慰安婦の女性たちの心のケアのためソーシャルワーカーと協力し芸術治療など行った。そこで彼女たちが制作した芸術も展示されている。



街歩き:再開発問題「都更」

- ・緑地を潰さないでほしいという市民の声
→市民自ら緑地に生息する生物や酸素の産出量などを調べて当局に報告
- ・廟の前での朝市を禁止しないでほしいという市民の声
→市民自ら朝市の問題を洗い出して自分たちで解決策を探り出し当局に報告

- ・日本統治時代に作られた排水溝の跡地を埋め立てないでほしいという市民の声
→市民自ら跡地を清掃し植物を植え看板を作って観光スポット化

【1日を通しての感想】

文萌楼を残すための動きや公娼廃止への反対運動、都市開発に反対する運動のどれをとっても、市民一人一人が自ら積極的に行動している印象。日本ではそういった活動を起こす人が少数派で、周囲から白い目で見られることもある気がする。民主主義国家としては台湾の方が成熟している気がするが、では自分がそのような行動を取れと言われてもすぐには動き出せないと思う。周囲からどう見られるか、将来不都合なことにならないかなど色々考えて立ち止まってしまう。また、同じ女性として性暴力や性産業の話聞きながらとても恐ろしく感じ、痛みが伝わってくるような思いがした。慰安婦問題は戦争や性暴力に関する負の記憶としてもっと日本でも語られるべきことだと思っただけだが、政治と深く絡んでいることでタブー視されてしまっているようで、とても残念。どのような賠償をすべきか、賠償をすべきなのかどうかという以前に、二度とこういっただけことが起きないようにという意識を我々一人ひとりが養っていかねばならないだろう。

エッセイ：民主主義と日台

木佐貫祐香

台湾は人権先進国であり、IT 大国であり、見習うべき国である。台湾について詳しく学びそして実際この地に足を踏み入れるまで、私はずっとそう聞いてきたし、そうなのだと思っていた。そして、これまで台湾がどんな歴史を歩み今に至っているのかに想いを馳せたことはなかった。恥ずかしながら、台湾が世界一長いあいだ戒厳令を敷いていた国だということも、政治犯として多くの人々が犠牲になったことも知らなかったのである。特に台湾で新型コロナウイルスの封じ込めに成功したとのニュースが流れて以降、台湾を礼賛する風潮はますます強まっていき、私の中での先進的な台湾というイメージもどんどん濃くなっていったように思う。また、観光地や美食大国としての台湾像も強かった。日本中で台湾風と名付けられた食べ物が売っていたし、電車に乗れば至るところに台湾旅行の広告が貼ってあったことがその要因だろう。つくづくマーケティングの力を思い知らされる。もし今回台湾に来た理由が個人的な観光であったならば、きっと台湾への感情がこうしたイメージの範疇を出ることはなかったろう。

台湾の進んだダイバーシティ・ソサエティ構築について学ぼうと、LGBTQ 関連の団体やジェンダー平等教育を推進する団体、先住民当事者として生きる方を訪問したり、あるいは街中を歩いたりする中で、気づいたことがある。それは、台湾と日本を対立軸として描き出すことはできないということだ。台湾は、同性婚合法化やジェンダー平等教育の義務化といった点では日本より進んでいることに間違いのないものの、それらがマイノリティ当事者の主張を汲んでいるか、彼らの本来あるべき権利をカバーしきれているかという疑問が残る。先住民に対する補償については、日本でも似たような試みをおこなっているし、日台とも彼らの文化を否定してきた歴史を完全に超克できているとはいまだに言い難い状況である（無論、台湾の先住民政策の基礎は日本統治時代に築かれたものなので、日本は本来台湾の先住民に対しても責任の一翼を担っていることは指摘せねばならない）。今思えば、そもそも「台湾から学ぶ」というテーマ設定が無謀な試みであったと言えよう。民主主義の若い国である台湾だからこそできることがあるし、既に何層にも築かれた日本式民主主義の地層の上に台湾の制度をそのまま持ち込むことは困難なのだ。

とはいえ、今回の旅が無駄だったとは言わない。若い民主主義のリアルな様をこの目で見ることができたのは非常に良い経験だった。今の日本にいと、自由や権利は何もせずとも手元にあるように感じる。一方で台湾では、つい 20 年ほど前には未だ国家権力が市民を弾圧する

時代が横たわっていたのだ。自由が当然視されている社会は、当然素晴らしいものである。それだけ市民が平穏に暮らしている証拠だ。だがしかし、平和ボケした市民はさほど誉められたものではあるまい。自由とは本来、獲得し続けねばならないものであるはずだが、平和ボケした市民はそれを怠ってしまうからだ。時代に合わせて変わり続けることのできる健全な社会を築いていくために、そのような社会を目指す一市民として、民主主義の初期の在り方を忘れずにいたいと思う。

台湾研修事後エッセイ

文科一類 松浦知希

私は TLP のプログラムの一環として行われる 8 日間の台湾研修に参加しました。台湾は戦時中に日本に統治され、現在では親日の姿勢が強いなど日本と深く関わりのある国です。島国としてアジアの中心に位置する台湾は経済的・文化的発展が目覚ましく、日本が学ぶべきものは多々あります。それらを総合的に学ぶことを第一の目標としました。さらに、私独自の第二の目標として、台湾の中での少数者の権利の扱われ方を学ぶことを決めました。台湾は、アジアで初めて同性婚を法制化していたり、女性が社会に進出したり高等教育を受けたりする機会が日本よりも多かったり、さらには 16 の原住民が公的に保護されていたりと、ダイバーシティ・ソサエティとして日本よりも進んでいる国だと言えます。そんな台湾の中で、より良い社会の実現のために特に熱心に活躍されている方や、マイノリティ当事者として生活されている方々のお話を伺い、日本で何ができるか、考えました。主に 5 つの場所を訪問し、それぞれ台湾同志ホットライン協会、台湾ジェンダー平等教育協会、阿家-和平與女性人權館、原住民カフェ、文萌楼です。ここでは印象に深かった台湾同志ホットライン協会と原住民カフェについて振り返ります。

台湾同志ホットライン協会ではその創設者であり、本人もゲイである男性にお話を伺いました。当協会の活動としては、同性愛者やその周囲の人々からの電話を受け、相談に乗り精神的なケアを行うなどといったことが主になります。電話の対応では、指導を受けた LGBTQ の当事者や当事者の子供を持つ親御さんがボランティアで担うことになっています。この理由としては、必ず電話を掛けて来た人と近い目線から相談に乗りアドバイス出来るように、という配慮からこのような決まりが作られることになりました。現在の台湾を巡るジェンダーのお話も伺いました。台湾のジェンダーに関連した話題の中でも広く知られている台湾の同性婚制度についてですが、これは異性婚と同じ制度を利用するのではなく異性婚とは異なる制度を新設する法律で、国民投票の結果決まったものです。つまり、台湾の過半数の人々は同性婚と異性婚を別物と捉えているということを意味します。また、同性婚が法制化されてから 3 年が経つものの、約 200 万人弱はいると考えられる同性愛者のうち、同性婚にまで至っている同性カップルはわずか 1 万組=2 万人にとどまっています。これは、婚姻の結果戸籍や身分証などから同性愛者であることが周囲に知れ渡ってしまうことを恐れる人が多いという現状によるものです。こうしたことから、台湾の同性愛への理解はものすごく進んでいるというわけではないということが分かります。また、これに派生する課題として、養子縁組の制度があります。台湾ではもともと 20 歳以上であれば誰でも養子を受け入れることができていたのですが、同性婚合法化により同性婚をした人は養子縁組ができなくなりました。協会はこの現状を変えるための活動も行っていました。このように、台湾同志ホットライン協会で行った話から、台湾のジェンダー問題の現状が理解でき、アジアの中ではジェンダー平等が進んでいるとはいえ、依然として課題が多く残存していることがわかりました。

原住民カフェは、台湾の16の原住民族の一つであるブヌン族の女性によって経営されているカフェでした。ここではその女性に、台湾で原住民として生活するとはどういうことなのか伺いました。先住民の権利向上運動は、1980年代台湾のナショナリズム/民主運動の高まりと同時に始まりました。現在16の部族が台湾には存在する、と世間では理解されていますが、実は10以上の部族がいまだに政府により公認されておらず、そのために世間に認識されていないというのが現状でした。ただ、認識されていたとしても政府は金銭面での補助をするばかりで、彼らの権利を根本的に向上させる政策は行っていないそうです。政府の援助としては、学費の補助、家賃の補助、大学入試における成績の優遇処置など（教育格差をちぢめるため）であり、こうした優遇措置が差別の原因になることもあります。現在先住民族は台湾国民の1.9%と言われているますが、先住民が漢族などと結婚して漢族側の苗字を取ると先住民族の戸籍は失われてしまうので、混血の人なども含めればその数は増えるということでした。オーナーの女性は母親がブヌン族で、16歳までは戸籍上で漢族だったが、名前を変えることで先住民族のアイデンティティを手に入れました。しかし、先住民として育てられなかったため、自分のアイデンティティがわからず、大人になってから自分のアイデンティティを探すために現代風の生活をしていない先住民の住むビーチを訪れたり、先住民の服を着るようになったといいます。このように、台湾は原住民の人の権利を十分に保護しているとは言えず、政府には多くの課題があることがわかりました。

ここではこの二つの場所について振り返りましたが、これらの場所でマイノリティの方のお話を伺ったことで自らを開き、多様性を受け入れる姿勢が身についたと思います。日本ではジェンダー平等や少数民族保護と言いつつも、それらを実生活の中で考える機会が少なく、当事者以外の人には理解しようとする姿勢が欠如していたり、はたまたその存在自体を知らなかったりということがあります。しかし、台湾では多様性を受け入れるという考えが多くの人に広まりつつあるため自然とそういう話をする機会も多く、オープンに会話できるという良さがあるなと感じました。私自身、日本でのジェンダー問題についてより意識を馳せようと思えることができました。



(原住民カフェにて)

ダイバーシティ班

J1-220115 出水 喜太

1.2/20(月)

1-0.導入

台湾のジェンダーギャップ指数はアジアではトップレベルを誇っています。20日は、それに貢献していると考えられる2つの施設を訪問しました。台湾での性的少数者の方々や彼らへの支援、そして台湾での性教育の実態について、現地で各分野の最前線に立っている方のお話を聞くことで、知ることができました。

1-1.台湾同志ホットライン協会

まずは、性的少数者やその関係者の方々を、この協会がどのように支援しているのか、というお話をいただきました。この協会は、性的少数者やその関係者の方々の相談を、電話で受けることを主な目的としており、「家庭チーム」「トランスジェンダーチーム」「AIDS チーム」「高齢者チーム」などに分かれ、それぞれのチーム名に対応する当事者や関係者の方々の相談を受けるという仕組みになっています。なお、これまでに学校などでの講演を279回行ってきた「教育チーム」など、電話相談以外のチームもあります。

次に、協会での体験に関するお話をいただきました。具体的には以下の通りです。

- 講師の方が初めて取った電話で、自身が性的少数者であることについて『恥知らず』と罵倒された
- 協会が出した、性的少数者とその家族に関する本が1万部以上売れ、子どもがカミングアウトするのに使われることもある
- 設立当初は性的少数者の基準に関する質問が多かったが、最近は人間関係の相談が多い
- 台湾のプライドパレードには、さまざまな分野のNGOの方々が参加する
- 10回の電話で解決することも、解決に10年以上かかることもある
- 講演会を行う際は、カミングアウトする
- 主に40・50代の方々は、「家庭を継承する」という意識に加え、自身の時代は性的少数者が処罰されたという背景を持つ
- 2016年までは中国大陸の団体とも交流していたが、習近平国家主席の態度硬化により最近交流が厳しくなっている

1-2.台湾ジェンダー平等教育協会

この協会は「教材の製作」「学校や教師、公務員や企業への講演」「政策へのフィードバック」を主に行っています。

スウェーデンでの進んだ性教育を参考に教材の製作を行っているのですが、代表的なものに、小学5年生から中学3年生を対象とした動画教材があり、LGBTや人間関係、性暴力などを扱っています。この教材の背景には、台湾では性教育が義務となっているにもかかわらず、教材が不足しているという現状があるとお聞きしました。

講演に関しては、これまでに319回行い、受講者は11,271名いたそうです。特に教師や公務員、企業への講演を積極的に行っています。その背景には、台湾において本格的に性教育が行われ始めたのは、現在の30代の方々の学生時代の頃からであり、それ以上の世代への教育が重要視されている、という事実があるとお聞きしました。1-1で前述した、「主に40・50代の方々は、『家庭を継承する』という意識に加え、自身の時代は性的少数者が処罰されたという背景を持つ」ということとの繋がりが見えてきます。

政策に関する話題では、ジェンダーレストイレの話がありました。従来の男子トイレを流用する施設が出てくるなど、問題の本質的解決には至っていない部分もある、という話が印象的でした。

更に、この協会の活動と密接に関わっていると考えられる「性別平等教育法」に関するお話もいただきました。台湾における進んだ性教育の象徴だという印象を受けましたが、その成立の背景には、2000年に起きた「葉永鋳事件」という悲しい事件がありました。女の子みたいだという理由でいじめを受けていた葉永鋳さんという少年が死に至った、というものです。その死因には、そのいじめが関わっていたと言われていました。このような過去の悲劇を他人事とみなすことなく、自分事として考える姿勢が、更なる悲劇を抑止し、皆が住みやすい社会の実現に繋がると考えました。

2.2/22(水)

2-1.露瑪恪

原住民の子孫の方が運営するカフェです。1人の原住民の方が何を考えているのか、何を求めているのかを、生の声を通して知るといって、貴重な経験ができました。原住民の方々には現在金銭的援助がなされていますが、今回お話ししてくださった方が求めていたのは、歴史や文化、特に日本統治時代の独自の文化の尊重でした。“Every individual story makes our culture.”という言葉が印象的です。

ある問題について考える際に、具体例として当事者の方々の考えに実際に触れてみる大切さを再認識しました。同時に、さまざまな立場の方々のお話を聞いてみることも大切ですね。

2-2.文萌樓

日本統治時代に性産業が行われた場所で、現在はそれについて説明する施設となっています。当時の性産業の実態のほか、台湾の性産業の現状についてもお話をいただきました。

当時の性産業は警察の保護下にあり、緊急時の出勤や従業員への細かい検査などを行っていた、

ということが印象的でした。

また、台湾の性産業は陳水扁が台北市長時代に違法化し、一方で争いの末に文萌楼などの施設が「古跡」に認定される、という流れをたどっています。現在は、コロナ禍で性産業従事者が十分に保護されなかったことが問題視されています。フェミニズム運動の中で、女性を（身体的に）保護するために性産業をなくすべきという意見と、女性を（経済的に）保護するために性産業を存続させるべきという意見に二極化しているという話が印象的でした。

正直、これまでの自分にとって、性産業は無縁のものでした。しかし、今回初めて性産業やそれをめぐる状況について触れたところ、上記のように多くの学びを得ることができ、さまざまな分野に触れることの大切さを再認識しました。

2-3.阿嬤家

台湾における慰安婦を扱う博物館です。「阿嬤（アマー）」は、閩南語で「おばあちゃん」の意味で、「阿嬤家」は、設立者が初期に出会った慰安婦の方が60代くらいであったこと、慰安婦の方々が生まれてからおばあちゃんになるまでを扱っていること、「家」に「安全」「温かい」というイメージがあることに由来しています。

特に印象的であったことを箇条書きで整理していきます。

- 「食堂スタッフ募集」「看護師募集」などという謳い文句で騙し、慰安婦にされる
- 戦後は社会的差別により、経験を話せなかったり、出産できなくなったりする
- 台湾慰安婦の象徴は「葦」（聖書にて、強さの象徴として描かれている）
- 慰安婦としてのつらい経験を乗り越えるのに、宗教がきっかけとなることも
- 「阿嬤家」は、台湾の小学3年生向けに絵本を制作している
- 1999年からの日本での民事裁判では全て敗訴
 - しかし、2000年に模擬裁判として行われた東京裁判では勝訴
 - 模擬裁判に法的効果はないが、知名度向上や戦争内での性暴力の抑止に繋がる
- 慰安婦の方々に自分の身体図を描いてもらおうと、彼女たちが抱えている辛さが分かる

今まで「慰安婦」といえば、韓国における慰安婦や、それに関する日韓の意見の対立を思い浮かべることがほとんどでしたが、今回の体験を通し、慰安婦そのものに焦点を当てて学べたこと、また広く取り上げられる視点からだけでなく、複数の視点から物事を考えることの大切さを再認識できたことは、貴重な経験だと考えます。

3.まとめ

今回は「台湾におけるダイバーシティ」というテーマを設定して現地調査を行い、現地だからこそ聞けるお話や、現地ならではの資料を通し、前述のように多くの学びを得ることができました。さて、次はそれを活かしていく必要があります。今回の学びは、これから多様性について考えていく上での基礎知識として大いに有用なものだと思うので、今後多様性に関する話題に触れていく際に、今回得た知識を基礎に深く考え、それぞれの話題に真剣に向き合うようにしてい

たいと考えました。

2022年度台湾研修・事後課題

1. 活動の記録(国立台湾歴史博物館)

台南滞在の最終日である19日の午後、チャーターバスを使い全員で国立台湾歴史博物館を訪れた。博物館の入り口で2グループに分かれ、石器時代から1900年代末までの台湾の歴史を時系列に沿って、案内していただいた。

建物は天井が高く開けており、展示では文字だけでなく蠟人形や模型、映像、現物など様々なコンテンツが組み合わされていた。まず我々は先史時代から大航海時代の展示へと案内された。ここでは台湾が他国に占領される前いかなる姿をしていたのか、また実際に取引されていた商品などが説明されていた。

その後オランダ統治、鄭氏政権、清朝の統治の展示を抜けると、船に乗って中国から台湾に違法で移住する人々の模型、また増えていく移民によってアイデンティティ喪失の危機に陥る台湾原住民の姿を見ることができた。次に案内されたのは台湾の農産業に関する展示だ。台湾の独特な気候によって様々な農業が可能になっていることを学ぶことができた。

日本統治時代は台湾の歴史において非常に大きな意味を持つため、次に案内された日本統治時代に関する展示はとても大きかった。日本は台湾に高圧的な統治と近代的な文化をもたらしたという統治の二面性や太平洋戦争化における台湾の様子などが説明されていた。第二次世界大戦後、独立した台湾については日本統治時代に比べるとあまり展示は大きくなかったが、台湾の国際的な地位をめぐるディベートはいまだに続いており台湾にとって非常に重要なものであることが強調されていた。



ガイドさんによる一通りの説明が終わった後、1時間程度自分らで興味を持った展示を回る時間が取られた。私はSun Moon Lakeに興味を持ったのでその展示にもう一度向かった。台湾がこの湖で水力発電所を建設しようと決めたのは1918年。実際に完成したのは1934年だったが、この発電所だけで当時の台湾の発電量の1/3を占めていたという。

自由行動の1時間が終わった後、私たちは博物館の館長の張氏を始め、台湾の歴史などを専門とする研究者の方々に話を聞く機会があった。時間が押していたため、日本が太平洋戦争に突入した際の台湾人の様子について興味があった私は、全体の質問が終わった後、個人的に張氏に質問を試みた。張氏の回答は以下のものであった。台湾の若者の中には、日本に統治されている台湾が当たり前であり、また日本が台湾を近代化させたという良い印象を持っている人が多かったため、日本への愛国心が比較的強く、太平洋戦争における日本の勝利を素直に喜んでいたものが多かった。それに対して、日本統治時代の始めの方を知っている高齢の人々の中には日本に対してあまり良い印象を持っていない人も多く、日本が戦争に負け日本の統治から解放されることを望んでいるものも多かったという。

2. エッセイ

私は今回の台湾研修にダイバーシティ班の一員として参加した。初年次ゼミナールでも日本のセクシュアル・マイノリティの現状や同性婚についての論文を書いた私は、アジアで初めて同性婚を法的に認めたという、一見非常にリベラルな台湾の内情に興味を持った。私たちの班が赴いたのは、セクシュアル・マイノリティの方に相談の窓口を設ける台湾同志ホットライン協会、ジェンダー平等教育実現のために講演や教材作成などを行う台湾性別平等教育協会、台湾の性産業の記録が残された文萌楼、慰安婦の記録が残されたあまの家、台北に住む原住民の方が営むカフェであるLumaqなどである。これらのグループワークを通して、私は少数派に対して寛容な台湾の姿と、その不十分さ、また権利向上のために戦う少数派の人々の姿を目にすることができた。

日本では、現行の同性婚を認めない法律は違憲であると訴える裁判や、アジアの中で見ても参加者の多い東京でのプライドパレードなど、性的少数派の人々が声を上げるシーンは多く見られるが、彼らの努力の社会的認知や目的の達成は実現できているとは言えない。これに比べて、台湾では性的少数派の人々が自由に声を上げる機会が多く、同性婚が認められているという観点からしても、日本よりも性的少数派が住みやすい環境であると思える。しかし、合法化された同性婚も、国民投票によって異性婚と同じ地位を得ることができなかつたため、同性カップルは養子を取ることができない、また親や世間の目を気にして入籍できずにいる同性カップルが多く存在している、など台湾もまだまだ多くの問題を抱えている。

先住民に関しても、様々な民族が混在している中、台湾政府は16の先住民族を公式に認識し、彼らを保護しているという浅い知識を持ってグループワークに臨んだが、実際に先住民の方に話を聞いてみると少数派に寛容というイメージとはかけ離れた台湾の姿が見えてきた。公式に認識されている16の民族の他にも台湾の先住民族は10以上も存在しているほか、政府が提供する保護は、学費の補助や家賃の補助など経済面の援助ばかりで、彼らの人権や文化を守る具体的な政策はあまりなされていないようだ。目立たないながらも、アイヌ文化振興法や経済面での援助などの形で少数民族を保護している日本政府と比べてみても、台湾が優れているとは言いがたく、性的少数派、先住民族の待遇について、日本と台湾両国とも双方から学ぶことが多くあると実感した。

グループワーク 文萌楼 エッセイ

私の班のグループワークのテーマは多様性で、その中で私は文萌楼の部分を担当しました。そこで聞いた話についてこのレポートでまとめていきます。

文萌楼はかつては政府から許可を貰って売春を行っている娼館で、そこで働く女性は公娼と呼ばれていました。公娼制度が廃止された後、文萌楼は台湾における売春の歴史の記録として建物が文化遺産に指定されました。

公的に認められた娼館とそうでないものの最大の違いは法律による保護を娼館とその従業員が受けることができたことです。公娼館で勤務する女性は定期的に健康診断を受けることを義務付けられているなど衛生管理・性感染症対策を行っており、また警察に迷惑客からの保護を受けることもできました。当時の公娼館は性的なサービスを提供するだけでなく、性的な話題がタブーだった時代は数少ない性教育の場でもあって、一方でレズビアンや障がい者を受け入れたり、トランス女性がそこで自分の望む服装ができるなどオープンな場所でした。

このように文萌楼のような公娼館は社会的弱者の受け皿を担った反面、搾取があったのも事実です。公娼館で働くにはいくつかの規定を満たす必要があり、それを満たしていないがために登録なしで働く女性もいて、彼女らは公娼と違って法律による保護を受けることができませんでした。

文萌楼は日日春というセックスワーカーの権利団体の活動拠点でもありました。日日春は性産業は他の産業と変わらない労働であり、セックスワーカーも他の労働者と同等の地位・権利を得るべきだと主張しています。公娼制度が廃止された際、日日春は公娼の保護を求めて抗議活動を行っていました。これは、その時公娼館で働いていたセックスワーカー達が法律で認められていない、違法経営の娼館・風俗に行かざるを得ない状況が生まれてしまうためです。私たちが案内してくれたボランティアの男性の方(残念ながらお名前を連絡先を伺う機会はありませんでした)の父親も公娼館の客としてこの抗議活動に参加していました。近年の活動として日日春は新型コロナウイルスによるロックダウンの際に、セックスワーカーへの政府による支援を求める活動も行っていました。

以上のことから、台湾において公娼館は一般に社会的強者とされるヘテロセクシュアルでシスジェンダーの男性のためだけのものではなく、それを受け入れる風潮が社会になかった時にマイノリティや社会的弱者を受け入れた場所でもあり、台湾の多様性を語る際に重要な場所であることがわかりました。また、日日春が訴えるセックスワーカーの権利の問題は台湾独自のものではなく、日本および全世界でもある問題で、権利を認める必要性と搾取の事実があることを念頭に議論していくことが必要だとこの体験を通して思いました。

国立台湾歴史博物館では台湾の歴史を取り扱った展示を行っており、当時の人々の生活や文化の実態といった文字では伝わらないことを深く知ることができました。この体験を通して、日本と台湾の歴史を比較して書いていきます。

台湾は日本と同様に旧石器時代、新石器時代、鉄器時代を経て農耕文化が生まれ、そして信仰が生まれています。台湾も日本も中国から技術・文化・宗教の影響を受けましたが、台湾の方がより中国と親密な関係を築いていました。また、台湾は日本と比較して外国の介入が多いと展示を見て感じました。海外との交流はあっても元寇を撃退するなどして海外からの直接支配を受けなかった日本に対して、台湾は17世紀以降はオランダ・スペインの二分統治下にあたり、清朝の支配を受けています。同時に、台湾は多民族国家であることに自覚的だと思いました。日本はアイヌや琉球の人々の歴史について歴史の授業で取り上げてはいますが、教科書でもあまり踏み入った話はしていません。台湾ではというと、清朝時代に台湾に移民してきた漢民族と原住民の対立や力関係、また山岳地帯の少数民族との対立についても解説しています。

台湾では日本統治時代について日本よりもより詳しく取り上げていました。日清戦争後に日本の領土に組み込まれた後、台湾において日本によって設置された交番とその警官達が権力を持つようになりました。その後、日本語教育を行い、台湾の知識人にとって日本語の知識は必須となりました。日中戦争が始まると日本との同化政策は加速し、日本的な姓名への改名や天皇崇拜の強化だけでなく、日本をアジアを欧米の植民地主義から救う救世主として描くプロパガンダが使われていました。

以上から、台湾は日本と同様外国から多くの影響を受けた島国という点は共通していて、一方で多民族国家としての側面を持っていることがこの体験を通してわかりました。

博物館班 グループワーク

木村真子

20 日午後

真理大学の朱珉萱さんに同行していただき、グループワークを行った。お昼は、朱さんに国立台湾大学の近くのお店に案内していただき、滷肉飯や豚の耳、猪血糕というもち米に豚の血を混ぜて固めたものなどを食べた。中でも滷肉飯は、ご飯に刻んだ豚肉をのせたシンプルな料理だが、ご飯が進む味付けでとても美味しかった。人気店だと思われ、店内は学生で混雑していた。

昼食後、台湾大学を訪れた。広大なキャンパスにヤシの並木があり、建物の外観は東大の1号館に似ているものが多かった。大学内で3つの博物館を見学した。

・人類学博物館

台北帝国大学時代に土俗人類学講座という部門が収集していた民俗学的な工芸品が展示されている。原住民の生活を記録した写真や、先祖を供養し子孫を守るために作られた木彫りの像などがあった。原住民が使用している服装や装飾品、道具なども民族ごとに分類して展示されていた。顔にVの字に刺青を入れている原住民の女性の写真があり、この形の刺青は機織りが得意なことを示すものだと朱さんに教えていただいた。

・校史館

台湾大学の歴史を紹介する場所で、学生の卒業証書や林文月教授が書いた「伊勢物語」の中国語訳の原稿などに加え、東大が台湾大学に寄贈した赤門の絵も展示されていた。建物はアーチ状の大きな窓がある洋風のデザインで、自習ができるカフェの一角のようなスペースもあった。



・動物博物館

海の生物についての展示が行われていて、スタッフの方が高速の中国語で展示品について解説して下さいました。ところどころ聞き取れる単語はあっても、それをつなぎ合わせるだけで内容を想像するのは難しく、後で朱さんに訳していただいでやっと理解できた。

次に、華山 1914 文化創意産業園区を訪れた。雑貨店が多かったが、現代の芸術家の作品が展示されている場所や、映画館もあった。レトロな建築を楽しみながら買い物をしたり映画を見たりできる、若者向けの場所になっていると感じた。

その後、地下鉄に乗って客家料理のお店に行った。店内には至る所に客家花布が飾られていた。客家人は生活の場を転々としてきた歴史があるため、客家料理には保存のきく乾物や漬物を使った料理が多いという特徴があるそうだ。今回食べた中にも、イカや干した豆腐を野菜と一緒に炒めた「客家小炒」という料理があった。他にも蒸し鶏、エビの入った春巻き、

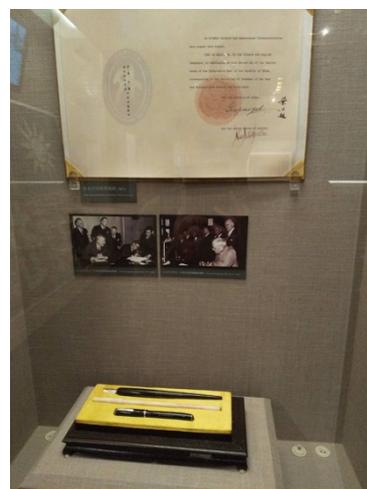
魚のフライをトマトソースで煮込んだものなど様々なメニューがあり、どれも美味しかった。予想に反して、客家料理には台湾でよく出会った独特な味がなく、日本人にも食べやすいと感じた。デザートには、仙草のゼリーや梅ジュースが出てきた。梅ジュースは漢方のような味がしたが、味の濃い料理を食べた後に飲むとさっぱりするよう感じた。まだ時間があったので、最後に台北 101 を見に行った。総統府に代わる台北のシンボルというだけあって、下から写真を撮ると建物全体が収まりきれないほどの高さだった。地下にあるお店でお土産を買い、ホテルに戻った。

22日

この日は3つの博物館を見学した。九州大学の Edward Vickers 先生に、各博物館について解説していただいた。

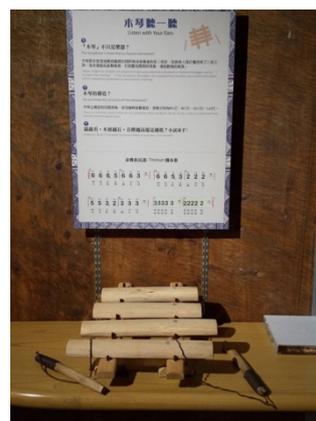
まず、朝食後に30分ほど歩いて国立台湾博物館に行った。国立台湾博物館は日本統治時代の1908年に設立された博物館で、当時は日本の研究者による、台湾の原住民や動植物に関する調査が行われていた。ちょうど博物館の歴史についての展示があり、当時採集された標本や作成された地図などが展示されていた。原住民の調査を行っていたのは、台湾を未開の地とみなし日本による統治を正当化するためであり、動植物の調査を行っていたのは、日本が近代文明すなわち科学をもたらす存在であることを示すことと、台湾で中心的な産業だった農業を行う上で、動植物の知識が必要だったことが理由であると Vickers 先生に教えていただいた。他に、台湾の歴史や自然に関する展示もあった。歴史に関してはゼーランディア城の絵や鄭成功の肖像画、米華相互防衛条約が締結されたときに使われた万年筆などの展示があった。また自然に関しては、台湾固有の動植物の標本や剥製の展示があり、展示品の解説には台湾の気候や地形が多様であることから動植物にも多様性が見られると書かれていた。国立台湾博物館ではこのような台湾独自の歴史・自然の展示によって、中国本土とは異なる台湾のアイデンティティを前面に押し出し、来館者に台湾の独自性を理解してもらうことを目指しているように感じた。

お昼は近くの食堂で米糕と肉団子のスープを食べ、電車とバスを乗り継いで故宮博物院に向かった。故宮博物院には北京の紫禁城に収められていた、歴代の中国王朝が所蔵していた文物が展示されている。これらの文物は元々北京で公開されていたが、日本軍の進軍を受けて国民党政府が南京、重慶へと運んだ。戦後、国共内戦で国民党が台湾に逃れるのに合わせてこれらの文物のうち優れたものが選ばれ、台湾へ運ばれた。国民



党は中国本土に戻る予定だったため文物の荷解きはせず、台中の倉庫に保管していたが、本土に戻れないことが明確になると故宮博物院の建設を開始した。故宮博物院は当時文化大革命が起きていた本土と対比して、台湾が中国文化の正統な継承者であることを示すものだった。共産党は、以前は文物の返還を迫っていたが、台湾と中国との繋がりを保ち、台湾が中国の一部であるという主張を支えるものとして、現在はむしろ共産党にとって故宮博物院を存続させる意義が高まっている。館内には青銅器、陶磁器、玉で作られた工艺品、書画などが展示されており、その精巧さや美しさは古代から続く中国文明の偉大さや皇帝の権威を象徴しているように感じた。

最後に、故宮から歩いてすぐの場所にある順益台湾原住民博物館を見学した。この博物館は自動車関連の企業グループがメセナ活動として設立した私立の博物館で、グループの理事長が長年収集してきた原住民に関する資料が展示されている。展示スペースは地下1階から3階まであり、各階に「服飾と文化」「生活と道具」などのテーマが設定されている。展示品は服装、刺繍、装飾品、占いに使う壺、楽器、土器など多岐に渡り、住居の模型などもあった。特に印象的だったのは、他の博物館に比べて体験型の展示が多かったことである。例えば原住民の楽器の演奏を聴けるようになっていたり、木琴に似た楽器が置いてあり、楽譜を見て実際に民謡のような音楽を演奏できたりした。また、地面に映し出された足形の通りにステップを踏むことで、原住民の踊りを体験できるスペースもあった。このような体験型展示によって、原住民の文化をより身近に感じられると思った。グループで行程を考えていたとき、故宮博物院のすぐ近くに原住民博物館をつくったのには何か理由があるのではないかと気になっていたため、博物館のスタッフの方に伺ったが、特に意図はなく、設立した企業がたまたまその場所に土地を所有していたためということだった。



3つの博物館の見学を終え、故宮博物院に併設されている庭園で少し休憩してから、士林夜市に行って胡椒餅などの台湾のローカルグルメを楽しんだ。台南から台北に移動したとき、台北の方が道路が整備されていて道幅も広く、夜でもビルの明かりが煌々とついていることに台南との格差を感じてしまったが、夜市にも台南との違いが見られ、台北の夜市の方が整然としているように感じた。

今回複数の博物館を見学して、博物館によって展示内容や目指す方向性に大きな違いがあることが分かった。台湾では多様な民族、文化が混在しているからこそ、その違いが顕著に見られるのだと考えられる。加えて、一つの博物館においても展示内容や方向性は時代によって変化していることも分かった。これも、政権の立場が国のあり方を左右するほど全く異なるものであるという台湾の特徴が背景にあると言える。博物館の調査によって台湾の特殊な状況が改めて浮き彫りになり、台湾への理解がさらに深まったと感じる。他の国・地域においても、台湾ほど違いが分かりやすくはないかもしれないが、複数の博物館の役割や

展示品を比較することで、その国・地域の歴史や政治情勢などを教科書とは違った視点から体験的に学ぶことができるのではないかと思った。

台湾研修 まとめ

吉田小乃果

台湾は多様なエスニシティが共生する国であり、様々な文化が織り交ざった、複雑な文化・社会構造をなしている。しかし、私は台湾研修に参加するまで、台湾は中華圏の文化のイメージが強く、原住民や日本、オランダ統治等、台湾に様々な歴史的なバックグラウンドがあることを曖昧にしか知らなかった。今回台湾研修に参加するにあたり、日本人が台湾に抱く、「中華圏」「親日」「繁体字」といったイメージを超えて、台湾をより深く理解することを目的として参加した。

グループワークでは、台湾社会においてどのように文化が共生しているのか、博物館を通して学ぶことを目的に主要な博物館を巡った。博物館の歴史的・政治的背景についても学んだ。国立台湾博物館、国立故宮博物院、順益台湾原住民博物館、国立台湾大学人類学博物館等の各博物館に加え、華山1914文創園區や客家料理店も訪れ、現地の人々の生活においての台湾文化についても学んだ。台南では紅毛城もめぐり、オランダ統治についても学ぶことができた。

国立台湾博物館では、台湾という土地の歴史や自然についての展示が行われており、台湾としてのアイデンティティが表現されていた。台湾の全体像がわかる展示であり、様々な民族、文化、宗教が一つの展示室に紹介されている。これこそが、台湾とは何かを端的に表しているように感じた。2階の常設展のうち、歴史についての展示室の最後に、台湾に暮らしたそれぞれの人々がほかのエスニシティの人々を表現したものを展示しているスペースがあった。オランダ人の描いた台湾茶のポスターなどが飾られ、人々がどのように他者である別のエスニシティの人々を見ていたかがわかる。台湾に暮らす人々にとって、歴史的に異文化は身近なものであり、様々な見方でかかわってきたということがわかる。

一方で国立故宮博物院は、中華圏の文化を前面に押し出したものであり、中国王朝のきらびやかさ、華やかさが強調されていた。王朝の宝物が美しいというだけでなく、台湾の中華圏としてのアイデンティティを示すものであるという印象を受けた。

グループワークで巡った博物館で最も印象的だったのは順益台湾原住民博物館だ。私立博物館で、原住民の人々の衣食住に加え、祭りや原住民のルーツについての展示もある。台湾の中にも、こうした固有の文化が存在することがとても興味深かった。台湾というと中華圏文化のイメージが強いが、原住民の文化は全く異なるものであり、東南アジアの諸民族に近い。原住民の文化を通じて、「中華圏としての台湾」ではない側面を知ることができたのが、台湾の多面性を垣間見るきっかけとなった。原住民について学ぶ中で、ふと、自分は日本の文化の多様性についてどのくらい知っているだろうかと思った。日本には先住民族であるアイヌの人々の文化が存在する。失われつつあるアイヌの文化について十分に学べていないのではないか。台湾原住民について学んだことで、日本国内の文化の多様

性にも目を向けることができた。

また、台湾の日常的な場面においても、こうした文化の多様性は見受けられた。華山1914 文創園區には日本統治時代の建築物が並び、「日式○○」と書かれた食べ物が夜市で売られている。また、MRTのアナウンスでは台湾華語だけではなく、台湾語や客家語も使われている。テレビでは客家語のチャンネルがあり、客家料理店が点在する。原住民の人々のコミュニティーが存在し、博物館が作られている。こうした台湾の様々な側面を見ていくうちに、自分が台湾というものを表面的にしか知らなかったことがわかっていった。1 週間台湾という土地に滞在したことで、他の国に対する「イメージ」というものが浅く一面的になりがちなことを痛感した。

一方で、台湾は単に多様な社会というだけではなく、その奥底には複雑な歴史があることを感じた。先述したように、台湾には日本文化が浸透している例が見受けられる。国立台湾博物館は日本人研究者の成果を率直に展示する一方で、国立台湾歴史博物館では日本統治時代に日本が行ってきた差別や厳しい植民地支配についても、赤裸々に展示されている。台湾から見た日本は、ポジティブな面もネガティブな面も持つ、とても複雑なものなのだと感じた。だからこそ、一概に「台湾は親日だ」と言うことには危険性が伴う。

この台湾研修を通して、ある国について学ぶことは、とても有意義で興味深いことなのだと感じ、学びに対するモチベーションが高まった。例えば、台湾の文化の共生について学ぶことで、これからの時代、どのように多様性を包括した社会を構築していけるかを考えるヒントになるのではないか。今、日本は数少ない単一民族国家であるといわれている。日本語を使い、日本文化の中で生活する人がほとんどを占めている日本では、あまり異文化や民族を意識せずに生活している。しかし、グローバル化の中で、外国人労働者の受け入れ進んだことで徐々に異なるバックグラウンドを持つ人が日本に暮らすようになりつつある。これから先、台湾のような多様なバックグラウンドを持つ国から学ぶことはとても重要になってくるだろう。台湾研修を通じ、他の国の歴史、文化、言語についてもっと学びたいと思うようになった。日本に帰国してから、台湾の歴史や、台湾の歴史に大きくかわる中国本土の歴史についても学びたいと思い、書籍を利用して学び始めた。私はもともと特段東アジア圏に関心が高かったわけではないが、研修に参加し、台湾という土地について学ぶ機会を得たことで、深い関心を持つことができた。海外に出てみることで、思わぬ世界に出会うことがある。興味関心が広がったこと、台湾を通して日本を俯瞰することができたことは、私にとって非常に貴重な経験になった。食わず嫌いをせず、たくさんのことを学んで興味関心を広げていくことで、異文化理解につながっていくのだということ学べた。

最後になりますが、研修の引率をしてくださった阿古先生をはじめ、この研修にかかわってくださったすべての方に心よりお礼申し上げます。

台湾研修 5班(博物館班) エッセイ

鍵本 実佑

[行程]

- 2/19午前(台南) 安平古堡、赤崁楼
2/20午後(台北) 台湾大学博物館群(校史館、人類学博物館、動物博物館を訪問)、
夕食に客家料理



左は客家料理の写真

- 2/22午前(台北) 国立台湾博物館
2/22午後(台北) 国立故宮博物院、順益台湾原住民博物館

グループワークでは上記の行程で台湾の歩んだ複雑な歴史に触れ、2/23の発表会では博物館が台湾の社会に与えた影響についての発表を行った。発表では、台北で訪れた4種類の博物館を現在の展示方法などの共時的視点と博物館の設立経緯及び今までの歴史などの通時的視点から比較した。順益台湾原住民博物館は今回訪れた博物館の中で唯一の私立博物館であったことから、他の博物館と順益台湾原住民博物館との比較も行った。これらの比較から、博物館が各時代において社会からの要請を受け変化すると同時に博物館を訪れる人々を通じて社会に影響を与えるという役割を担っていることや、台湾の歴史的背景や現在の台湾を知る場所として博物館が機能していることを再確認した。

グループワークの行程では、オランダ時代と鄭成功時代の2つの壁が残る安平古堡に訪れると1930年に日本が改修した建物を発見できたり、日本が1908年に台湾総督府として建てた国立台湾博物館を訪れ国民党政府の時代に一度はロビーから倉庫に移動され今は以前より目立たない場所に置かれている児玉源太郎総督と後藤新平民政長官の銅像を実際に探すことができたり、台湾にいる漢民族の中でホーロー人と比べて相対的に少数派である客家人の料理を食べて客家料理が日本人の口にあったものだと知ったりと、台湾の複雑な歴史とダイバーシティの存在を実感した。



(左から安平古堡にある鄭成功時代の城壁、ゼーランディア城外郭、国立台湾博物館の児玉源太郎総督と後藤新平民政長官の銅像)

そのようなグループワークの中での体験を通して私が特に興味を持ったのは、台湾における多様性の受け入れ方や多様な集団の共存の仕方である。その中でも最も人々の生活に結びついた例として私が注目したのは、MRTの車内の優先座席(台湾では「博愛座」と呼ばれる)の位置である。優先座席が他の席と別の区画にまとめられている日本の電車と違い、台湾では優先座席が一般の席と同じ区画に設けられているのだ。意図的なものかは分からないが、私にはこの配置が「優先されるべき」とされる人々が一般の人々と同じ社会で孤独を感じることなく生きやすい環境を作ろうという意思を示しているように感じられた。台湾に来る前には日本で優先座席が車両の端に固められて設置されているのを見ても何も考えなかったが、台湾に来て必ずしもそのような配置がなされている訳ではないと知ることができたのは新たな発見であり、今回のように日本と違うシステムや文化に触れ新たな問題意識を得るという経験は非常に刺激的であった。

台湾研修グループエッセイ（故宮博物院）

J1-220113 杉本英輝

台湾におけるグループワークでは多くの博物館を訪れた。博物館と言ってもそれぞれが持つコンセプトや特徴は多岐にわたり、例えば故宮博物院ならば展示のメインテーマは中華、順益台湾原住民博物館ならば台湾の原住民であった。特に故宮博物院はその存在意義が時代の流れと共に変容しているということを下調べで学んだ。

故宮博物院は清朝最後の皇帝である溥儀がいなくなった紫禁城で美術品が公開されたのがはじまりだった。つまり、最初は台湾ではなく大陸中国に拠点を置いていたということである。その後、日中戦争の戦火を逃れて美術品は四川などに疎開したが、第二次世界大戦後の国共内戦の激化でそれらは国民党政府によって台湾に運び出された。蒋介石は大陸反攻を計画していたため、はじめは美術品を展示する大きな施設を台湾につくらなかった。しかし、参観客をより多く集めるという目的で台北に現在の故宮博物院を建設し、のちに大陸で文化大革命が起きるとそれは中華民国政府のある台湾こそが中華文明の正当な後継者であることを誇示するという政治的な意義を持つようになった。最近では、博物院自体が政治的意義を持つということはないが、中台の政権が歩み寄ると北京と台北の博物院が共同展示会を開催し、逆に両国関係が悪くなると台湾の泛緑連盟などが台湾の独立と引き換えに北京への美術品返却を主張するなど博物院が政治情勢の影響を受けていることは否めない。

実際に故宮博物院を訪れて、いわゆる中華の展示品が多いことに驚いた。事前学習の段階でそのことは分かっていたが、いざ周代から清代までの数多くの展示品を目の当たりにして「これが約4000～5000年程の中華の歴史が生み出した芸術品か。」と感嘆せずにはいられなかった。

李登輝政権のもとで民主化が進んで以降、台湾社会は多様化しつつある。それに伴い、台湾社会における故宮博物院の立ち位置や役割はこれからも変容していくだろうが、その動向を注視していきたい。



←目玉の展示品と思われる肉をあらわした作品